

流山新市街地区 埋蔵文化財調査報告書 9

— 流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、
流山市駒木野馬土手 —

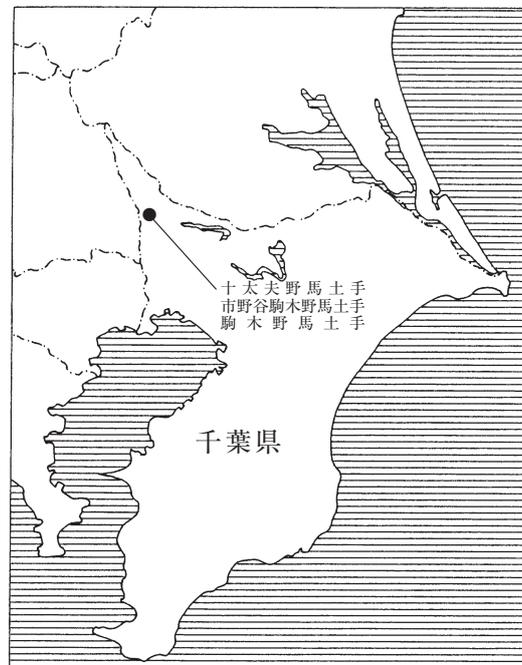
平成 29 年 3 月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

流山新市街地区 埋蔵文化財調査報告書 9

ながれやましじゅうだゆうのまどて ながれやまし かしわしいちのやこまきのまどて
— 流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、
ながれやましこまきのまどて
流山市駒木野馬土手 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第767集として、独立行政法人都市再生機構の流山新市街地地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手および流山市駒木野馬土手の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、近世の小金五牧の中のひとつである上野牧および高田台牧に関連する野馬土手などの遺構が検出されており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 平 林 秀 介

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による流山新市街地地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市初石5丁目4番地ほかに所在する十太夫野馬土手（遺跡コード 220-048）、駒木野馬土手（遺跡コード 220-060）、市野谷駒木野馬土手（遺跡コード 220-056・217-035）である。
各野馬土手は多年次にわたって調査が実施され、調査回数では調査区相互の関係が不明となるため、1から番号を付け直した。1-(30) → 2-(25)。(00)内の数字は調査年次の番号となる。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、上席文化財主事 池田大助が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、流山市教育委員会、柏市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1:25,000 地形図「流山」(NI-54-25-1-2) 平成17年8月発行。
- 8 本書で使用した航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年3月撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北であり、日本測地系（国家標準座標第Ⅸ系）に基づいている。なお、抄録に記された座標値は、国土地理院が提供する世界測地系変換（TKY2JGD Ver1.3.80）により変換したものである。

本文目次

序 文
凡 例
目 次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	1
第2節	遺跡の位置と環境	3
1	遺跡の位置と周辺地形	3
2	遺跡の歴史的環境	3
第2章	検出された遺構と遺物	8
第1節	野馬土手の調査	8
1	十太夫野馬土手	8
2	市野谷駒木野馬土手	41
3	駒木野馬土手	41
第2節	出土遺物	41
第3章	まとめ	48
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	グリッド設定法	1	第8図	十太夫野馬土手3-(24)	14
第2図	遺跡の位置及び周辺の地形、 周辺遺跡分布図(旧況図)	5	第9図	十太夫野馬土手4-(14)	15
第3図	流山新市街地地区内遺跡位置図(現況図)	6	第10図	十太夫野馬土手5-(20)	16
第4図	上野牧及び高田台牧範囲概要図 (1/25,000)	11	第11図	十太夫野馬土手6-(7)	17
第5図	野馬土手調査区・野馬土手概要図 (1/5,000)	付図	第12図	十太夫野馬土手7-(6)	18
第6図	十太夫野馬土手1-(30)A区・B区	12	第13図	十太夫野馬土手8-(22)	19
第7図	十太夫野馬土手2-(25)A区・B区	13	第14図	十太夫野馬土手9-(16)	20
			第15図	十太夫野馬土手10-(8)	21
			第16図	十太夫野馬土手11-(11)	22
			第17図	十太夫野馬土手12-(4)	23
			第18図	十太夫野馬土手13-(21)	24

第19図	十太夫野馬土手14-(18) ……	25	第31図	十太夫野馬土手26-(26) ……	37
第20図	十太夫野馬土手15-(1) ……	26	第32図	十太夫野馬土手27-(9) ……	38
第21図	十太夫野馬土手16-(2) A区・B区…	27	第33図	十太夫野馬土手28-(15) ……	38
第22図	十太夫野馬土手17-(10) ……	28	第34図	十太夫野馬土手29-(19) ……	39
第23図	十太夫野馬土手18-(17) ……	29	第35図	十太夫野馬土手30-(29) ……	40
第24図	十太夫野馬土手19-(23) ……	30	第36図	市野谷駒木野馬土手1-(1) ……	42
第25図	十太夫野馬土手20-(27) ……	31	第37図	市野谷駒木野馬土手2-(2) A区・B区 ……	43
第26図	十太夫野馬土手21-(12) ……	32	第38図	駒木野馬土手1-(1) ……	44
第27図	十太夫野馬土手22-(3) ……	33	第39図	駒木野馬土手2-(2) ……	45
第28図	十太夫野馬土手23-(5) ……	34	第40図	駒木野馬土手3-(3) ……	46
第29図	十太夫野馬土手24-(28) ……	35	第41図	調査区内出土遺物……	47
第30図	十太夫野馬土手25-(13) ……	36			

表目次

第1表	各野馬土手調査経歴一覧……	2	第4表	市野谷駒木野馬土手調査概要一覧……	43
第2表	新市街地地区周辺遺跡一覧表……	7	第5表	駒木野馬土手調査概要一覧……	44
第3表	十太夫野馬土手調査概要一覧……	9			

図版目次

図版1	遺跡周辺遺跡航空写真			1 トレンチセクション (東から)
図版2	十太夫1-(30)			十太夫5-(20)
	調査前全景 (北から)			2 トレンチ完掘 (東から)
	1 トレンチセクション			2 トレンチ完掘 (西から)
	十太夫2-(25)			十太夫6-(7)
	北側土手全景 (南南西から)			調査前風景 (北から)
	5 トレンチ (B区) 完掘 (北北東から)			調査前風景 (南から)
	十太夫3-(24)			十太夫7-(6)
	調査前風景 (南東から)			調査前風景 (北から)
	A トレンチ (北端) 完掘 (南から)			2 トレンチセクション (南西から)
	C トレンチ完掘 (東から)		図版3	十太夫8-(22)
	SK-001 (C トレンチ内) (東から)			4 トレンチ西側部分 (南東から)
	十太夫4-(14)			10 トレンチセクション (北西から)
	調査前風景 (北から)			十太夫9-(16)

- 調査前状況
 調査前状況（北から）
 調査前風景（南から）
 3 トレンチ南壁セクション（北西から）
 十太夫10-（8）
 調査前風景（北から）
 土手掘削状況（南から）
 2 トレンチ調査状況（北から）
 1 トレンチ北面セクション（南から）
 十太夫11-（11）
 1 トレンチセクション（東から）
 2 トレンチセクション（南西から）
 十太夫 12-（4）
 調査前風景（北から）
 全景中央部（南から）
 全景南側（西から）
 全景北側（南東から）
 図版4 十太夫 12-（4）
 5 トレンチ中央（南東から）
 4 トレンチ溝セクション（南から）
 十太夫 13-（21）
 西部（南から）
 1 トレンチ
 十太夫 14-（18）
 調査前風景（南東から）
 調査前風景（南から）
 調査前風景
 1 トレンチ
 十太夫 15-（1）
 調査前風景
 1 トレンチセクション（北西から）
 十太夫 16-（2）
 調査前風景
 十太夫 16-（2） B
 B区セクション
 十太夫 17-（10）
 調査前風景（南東から）
 3 トレンチ土手セクション（西壁）
 （東から）
 2 トレンチ完掘（馬堀）（北から）
 1 トレンチ溝セクション（西壁）
 （南から）
 図版5 十太夫 18-（17）
 調査前風景（西から）
 調査前風景（西から）
 3 トレンチ完掘セクション（東から）
 全景（西から）
 十太夫 20-（27）
 調査前風景（南から）
 3 トレンチ完掘セクション（南から）
 十太夫 21-（12）
 調査前風景（南東から）
 3 トレンチ完掘
 十太夫 22-（3）
 調査前風景
 セクション
 十太夫 23-（5）
 調査前風景（南から）
 調査前風景（北から）
 1 トレンチ土手完掘
 2 トレンチ土手セクション
 十太夫 24-（28）
 調査前風景（南から）
 1 トレンチ土手セクション（東から）
 図版6 十太夫 24-（28）
 1 トレンチ堀セクション（東から）
 3 トレンチ確認状況（南西から）
 十太夫 25-（13）
 調査前風景（南から）
 1 トレンチ土手セクション
 十太夫 26-（26）
 全景（北西から）
 2 トレンチ完掘（北東から）
 十太夫 27-（9）

調査前近景（南から）
1 トレンチ完掘
十太夫 28- (15)
調査前風景（北西から）
1 トレンチ西側（北から）
十太夫 30- (29)
調査前風景（東から）
1 トレンチ完掘土手セクション
市野谷駒木 1- (1)
調査前風景（北東から）
調査前風景（西から）
11 トレンチセクション（北東から）
2 トレンチセクション

図版7 市野谷駒木 2- (2)
西区調査前風景（南西から）
東区調査前風景（東から）
2 トレンチ確認状況（北西から）
4 トレンチ確認状況セクション
（南から）
駒木 1- (1)
調査前状況（北東から）
1 トレンチセクション（西から）
駒木 3- (3)
調査前全景（南から）
調査区全景（南から）
十太夫調査風景
十太夫調査風景
市野谷駒木調査風景
駒木調査風景
調査区内出土遺物（1）十太夫野馬土手
調査区内出土遺物（2）市野谷駒木野馬
土手

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

茨城県つくば市と都心をつくばエクスプレス（常磐新線）の沿線開発構想の一環として流山市新拠点構想が、独立行政法人都市再生機構により計画された。

この構想にあたり、流山市内に新設される流山おおたかの森駅を中心とした約40haという広大な開発計画が構想された。この事業に当たり、独立行政法人都市再生機構より千葉県教育委員会宛に計画地内に所在する「埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて」の照会文書が提出された。その結果、開発計画の周辺地域には多数の遺跡が存在しており（第2・3図、第2表）、また開発区域内には包蔵地14か所、野馬土手3条が存在しており、その取り扱いについて千葉県教育委員会との協議が行われ、住宅地、緑地など、現状保存の策定が行われ、現状保存が困難な区域については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、公益財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

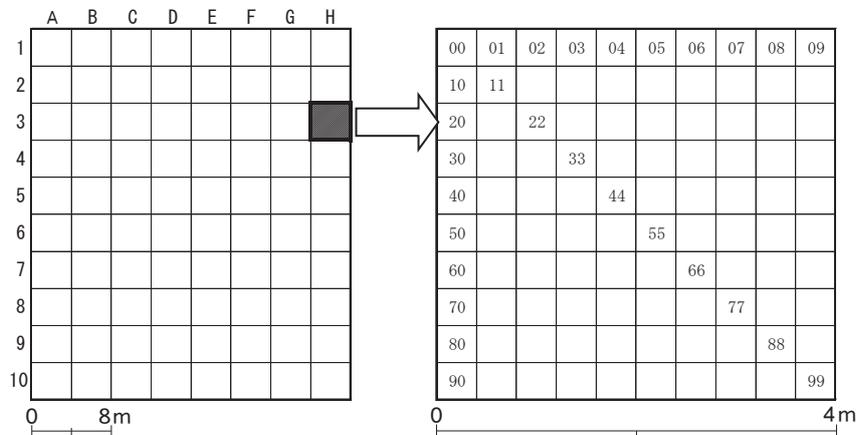
2 調査の方法

流山新市街地地区では、事業範囲全域を公共座標に基づく方眼網（日本測地系・国家標準直角座標第IX系）で覆い、全遺跡の遺構・遺物についてその位置を明確にしている（第3図）。

方眼は40m×40mを大グリッドとし、その中を4m×4mで100分割し、遺構・遺物に関する記録はすべてこの方眼網によって記録されている（第1図）。また記録類に表示した標高は東京湾平均海面（TP）による海拔である。

野馬土手の発掘調査に先行し、対象区域の地形測量を1/200で実施し、その現状を図化し、引き続き土手の断面及び盛り土の形状および土手内外の溝の状況を観察、記録した。

なお、野馬土手の調査は、平成12年度より平成26年度の長期にわたり、枝番号を調査順に付して実施したため、隣接する調査区において連続するものとはなっていない。



第1図 グリッド設定法

第1表 各野馬土手調査経歴一覧

十太夫野馬土手 調査経歴一覧

年 度	調査次	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)	調 査 期 間	担 当 者	調査事務所長 (調査課長)	調査研究部長 (センター長)
			上層	下層					
平成12	1	72	12	-	-	平成13年2月1日～平成13年2月13日	主 席 研 究 員 雨宮龍太郎	及川 淳一	佐久間 豊
平成13	3(2)	45	12	-	-	平成13年9月3日～平成13年9月17日	上 席 研 究 員 久高 将勝	田坂 浩	佐久間 豊
	3(3)	33	12	-	-	平成13年9月17日～平成13年9月28日	副 所 長 岡田 誠造	田坂 浩	佐久間 豊
	4	1,392	96	-	-	平成14年2月1日～平成14年2月28日	上 席 研 究 員 立石 圭一	田坂 浩	佐久間 豊
平成14	5	512	48	-	-	平成14年7月16日～平成14年7月22日	副 所 長 岡田 誠造	田坂 浩	斎木 勝
	6	48	6	-	-	平成14年11月1日～平成14年11月13日	上 席 研 究 員 竹内久美子	田坂 浩	斎木 勝
	7	289	24	-	-	平成15年1月7日～平成15年1月10日	副 所 長 岡田 誠造	田坂 浩	斎木 勝
平成16	8	400	40	-	-	平成16年10月18日～平成16年11月5日	副 所 長 高橋 博文	田坂 浩	矢戸 三男
	9	250	250	-	-	平成16年12月1日～平成16年12月6日	副 所 長 高橋 博文	田坂 浩	矢戸 三男
	10	670	670	-	-	平成17年2月1日～平成17年2月14日	副 所 長 高橋 博文	田坂 浩	矢戸 三男
平成17	11	340	40	-	-	平成17年11月30日～平成17年12月2日	上 席 研 究 員 郷堀 英司	田坂 浩	矢戸 三男
	12	1,150	150	-	-	平成18年2月13日～平成18年2月28日	上 席 研 究 員 郷堀 英司	田坂 浩	矢戸 三男
平成18	13	260	20	-	-	平成18年6月19日～平成18年6月22日	主 席 研 究 員 雨宮龍太郎	田坂 浩	矢戸 三男
	14	650	58	-	-	平成18年7月10日～平成18年7月14日	主 席 研 究 員 雨宮龍太郎	田坂 浩	矢戸 三男
	15	580	68	-	-	平成18年10月23日～平成18年10月26日	上 席 研 究 員 渡邊 高弘	田坂 浩	矢戸 三男
	16	630	46	-	-	平成18年12月18日～平成18年12月28日	副 所 長 高橋 博文	田坂 浩	矢戸 三男
平成20	17	1,050	84	-	-	平成20年5月1日～平成20年5月9日	上 席 研 究 員 田井 知二	及川 淳一	大原 正義
	18	1,980	90	-	-	平成20年6月10日～平成20年6月13日	上 席 研 究 員 柴田 龍司	及川 淳一	大原 正義
	19	1,250	44	-	-	平成20年8月12日～平成20年8月13日	上 席 研 究 員 柴田 龍司	及川 淳一	大原 正義
	20	940	52	-	-	平成20年9月1日～平成20年9月5日	上 席 研 究 員 田井 知二	及川 淳一	大原 正義
平成21	21	800	36	-	-	平成21年4月20日～平成21年4月28日	主 席 研 究 員 雨宮龍太郎	橋本 勝雄	及川 淳一
	22	2,028	102	-	-	平成21年6月1日～平成21年6月17日	上 席 研 究 員 柴田 龍司	橋本 勝雄	及川 淳一
	23	580	53	-	-	平成22年2月22日～平成22年2月26日	上 席 研 究 員 田井 知二	橋本 勝雄	及川 淳一
平成22	24	393	45	-	-	平成22年7月1日～平成22年7月8日	上 席 研 究 員 矢本 節朗	橋本 勝雄	及川 淳一
	25	987	96	-	-	平成22年11月15日～平成22年12月8日	上 席 研 究 員 矢本 節朗	橋本 勝雄	及川 淳一
	26	1,066	74	-	-	平成23年2月1日～平成23年2月16日	上 席 研 究 員 矢本 節朗	橋本 勝雄	及川 淳一
	27	665	54	-	-	平成23年2月17日～平成23年2月24日	上 席 研 究 員 矢本 節朗	橋本 勝雄	及川 淳一
平成23	28	1,488	42	-	-	平成23年11月1日～平成23年11月15日	主 席 研 究 員 高橋 博文	橋本 勝雄	及川 淳一
平成27	29	633	14	-	-	平成27年6月10日～平成27年6月11日	上席文化財主事 岡田 誠造	(今泉 潔)	(小久貫隆史)
	30	763	77	-	-	平成28年2月17日～平成28年2月23日	上席文化財主事 岡田 誠造	(今泉 潔)	(小久貫隆史)
総 計		21,944	2,415	-	-				

駒木野馬土手 調査経歴一覧

年 度	調査次	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)	調 査 期 間	担 当 者	調査事務所長 (調査課長)	調査研究部長 (センター長)
			上層	下層					
平成16	1	600	600	-	-	平成16年11月1日～平成16年11月5日	上 席 研 究 員 郷堀 英司	田坂 浩	矢戸 三男
平成22	2	490	43	-	-	平成22年1月4日～平成22年1月8日	上 席 研 究 員 田井 知二	橋本 勝雄	及川 淳一
平成25	3	693	97	-	-	平成26年2月17日～平成26年2月28日	上 席 研 究 員 宮 重行	(白井久美子)	伊藤 智樹
総 計		1,783	740	-	-				

市野谷駒木野馬土手 調査経歴一覧

年 度	調査次	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)	調 査 期 間	担 当 者	調査事務所長 (調査課長)	調査研究部長 (センター長)
			上層	下層					
平成	1	2,884	160	-	-	平成15年1月14日～平成15年1月27日	上 席 研 究 員 立石 圭一	田坂 浩	斎木 勝
平成	2	99	10	-	-	平成23年11月16日～平成23年11月25日	副 所 長 高橋 博文	橋本 勝雄	及川 淳一
総 計		2,983	170	-	-				

第1表に十太夫野馬土手以下、各年次ごとの調査期間、組織、担当者を記載した。第3表は年度ごとの調査順に記載しているため、掲載順が異なる。

整理作業

平成28年度 文化財センター長 上守秀明
整理課長 山口典子
整理期間 平成28年8月1日～平成29年3月28日
整理内容 水洗・注記～報告書印刷・刊行
整理担当者 上席文化財主事 池田大助

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺地形（第2・3図・第2表）

今回報告する野馬土手が所在する流山市・柏市は千葉県の北西に位置し、東京湾に注ぐ江戸川に沿って立地する。市域の西は江戸川沿いの地が広がり、東部域は高低差のある台地が広がり下総台地へと続き、標高14m～18m程度の平坦な台地が広がる。台地上には、野馬土手のほか旧石器時代～中世に至る数多くの遺跡が広がる。

これらの遺跡を支える主な水系としては、江戸川から樹枝状に入る小支谷を形成する大堀川と坂川（逆川）がある。大堀川は柏市大青田付近および流山市江戸川台付近を湧水地とし、十太夫・駒木野馬土手の中央部を通り手賀沼へと下ってゆく。また市野谷駒木野馬土手域には、現おたかの森駅付近を源流とする湧水地が存在し、牛飼沢を通り、坂川として松戸市から市川市に至り、江戸川に注いでいる。坂川は、近世の新田開発における主要な給水路として地域の発展を支えるとともに、大規模洪水により暴れ川としても知られる。

2 遺跡の歴史的環境

今回報告の対象となる遺跡は、十太夫野馬土手および駒木野馬土手・市野谷駒木野馬土手と呼ばれる野馬土手である。

これらの野馬土手は江戸幕府直轄の「小金五牧」のうち「上野牧（かみのまき）」「高田台牧（たかだだいまき）」とされる区域に所在する。旧水戸街道から日光街道東往還に沿って広がり、現在の地図（第4図）に重ねて見るならば、流山市の台地上及び同じく柏市の西半分を占める地区である。

上野牧は現在の東武鉄道柏駅～江戸川台駅の周辺といったほうがわかりやすいだろうか。日光参詣や水戸街道を用いる大名行列など、浮世絵や日記などにも牧の景観が記されることも多く、往時の広大な牧と、のどかな景観を知ることができる。高田台牧は柏市の西半分、国道16号線より西側、柏の葉キャンパス駅を中心とする。牧は樹枝状の台地上で複雑に入り組むが、柏市と流山市の市境とされる大堀川により、十余二付近から駒木を経て呼塚付近まで、川とその周辺の湿地帯により牧が分けられる。

千葉県を中心とする下総地域は古代より馬の産地として知られ、延喜式によると下総国には諸国牧として「高津馬牧」「夏見馬牧」などが設けられ、軍馬と駅馬の供給を主としていたことが知られる。高津馬牧は現八千代市高津付近、夏見馬牧は現船橋市夏見付近に推定されているが、これらは小金牧のうち「下

野牧」周辺とも地理的にも近く、中世から近世へと続く牧としてこの地が活用されてきたことがうかがえる。中世においては相馬御厨、夏見御厨などが知られ、これらの存在が関東における武士の興隆に関わったであろうとされている。

徳川家康の江戸入府により江戸幕府が成立し、軍馬の確保、育成を目的として下総地区を中心に牧を設けるにあたり、地域に引き継がれてきたこれらの牧が活用されたものと考えられる。

当初は小金七牧として整備が進められたが、江戸市域の拡大による開墾需要や経済的状況などの社会的変化や享保の改革にともなう統廃合が行われ、野田付近にあった「庄内牧」は廃止（1722年）され、鎌ヶ谷の「一本柵牧」は中野牧に統合されて、高田牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧の五牧となった。

これらの小金牧の全体像を絵図に示したものが江戸時代中期、寛文12（1672）年に作られたと考えられる「小金牧周辺野絵図」（千葉県文書館蔵）である。施設の管理を目的として作成されたと考えられるこれらの絵図を基に記された牧の総面積はおおよそ16,520haと推定される（宮本 2011年による）。

享保7（1722）年、江戸近郊域の開墾の進展とともにまず庄内牧が廃止される。この時点で五牧となり総面積は10,426ha、馬数は1,029頭（牝馬数？）と報告されている。その後、江戸幕府の財政の悪化に伴う各種改革や新田開墾、江戸の都市域での人口増にともなう薪炭需要の増大、牧用地の周辺集落への払い下げ等により、文久2（1862）年に制作された小金牧絵図（白井市川上家蔵）によると、この約200年の間に牧の総面積は16,520ha（1672年）→10,426ha（1722年）→7,050ha（1869年）と縮小を続け、当初の43%まで縮小している。牧の設置と同時期に開墾が開始された利根川の治水工事の進展とともに、新田開墾に適した湿地帯の拡大が進み、江戸近郊における新田開墾の活発化から旧葛飾郡、現柏市、流山市、野田市付近は絶好の開墾場となった。

庄内牧は、絵図に残される状況から文久2（1862）年までにはほぼすべてが払い下げられて新田が作られている。また印西牧も同じく廃止までには行かないものの、かなりの部分が払い下げられていることが知られる。最終的には明治2（1869）年明治新政府により、江戸市中貧民層救済という名目に於ける開墾場として上げ地され、すべての牧が姿を消すこととなった。ただ明治10年代頃まで、野良馬となって開墾地を荒らす馬がいたという（注）、現在のこの地域からは想像のつかない状況が牧の名残をとどめていたともいわれる。

（注）明治6（1873）年、明治天皇は、近衛兵を引き連れ、下野牧で大規模な演習を統監された。演習を実施した一帯を『習志野之原』と命名し、陸軍の演習場として活用するよう命ぜられたと言われる。それに伴いまだこの地周辺に残される野馬の処置が行われ、『勸業権頭下総鎌ヶ谷村以東当寮蓄馬放飼の処御省練兵場開設に付捕馬立入の件』『小金牧之内大野牧捕馬派出官員到着に付野営へ御通達の件』（明治7年1874）という資料が残される。また鎌ヶ谷地域は「初富」という地名があるとおり、上げ地され最初に開墾の進んだ地域である。開墾開始から5年後でも、野馬として練兵場・開墾地を荒らす馬がいたという、現在のこの地域からは想像のつかない牧の姿を残していたのである。



利根川

江

國

戸

川

大

塚

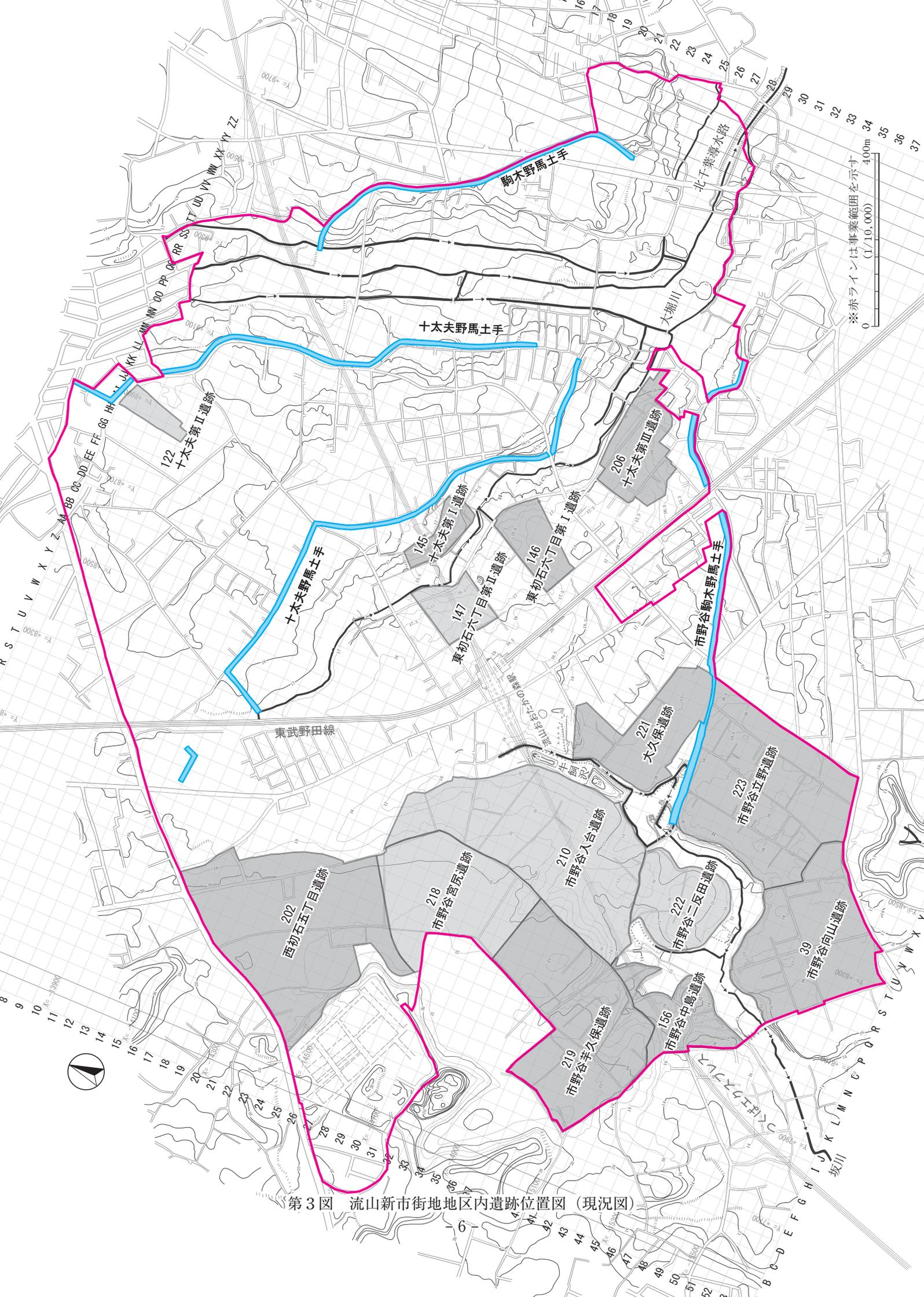
市

坂

川

※太ラインは流山新市街地の事業範囲を示す
 0 (1/25,000) 1,000m

第2図 遺跡の位置及び周辺の地形、周辺遺跡分布図(旧況図)



第3図 流山新市街地地区内遺跡位置図（現況図）

第2表 新市街地地区周辺遺跡一覧

県遺跡番号	遺跡名称	時代	県遺跡番号	遺跡名称	時代
202	西初石五丁目遺跡	縄文	229	思井上ノ内遺跡	古墳(後)、奈良・平安
218	市野谷宮尻遺跡	古墳(後)、奈良、平安	167	中屋敷遺跡	縄文(前・中・後)、平安
210	市野谷入台遺跡	古墳	36	古間木三王第I遺跡	縄文(前)、平安
219	市野谷芋久保遺跡	縄文(早)	226	前平井堀米遺跡	古墳(後)、奈良・平安
222	市野谷二反田遺跡	縄文(前)	40	市野谷梶内第I遺跡	縄文(前・中)、古墳(中・後)
221	大久保遺跡	縄文(前)	41	野々下山中遺跡	縄文(前)、平安
223	市野谷立野遺跡	縄文(前)、古墳(後)	81	野々下貝塚	縄文(前・中・後・晩)
39	市野谷向山遺跡	縄文(前・中)、古墳(後)	42	野々下西方遺跡	縄文(前・中)
156	市野谷中島遺跡	縄文(前・中)、平安	43	野々下大屋敷遺跡	縄文(後)、平安
220	市野谷宮後遺跡	縄文	158	古間木芳賀殿第I遺跡	縄文(前・中)、平安
208	三輪野山向原古墳	縄文(前)、弥生、古墳(前)	159	柴崎大囲遺跡	縄文(前・中)、古墳、平安
203	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安	82	古間木菜葉木谷遺跡	縄文(早・前・後)
152	大畔中ノ割遺跡	縄文(早・前・中)、平安	33	鱒ヶ崎貝塚	縄文(早・中・後)、平安
29	下花輪荒井前遺跡	弥生、古墳、平安	198	美原二丁目遺跡	縄文(前・中)、近世
209	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世	17	中野久木貝塚	縄文(早・前・中)
28	桐ヶ谷浅間後遺跡	旧石器、縄文(前・後)、平安	114	中野久木日暮第I遺跡	縄文(後)
80	大畔台遺跡	縄文(前)、古墳、中世	75	中野久木谷頭遺跡	縄文(中)、古墳
27	上貝塚大門遺跡	縄文(前・後)、平安	123	中野久木囲の内遺跡	縄文(前・中)、平安
26	上貝塚貝塚	縄文(前・中・後)	18	中野久木遺跡	縄文(早・前・中・後)、古墳(中)
136	西初桜窪遺跡	縄文(前・中・後)、近世	139	中野久木米の台遺跡	縄文(前・中・後)、平安
24	桐ヶ谷南割遺跡	旧石器、縄文、古墳(中)、平安	20	富士見台第II遺跡	奈良・平安
130	若葉台遺跡	旧石器、縄文(前・中)	205	中野久木谷頭古墳	古墳
135	桐ヶ谷新田第I遺跡	旧石器、縄文、平安	137	江戸川台第I遺跡	縄文(後)、中近世
195	西初石三丁目遺跡	縄文(前・中・後・晩)	21	小谷貝塚	縄文(中)、平安
129	上新宿向宿遺跡	縄文(前・中)	201	小屋神明脇遺跡	縄文(前・後)、近世
23	上新宿貝塚	縄文(後・晩)	119	東初石三丁目第I遺跡	縄文(晩)
127	上新宿宿後遺跡	縄文(前・後)、平安	120	東初石三丁目第II遺跡	縄文(早)、古墳(後)、平安
134	西初石二丁目遺跡	縄文(中・後)	121	東初石三丁目第III遺跡	縄文(早)、平安、近世
79	三輪野山第III遺跡	縄文、古墳(後)、平安、近世	122	十太夫第II遺跡	縄文(前)、平安、近世
78	三輪野山北浦遺跡	旧石器、縄文(前・後)、古墳、平安、近世	145	十太夫第I遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
211	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、近世	164-1	富士見台(I)遺跡	不明
154	三輪野山宮前遺跡	縄文(前)、古墳(後)、平安、近世	164-2	富士見台(II)遺跡	縄文(中・後)
153	三輪野山八幡前遺跡	縄文、古墳、平安、近世	149	長崎五牧割遺跡	縄文(前・中)、平安
31	三輪野山貝塚	旧石器、縄文(前・中・後・晩)	51	長崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
213	三輪野山低地遺跡	縄文(後・晩)	55	野々下長田遺跡	縄文(早・前・中・後)
185	三輪野山八重塚	縄文、古墳、平安	57	野々下御成堤遺跡	縄文(前・中)
197	三輪山八重塚II遺跡	縄文(早)、平安	58	野々下金クソ遺跡	縄文(前・中)
190	加若宮第II遺跡	縄文、平安	168-1	笹原(I)遺跡	縄文(中)、弥生、古墳
188	加北谷津第I遺跡	旧石器、縄文、平安	168-2	笹原(II)遺跡	縄文(中)
189	加北谷津第II遺跡	旧石器、縄文、平安	66	名都借並木遺跡	縄文(中)
186	加町畑遺跡	縄文、古墳、奈良、平安	162	清流院前遺跡	縄文(前)、平安、近世
90	加村台遺跡	弥生(中)、古墳(後)、平安、近世	67	名都借笹堀込遺跡	縄文(前・中)、平安
187	加若宮第I遺跡	旧石器、縄文、平安	109	西深井一の割第I遺跡	旧石器、縄文、奈良、平安、中近世
215	市野谷地蔵谷ッ遺跡	古墳(後)、平安	98	こうのす台第IV遺跡	縄文(早・前・中・後)
224	市野谷梶内第II遺跡	縄文	200	鴻ノ巣遺跡	縄文(早・前・中・後)
212	加東割遺跡	縄文(前)、中近世	191	猪ノ尻遺跡	縄文(早)
225	後平井中道遺跡	古墳(後)、奈良・平安	1	幸田貝塚	旧石器、縄文(前・中・後)、古墳
32	前平井遺跡	縄文(前・中)、平安	2	中芝遺跡	弥生(後)、古墳(前・中・後)
204	宮本遺跡	縄文(早)、平安	4	道六神遺跡	縄文(早・前・中・晩)、弥生(後)、奈良・平安
184	大原神社遺跡	縄文(早)、古墳(後)、平安	3	木戸口(中金)遺跡	縄文(前)、古墳(中)
170	平和台遺跡	縄文(中)、古墳、平安、中近世	69	前ヶ崎貝塚	縄文(前・中・後)
47	流山庵寺遺跡	奈良	206	十太夫第III遺跡	縄文、平安
228	西平井二階畑遺跡	縄文、古墳(後)、奈良・平安	146	東初石6丁目第I遺跡	縄文(中期)、平安
169	思井堀ノ内遺跡	縄文(中)、平安	147	東初石6丁目第II遺跡	縄文(後期)、平安
193	思井鷹の見遺跡	縄文(早・前)、古墳、近世			

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 野馬土手の調査

野馬土手も明治時代以降の開墾、開発により削平され、その存在を残さない部分も多々見受けられたが、これらの開墾や市街化から残されて、旧状を知ることのできる地点も多く見られた。今回の調査区内には野馬土手として残されるものは多かったが、牧としての主要な施設となるような地点は見られなかった。

周辺において伝えられる牧としての施設については、伝承や地名から知られるものとしては「捕込」があげられる。上野牧の捕込は、「柏市豊四季字捕込」という地名から、現在の千葉県柏市柏第二小学校付近にあったと伝えられている。高田台牧については柏市十余二工業団地付近とされている。この両地点は、「小金上野高田台両御牧大凡図」（流山市鑄木亮家文書）に概要が記され、また「小金原勝景絵図」には上野牧の捕込が描かれており旧観を知る手掛かりとなる。水飲み場は、「東深井新田絵図」（流山市酒巻富子家文書）記載の流山市東深井地先、同絵図記載の柏市大青田字猪之尻などがあげられる。伝承地として流山市初石地先や流山市市野谷字牛飼沢などが想定されている。牛飼沢は低地かつ湧水地点ともなっており、十分に想定し得る場所である。今回の調査範囲内のうち市野谷・駒木野馬土手調査地点周辺である。

今回の調査は平成12年に着手し、平成26年度まで全30次にわたり、遺存するほぼ大半について地形測量およびトレンチによる断面観察を実施した。用地確保の都合上、調査順序が連続していないが、個々の概要については第3表に調査年次順に調査状況を掲載した。なお、測量図・断面実測図は調査年次に関わらず、各野馬土手の最北部より連続して掲載した。

1 十太夫野馬土手（第3表・第4・5・6図～35図、図版2～6）

今回調査を行った上野牧（内）十太夫野馬土手は、流山市駒木付近の大堀川西岸に沿って北上する1条（第5図A～B・調査対象区全長1,120m）と、同地点より西に向かい、途中で大きく屈曲し日光東往還に向かう1条（第5図C～D・調査対象区全長1,325m）が対象となった。本来はこれらは連続する野馬土手であったと想定される。（第4図）

遺存状況は地点により大きく異なるが、基本的には野馬土手幅4m～5mを基準に遺存する。最良の地点で野馬土手高2.5mを測る。野馬堀は基本的に土手外周に1条伴う。おおむね幅2m～3m、掘り込みは1.5m～2.5mと土手の高さと同様に深く掘られる。なお野馬堀は部分的に土手内外に2条みられるものの、2条になる位置が野馬土手内の何らかの施設に伴うような状況は確認できなかった。元禄9（1696）年～15（1702）年作成の『元禄国絵図・下総国』に青田・駒木の新田、日光街道沿いの十太夫新田が記され、牧に入り込んだ新田がすでにあった事を示す絵図が残されていることを考えると、大堀川あるいは近隣における水田や畑など開墾場への野馬の侵入対策用の土手なのであろうか。調査時点で数か所土手の切れる部分が見受けられたが、土手築造後に周辺の開墾に伴い設けられたものか、当初から存在していたものか不明である。

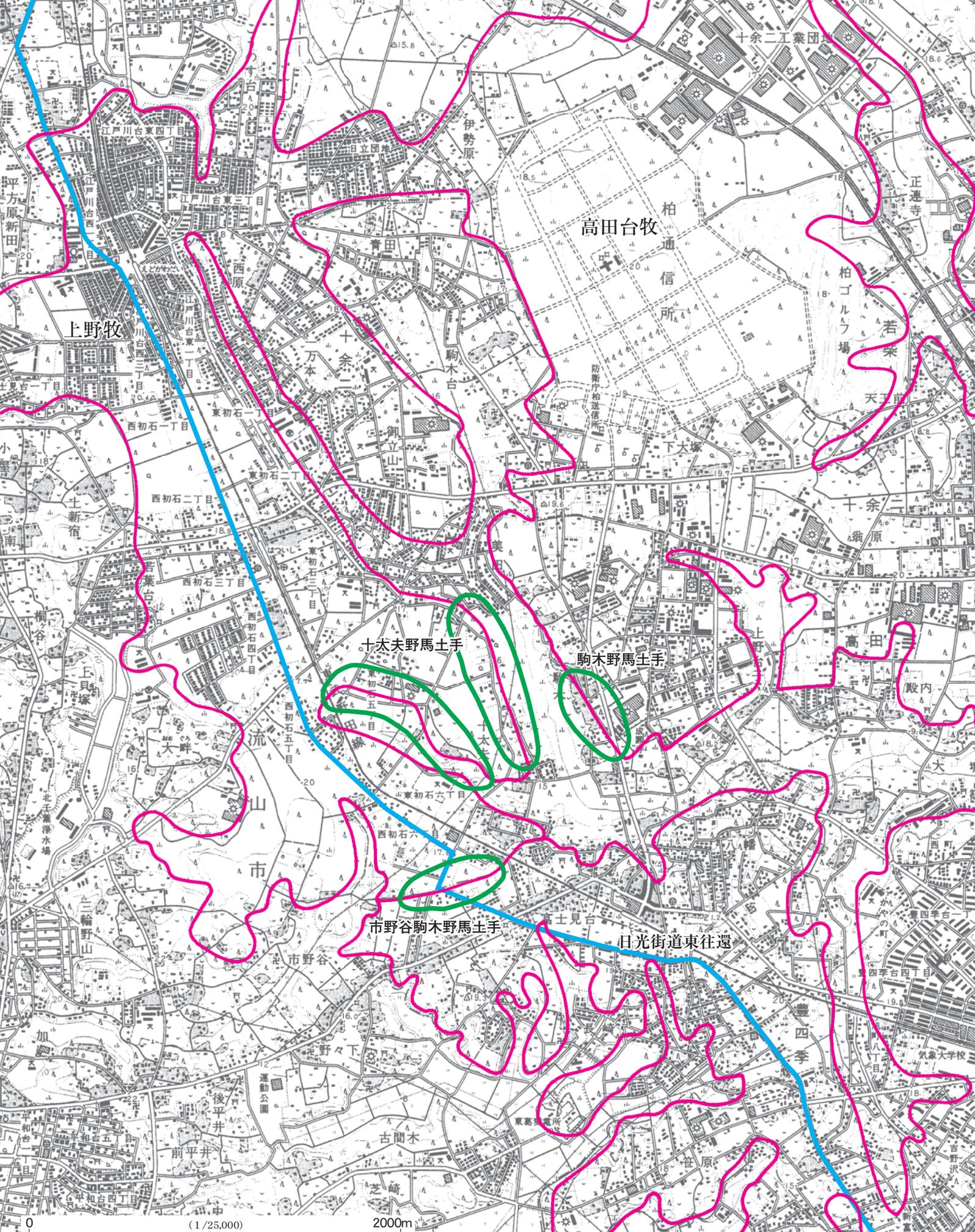
調査区内からはその他の遺構として、十太夫野馬土手3-(24)調査区より土坑（SK-001）が1基検出された（第8図）。

長径2.2m、短径1.4m、確認面から底面までは約2mを測る。平面形は隅丸方形である。遺物などの出

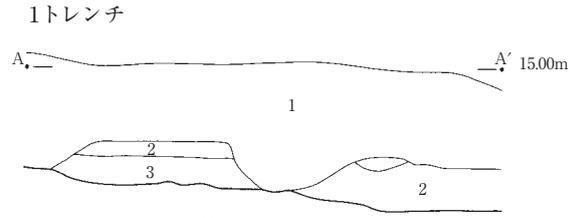
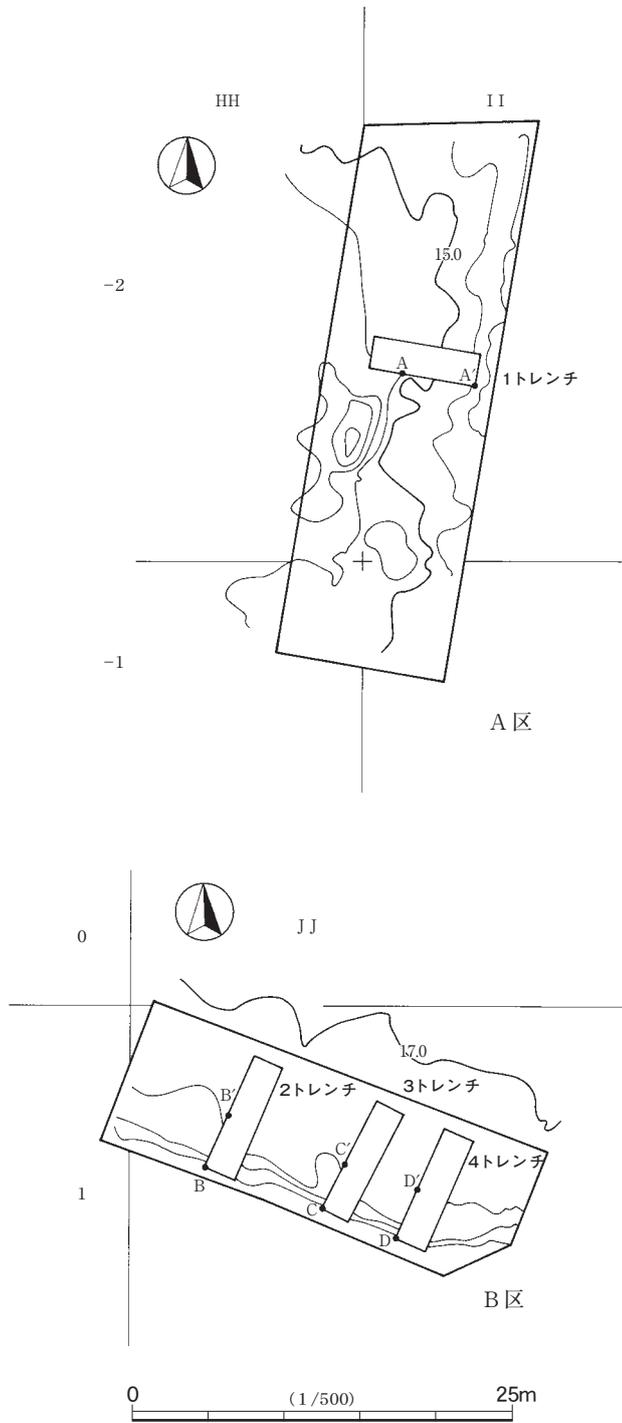
第3表 十太夫野馬土手調査概要一覧

年 度	調査 回数	対象 面積 (㎡)	挿図掲載 番号	挿図 番号	図版 番号	全長 (調査区内)		土 手		溝		調査期間	所 在 地	調 査 区 所 見
						土手を確認 できた 長さ	推定され る土手長	高さ (最大)	幅 (最大)	深さ (最大)	幅 (最大)			
平成 12	1	72㎡	15 - (1)	19	4	12m	-	1m	6m	1.5m	4m	2001/2/1 ～ 2001/2/13	流山市初石 五丁目四番地	(18) 区と同一のエリアに所在する。野馬土手は 4m～6mの幅を残し、野馬堀も3m～4mと良 好な遺存状態であった。
平成 13	2	45㎡	16 - (2)	20	4	-	12m	-	(7m)	2m	1.8m	2001/9/3 ～ 2001/9/17	流山市十太夫 15番地ほか	A・B区に分かれる。調査区内は当初削平により 馬土手にかかわる遺構は確認できなかった。削平 面を清掃した段階で2条の堀が検出され、土手の 幅は約7m。土手両側の堀は幅約2.0m、深さ1.5m 以上の掘り込みを持つことが確認された。
13	3	33㎡	17 - (10)	21	5	8m	-	(1m)	4m	1.8m	3m	2001/9/17 ～ 2001/9/2	流山市十太夫 182ほか	野馬土手は大半が削平されており、一部残る。隣 接する(2)では土手両側に堀が設けられていた が、本地区でも幅3.0m前後で1.8m程度の掘り 込みを有する堀が残されており(2)区から(3) 区へかけて連続していたことが確認された。
13	4	1,392㎡	12 - (4)	16	3・4	60m	-	1.7m	2m	1.2m	2m	2002/2/1 ～ 2002/2/28	流山市十太夫 19-1ほか	野馬土手はその形状を良好に保存していた。土手 の両側に堀をもち、土手西側は深さが1.7m、幅 2.0mとしっかりとした堀が掘られ、東側には幅 1.2m、深さ0.5mの浅い堀が確認された。本来の 旧状を推定することのできる調査区であった。
平成 14	5	512㎡	23 - (5)	27	5	70m	-	2m	4m	2.5m	4m	2002/7/16 ～ 2002/7/22	流山市十太夫 182ほか	土手は上面の盛り土の流出が目立つものの、その 形状を保存していた。土手東側に並走する野馬堀 は埋まりきらず残っていた。
14	6	48㎡	7 - (6)	11	2	-	12m	-	-	-	-	2002/11/1 ～ 2002/11/13	流山市十太夫 52-1	主要な部分は削平されていた。乱雑に残される残 土などにより土手様に見える。隣接する(7)な どの状況から堀などが道路下に遺存する可能性が ある。
14	7	289㎡	6 - (7)	10	2	7m	68m	(2m)	(2m)	(1m)	-	2003/1/7 ～ 2003/1/10	流山市十太夫 53-1ほか	宅地の垣根と住宅の建築に伴い、土手のほとんど が削平されており、形状を確認することができな かった。数値は土手・堀が部分的に残存していた 住宅周辺部分における推定値である。現道下に堀 と思われる掘り込みが残されている可能性がある。
平成 16	8	400㎡	10 - (8)	14	3	45m	-	0.8m	2m	-	-	2004/10/18 ～ 2004/11/5	流山市十太夫 36-1ほか	土手は自然に崩れた状態を示している。土手西側 には堀が設けられていることが確認されたが、併 行する道路脇の掘削となるため調査を進めること ができなかった。
16	9	250㎡	27 - (9)	31	6	-	27m	-	-	-	-	2004/12/1 ～ 2004/12/6	流山市十太夫 199ほか	畑の開墾などに伴い、現状において地山まで削平 されていた。土手、堀ともに存在を確認すること ができなかった。
16	10	670㎡	18 - (17)	22	4	60m	-	(0.5m)	(2m)	1.5m	2m	2005/2/1 ～ 2005/2/14	流山市初石 5-16	トレンチを3条設定。土手部分は削平されていた が、基盤に近い部分の盛り土の状況を見ることが できた。堀は道路により一部埋められていたが幅 2m前後で深さは約1.0m～1.5mを測り、底面 まで確認することができた。
16	11	340㎡	11 - (11)	15	3	-	32m	-	-	(0.8m)	(1.8m)	2005/11/30 ～ 2005/12/02		全面にわたり開墾時の削平により痕跡を残してい なかった。土手に関して削平された盛り土が周辺 に広がっているのが確認された。西側の道路下に 堀が残される。
16	12	1,150㎡	22 - (3)	26	5	135m	-	(1.5m)	3.3m	2.5m	3m	2006/2/13 ～ 2006/2/28	流山市十太夫 172-6ほか	野馬土手及び堀の遺存状態は極めて良好であっ た。土手はかなり上層の流出が目立ち1.5mほど の遺存であるが、旧表土を基準にみると土手幅は 2.7m～3.3mを測り、堀は旧表土より2.0m～2.3 mの深さを測り、野馬土手本来の姿を推察する ものであった。
平成 18	13	260㎡	25 - (13)	29	6	27m	-	1.5m	(5m)	(1m)	3m	2006/6/19 ～ 2006/6/22	流山市十太夫 195	現地表より1m程の土手が遺存していた。トレン チ断面の観察から、堀を掘削し土手を盛り上げて る状況がみられた。
18	14	650㎡	4 - (14)	8	2	70m	-	1.5m	4m	(2m)	(2m)	2006/7/10 ～ 2006/7/14	流山市十太夫 71-1ほか	現地表より1.5mを測る土手が残されていた。形 状からは旧状をうかがえる。トレンチ断面から堀 を掘り込んで盛り上げているローム土の積み上げ 状況がみられた。堀は土手東側の谷に面しており、 台地側に作られる。土手は本調査区内で二間ほど 途切れているが、牧としての木戸であるのか、開 墾時に通路として切り取られたものなのかは確認 できなかった。
18	15	580㎡	28 - (15)	32	6	-	58m	-	-	-	-	2006/10/23 ～ 2006/10/26	流山市十太夫 202-3ほか	本調査区内においては地山まで削平されており、 土手などの痕跡をみることもできなかった。
18	16	630㎡	9 - (16)	13	3	60m	-	1m	1.8m	-	-	2006/12/18 ～ 2006/12/28	流山市十太夫 41-1ほか	東に谷を望む。現地表より1m程の土手が残され ていた。堀は台地側に設けられていた。本調査区 内において二間幅で土手が切られるが、隣接する 住居への出入りに設けられたものと考えられ、本 来の土手に伴うものではないと思われる。
平成 20	17	1,050㎡	19 - (23)	23	5	120m	-	(1m)	1.8m	1m	2m	2008/5/1 ～ 2008/5/9	流山市十太夫 137-3ほか	調査対象となったエリアは土手の全長約120mに わたり、土手、堀ともに遺存状態は良好であった。 現状で表土面より土手高は約1m、幅は2m～4 mを測った。土手北側には現表面からの掘り込み 約1m、幅2m程の堀が土手に併行して掘り込ま れているのが確認された。また調査区東側には堀 の両端に幅40cmほどの御溝を設けてある部分が 確認されている。調査区中央部の溝の切り込みは 土手本来のものではない可能性が高い。
20	18	1,980㎡	11 - (18)	18	4	160m	-	1.2m	4m	1.2m	3m	2008/6/10 ～ 2008/6/13	流山市東初石 5丁目3ほか	東西に近いラインで北上していた野馬土手は、 13W区において大きく屈曲し、日光東往還道方 向へ向かう。このエリアの野馬土手の遺存状況は 良好で、土手幅は3m～4m、堀は2m～3mを 測り旧状を思わせる。なお平成13年調査の(1) が本調査区と重複する。屈曲部脇に道路が通るが (1)調査時以降に掘削された道路であり旧道で はない。

年度	調査 次数	対象 面積 (㎡)	挿図掲載 番号	挿図 番号	図版 番号	全長(調査区内)		土 手		溝		調査期間	所 在 地	調 査 区 所 見
						土手を確認 できた 長さ	推定される 土手長	高さ (最大)	幅 (最大)	深さ (最大)	幅 (最大)			
平成 20	19	1,250㎡	29 - (19)	33	-	145m	-	2m	3m	2.5m	4m	2008/8/12 ~ 2008/8/13	流山市十太夫 15-6の一部 ほか	二重の野馬土手が検出された。南側土手は幅約5mの土手がつながり、北側土手はやや小さく幅は約3m程度であった。両土手に挟まれるように最大幅約4mの堀が残される。遺存状態は極めて良好であった。調査区東側エリアは宅地開発により南側土手のみ残る。こちらは土手の最大幅8mを測る。北側土手は調査区外道路により削平されており堀は道路下に入るため調査し得なかった。中央部に土手の切れる部分が残されるが木戸などが設けられた可能性のある部分であった。
20	20	940㎡	5 - (20)	9	2	98m	-	1.8m	4m	1.4m	1.8m	2008/9/1 ~ 2008/9/5	流山市十太夫 65の一部ほか	大堀川沿いの野馬土手である。土手幅は約4mを測る調査区中央部に土手が途切れているが、周辺の小開発による通路として切られた可能性が高い。土手東側に溝が3条検出されているが土手にそっくり幅約2mの溝が見られる。これが本来の土手に伴うものであろう。他の溝は周辺の開墾に伴う可能性が高い。
平成 21	21	800㎡	13 - (21)	17	4	80m	-	0.5m	(2m)	(2m)	0.5m	2009/4/20 ~ 2009/4/28	流山市西初石 170-1の一部 ほか	日光東往還道にむかう野馬土手である。野馬土手は盛り土が流出し現地表から50cm~1m程度と遺存状況はあまりよくはないが、土手、堀ともにおおむね幅は2mで設けられ土手→堀→土手→堀と2重に併走している。
21	22	2,028㎡	8 - (22)	12	3	50m	100m	-	(3m)	1m	2m	2009/6/1 ~ 2009/6/17	流山市十太夫 48-2の一部ほか	調査対象地のうち、調査区内の2/3の野馬土手は削平され、調査区北側に堀が残る。調査区北側も1/3は建物などにより、削平が進んでいたが幅2m~3mの土手基部と想定される部分と、全調査区(削平部分含む)土手(痕跡)に沿って幅2mの堀が、併行して掘り込まれていることが確認できた。第9トレンチでは堀の掘り直しが確認できた。
21	23	580㎡	20 - (29)	24	-	62m	-	2m	5m	2.5m	3m	2010/2/22 ~ 2010/2/26	流山市十太夫 137-3の一部 ほか	本地点においては野馬土手はその由来に近い形状を保持していた。また伴う野馬堀は埋まりきらず残っていた。西側に隣接するのは(17)であるが、接続部分は耕作などにより野馬化していた。堀は土手北側で上面で約3m、底部でおおむね1mを測る。土手南側には幅約1mの浅い溝が並走していた。第3トレンチでは道路に切られた可能性があり溝も明確な痕跡は残していない。
平成 22	24	393㎡	3 - (24)	7	2	38m	-	-	-	1.8m	2.8m	2010/7/1 ~ 2010/7/8	流山市十太夫 71-7の一部 ほか	調査区全長は38mであるが、野馬土手は確認されず、調査区北側にしっかりとした堀を確認した。本調査地点南側は(14)、北側は(25)地点であり、ともに良好な状態の野馬土手を確認しており、当地点も本来土手が存在していたものと考えられる。開墾宅造時の削平であろう。調査区内より陥穴と想定される土坑を確認した。長径1.8m、短径1.4m、深さは2mを計る。遺物等は検出されおらず時期は不明。
22	25	665㎡	2 - (25)	6	2	70m	-	1.6m	2m	2m	1.8m	2010/11/15 ~ 2010/12/8	流山市十太夫 71-3の一部 ほか	A・B区に分かれる。野馬土手が北西方向に屈曲する部分にあたる。調査区は図上で見るとおり南北に分離し中間部分は住宅により既に失われている。北側エリアでは調査区に隣接する地点、道路下に伸びる野馬土手1条及び堀1条が確認された。南側部分では幅約4mで凹形に屈曲する土手が残されていた。堀は土手の東側に凹形に沿わず、併行して掘り込まれている。伝承など不明なため、集馬などに関わるいずれかの施設であろうが不明とせざるを得ない。
22	26	1,066㎡	26 - (26)	30	6	-	60m	2m	3m	1.5m	2m	2011/2/1 ~ 2011/2/16	流山市十太夫 105-16ほか	周辺の霊園整備などに伴い、土手西側は大きく削平されている。南に隣接する(9)は既に削平されていた。本地点の北側は(13)になる。北側に向かって土手は良好な状態で遺存し、堀は土手東側を併行して続いている。
22	27	665㎡	21 - (12)	25	5	70m	-	-	(3m)	1.5m	3m	2011/2/17 ~ 2011/2/24	流山市十太夫 170地先ほか	北上してきた野馬土手は本地点で屈曲し西に向かう。南側は(12)西側は(23)である。北上する野馬土手は(13)付近より良好な状態で遺存しており、(12)では野馬土手幅3m、堀は3m近い掘り込みを測る。本調査区においてはほぼ全域が削平されており、堀の計測値はローム層上面からのものである。
平成 23	28	1,488㎡	24 - (28)	28	5・6	140m	-	(1m)	5m	2.5m	3m	2011/11/1 ~ 2011/11/15	流山市十太夫 182の一部 ほか	北側は(5)南側は(13)に続く。遺存度が良好な野馬土手が続く。本地点西側は土手部の削平が進んでいたが、土手内外を併行する堀は確認できた。北側が主たる堀と思われ、最大幅3m、深さ2.5mを測ることができた。
平成 27	29	633㎡	30 - (29)	34	6	60m	-	1.5m	3m	(2m)	(3m)	2015/6/10 ~ 2015/6/11	流山市十太夫 15-8の一部 ほか	西に(19)が隣接し、今回調査区的最東端である。野馬土手の遺存度は良好であったが(19)で見られた2重の野馬土手がこちらへは続いているのかは確認できなかった。土手幅はおおむね3m~4m、堀は土手北側に約2m~3mの幅で併行しているのが確認されたが、道路下に続くため全幅および底部までは確認し得なかった。
27	30	763㎡	1 - (30)	5	2	10m	54m	1m	2m	1.2m	1m	2016/2/17 ~ 2016/2/23	流山市十太夫 119-73の一部 ほか	今回調査された十太夫野馬土手(1号列)最北端にあたる。大半が削平されており道路下に堀の一部が残る。A・B区に分かれる。本調査区は周辺の野馬土手残存部から確認トレンチを設定した。周辺の団地進入路部分に本来野馬土手が存在した可能性が高く、道路下に野馬堀と思われる溝状の遺構が一部確認できた。(北)区は大きく屈曲するものと想定されたが攪乱が著しく、確認トレンチには土手あるいは堀の痕跡をも確認することはできなかった。
		21,622㎡				1,657m	214m							



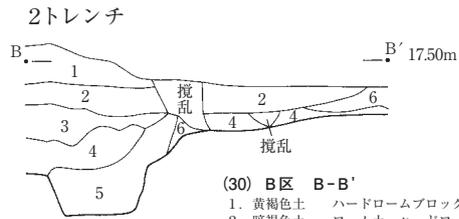
第4図 上野牧及び高田台牧範囲概要図 (1/25,000)



十太夫野馬土手 土層断面説明

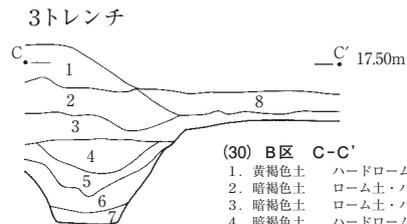
(30) A区 A-A'

1. 盛土及び攪乱、ガラ混
2. 黒色土 多孔質
3. 黒色土 砂質、焼土粒のような色のテフラ混



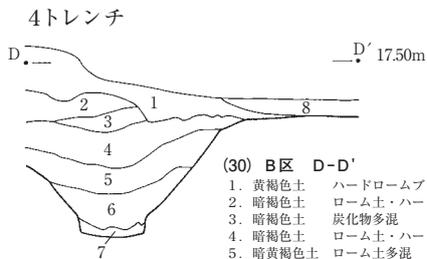
(30) B区 B-B'

1. 黄褐色土 ハードロームブロック多混
2. 暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック (小) 混
3. 暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック (大) 多混
4. 暗黄褐色土 ローム土を多混
5. 黄褐色土 ハードロームブロック (小) 多混
6. 暗褐色土



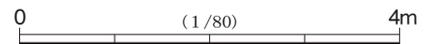
(30) B区 C-C'

1. 黄褐色土 ハードロームブロック多混
2. 暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック (小) 混
3. 暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック (小) ・黒色土混
4. 暗褐色土 ハードロームブロック・焼土粒混
5. 暗褐色土 炭化物多混
6. 暗黄褐色土 ローム土多混
7. 黄褐色土 ハードロームブロック (小) 多混
8. 暗褐色土 耕作土



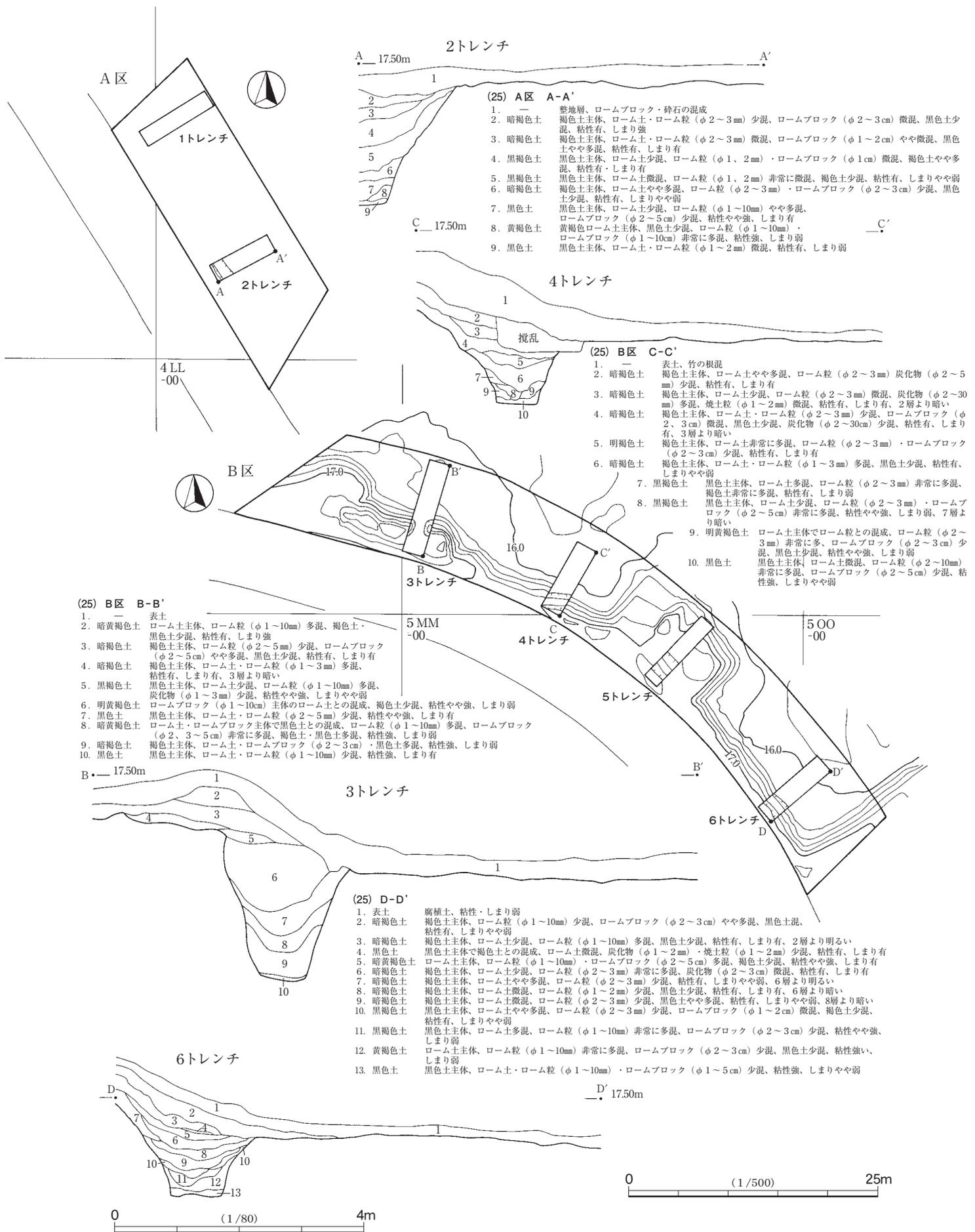
(30) B区 D-D'

1. 黄褐色土 ハードロームブロック多混
2. 暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック (小) 混
3. 暗褐色土 炭化物多混
4. 暗褐色土 ローム土・ハードロームブロック (小) ・黒色土混
5. 暗黄褐色土 ローム土多混
6. 暗褐色土
7. 黄褐色土 黄褐色ハードローム主体
8. 暗褐色土 耕作土

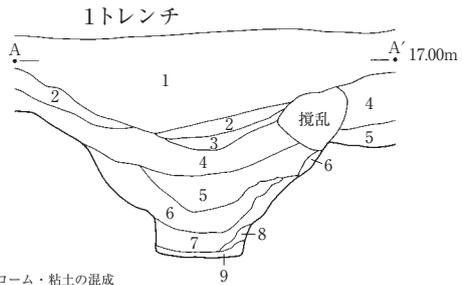
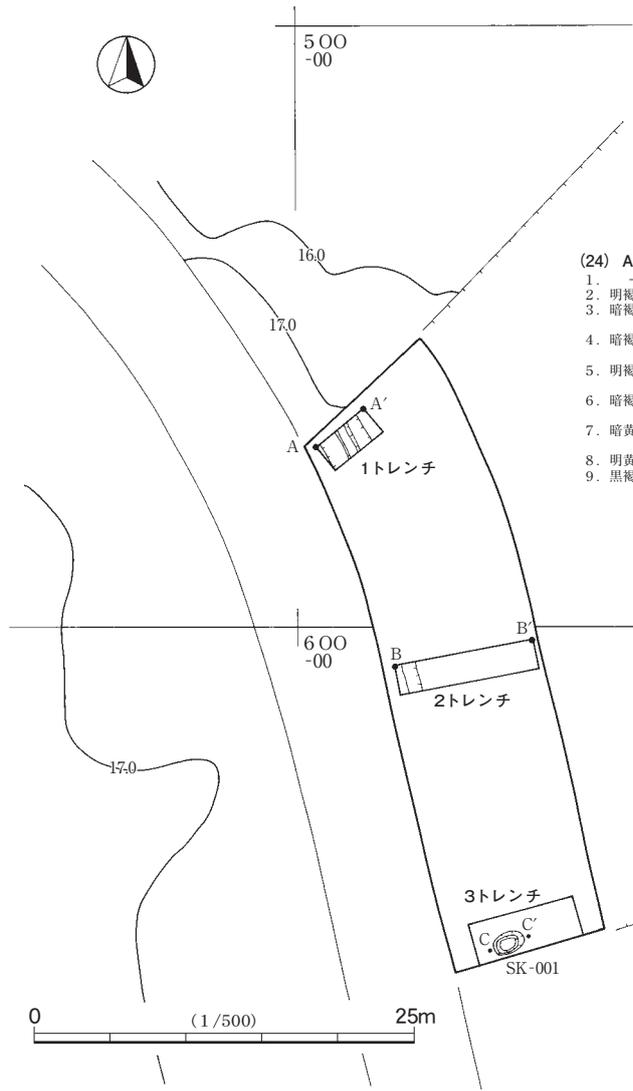


第6図 十太夫野馬土手1-(30) A区・B区

土はなく、構築された時期などは不明であるが、周辺の遺跡からの出土状況から鑑み、縄文時代の陥穴と思われる。



第7図 十太夫野馬土手2 - (25) A区・B区

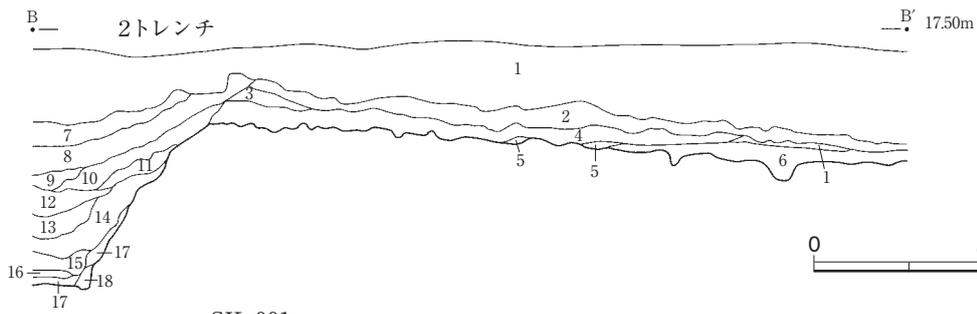


(24) A-A'

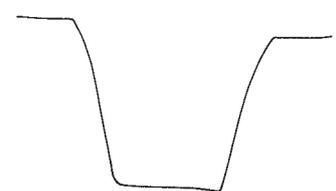
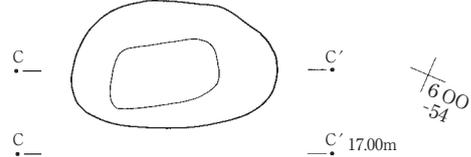
1. 造成盛土、ローム・粘土の混成
2. 明褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ2~3mm) やや多混、粘性弱、しまり弱
3. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ1~2mm) 微混、褐色土粒 (φ2~3mm) やや多混、粘性弱、しまり弱
4. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ2~5mm) ・ロームブロック (φ2~5cm) ・褐色土粒 (φ2、3mm) やや多混、炭化物 (φ2~5mm) 少混、粘性弱、しまり弱
5. 明褐色土 褐色土主体、ローム土多混、ローム粒 (φ2~3mm) やや多混、ロームブロック (φ2~5cm) 少混、粘性有、しまり有
6. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ロームブロック (φ2~5cm) 少混、褐色土粒 (φ2~5mm) やや多混、粘性有、しまりやや弱
7. 暗黄褐色土 黄褐色ローム粒主体、ローム土多量混、黄褐色ローム粒 (φ2~10mm) 非常に多混、褐色土混、粘性あり、しまり弱
8. 明黄褐色土 黄褐色ローム粒主体、褐色土微混、粘性有、しまり弱
9. 黒褐色土 黒褐色ローム土主体、黄褐色ローム粒 (φ2~10mm) 多混、ロームブロック (φ2~3cm) 少混、粘性やや強、しまり弱

(24) B-B'

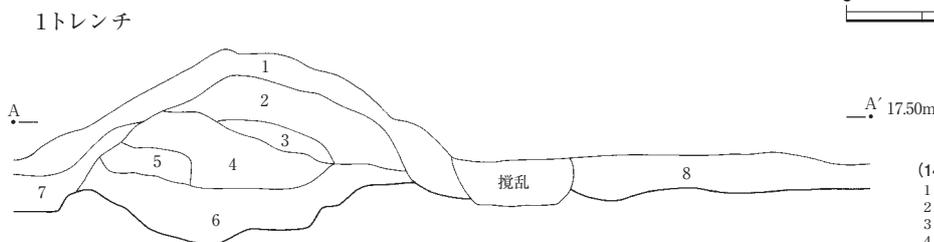
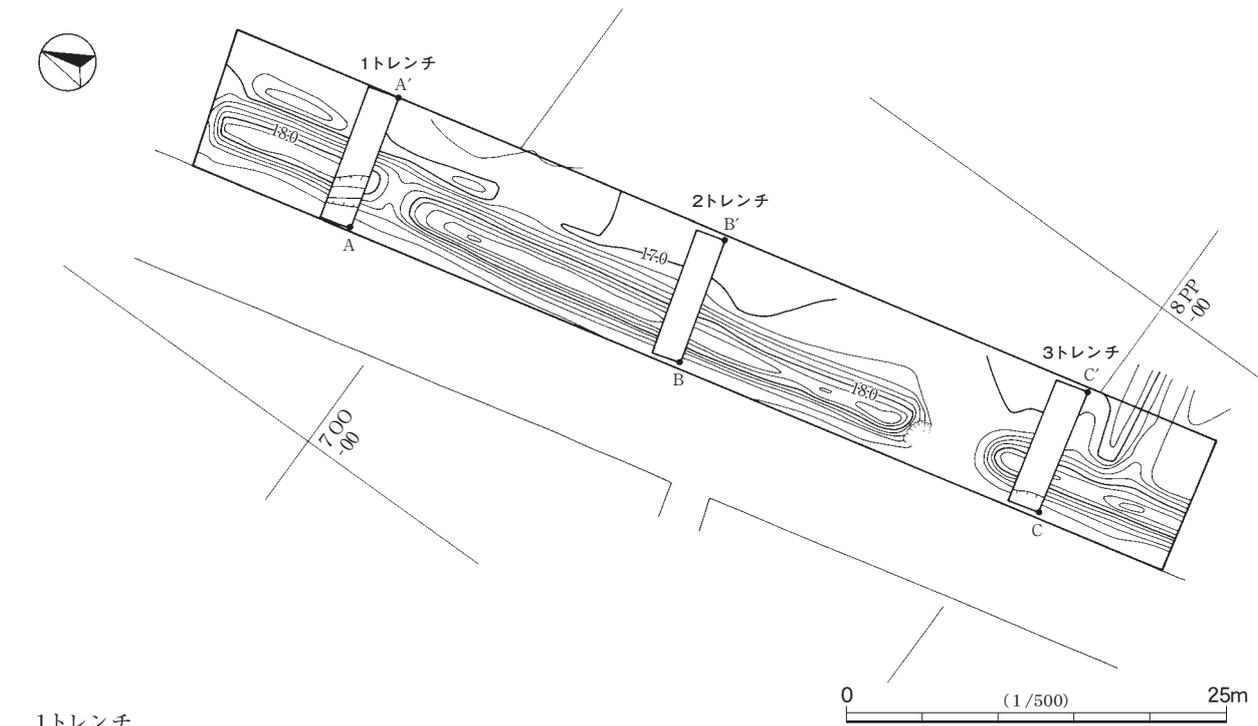
1. 造成盛土、ローム・褐色土・粘土の混成
2. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土やや多混、ローム粒 (φ1~10mm) 多混、ロームブロック (φ1~3cm) 少混、黒色土粒 (φ1~10mm) やや多混、炭化物片 (φ2~3cm) 少混、粘性有、しまりやや弱
3. 暗黄褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ1~10mm) 非常に多混、ロームブロック (φ2~3cm) 微混、褐色土多混、黒色土少混、粘性有、しまり有
4. 黒褐色土 褐色土主体、ローム土多混、ローム粒 (φ1~5mm) 微混、黒色土 (φ10mm) 多混、炭化物片 (φ2~5cm) ・炭化物粒 (φ1~10mm) やや多混、粘性有、しまり有
5. 明褐色土 褐色土主体、黒色土・炭化物片 (φ2~5cm) ・焼土・焼土粒 (φ1~10mm) 非常に多混、炭化物粒 (φ1~10mm) 多混、粘性有、しまりやや弱
6. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ1~2mm) 微混、粘性有、しまり有
7. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土少混、ローム粒 (φ1~10mm) やや多混、黒色土粒 (φ10mm) やや多混、粘性有、しまりやや弱
8. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土やや多混、ローム粒 (φ1~5mm) 少混、黒色土粒 (φ1~10mm) やや多混、炭化物片 (φ2~3cm) 少混、粘性有、しまりやや弱、7層より明るい
9. 明褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ2~10mm) 多混、黒色土粒 (φ1~10mm) やや多混、粘性有、しまり有
10. 褐色土 褐色土主体、ローム土多混、ローム粒 (φ2~10mm) ・黒色土粒 (φ1~10mm) 少混、炭化物片 (φ2~5cm) やや多混、粘性有、しまり弱
11. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土やや多混、ローム粒 (φ1~10mm) 少混、黒色土多混、粘性有、しまり有
12. 暗黄褐色土 ローム土主体、ローム粒 (φ1~10mm) 多混、ロームブロック (φ2~3cm) 微混、褐色土多混、粘性有、しまりやや弱
13. 明褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ2~5mm) 多混、ロームブロック (φ2~5cm) やや多、粘性有、しまり有
14. 暗褐色土 褐色土主体、ローム粒 (φ1~10mm) 非常に多混、ローム土・ロームブロック (φ2~5cm) 微混、粘性有、しまり微弱
15. 暗黄褐色土 ローム土・ローム粒の混成、ローム粒 (φ1~10mm) 非常に多混、ロームブロック (φ2~3cm) ・褐色土少混、粘性有、しまり微弱
16. 明黄褐色土 ローム土・ロームブロックの混成、ロームブロック (φ2~10cm) 主体、ローム粒 (φ1~10mm) 非常に多混、褐色土少混、粘性やや強、しまり弱
17. 暗黄褐色土 ロームブロック (φ1~10cm) ・褐色土の混成、ローム土多混、ローム粒 (φ1~10mm) やや多混、粘性強、しまり弱
18. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土少混、ローム粒 (φ1~10mm) やや多混、粘性有、しまり弱



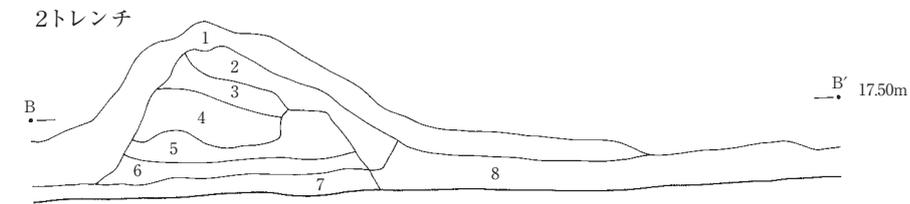
SK-001



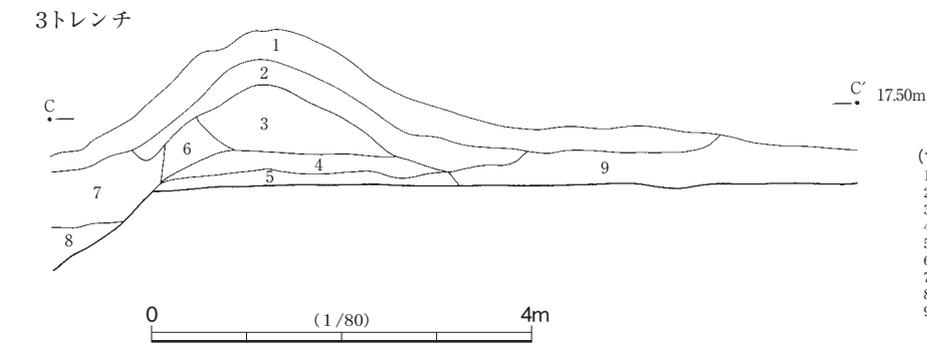
第8図 十太夫野馬土手3-(24)



- (14) A-A'
1. 表土
 2. 暗褐色土
 3. 暗茶褐色土 ローム粒混、しまる
 4. 黄褐色土 ローム粒から成る、しまる
 5. 暗黄褐色土 ローム粒主体、しまる
 6. 暗褐色土 ローム粒混、最もしまる
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土 1層よりしまる

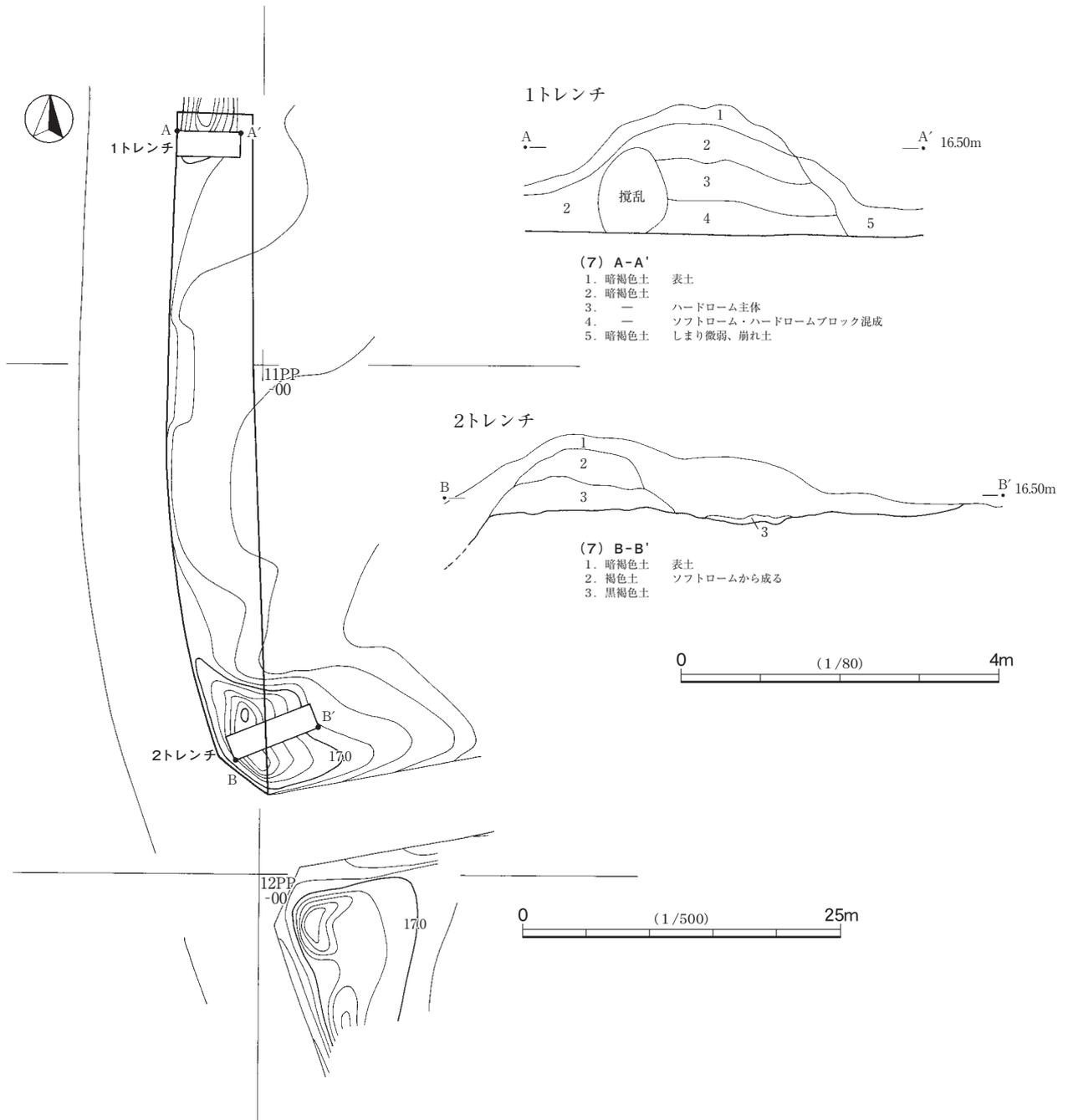


- (14) B-B'
1. 表土
 2. 暗褐色土
 3. 暗黒褐色土 しまる
 4. 黄褐色土 ローム粒から成る、ロームブロック混
 5. 暗褐色土 しまる
 6. 黒色土 しまる
 7. 黄褐色土 ローム粒から成る、しまり非常に強
 8. 暗褐色土

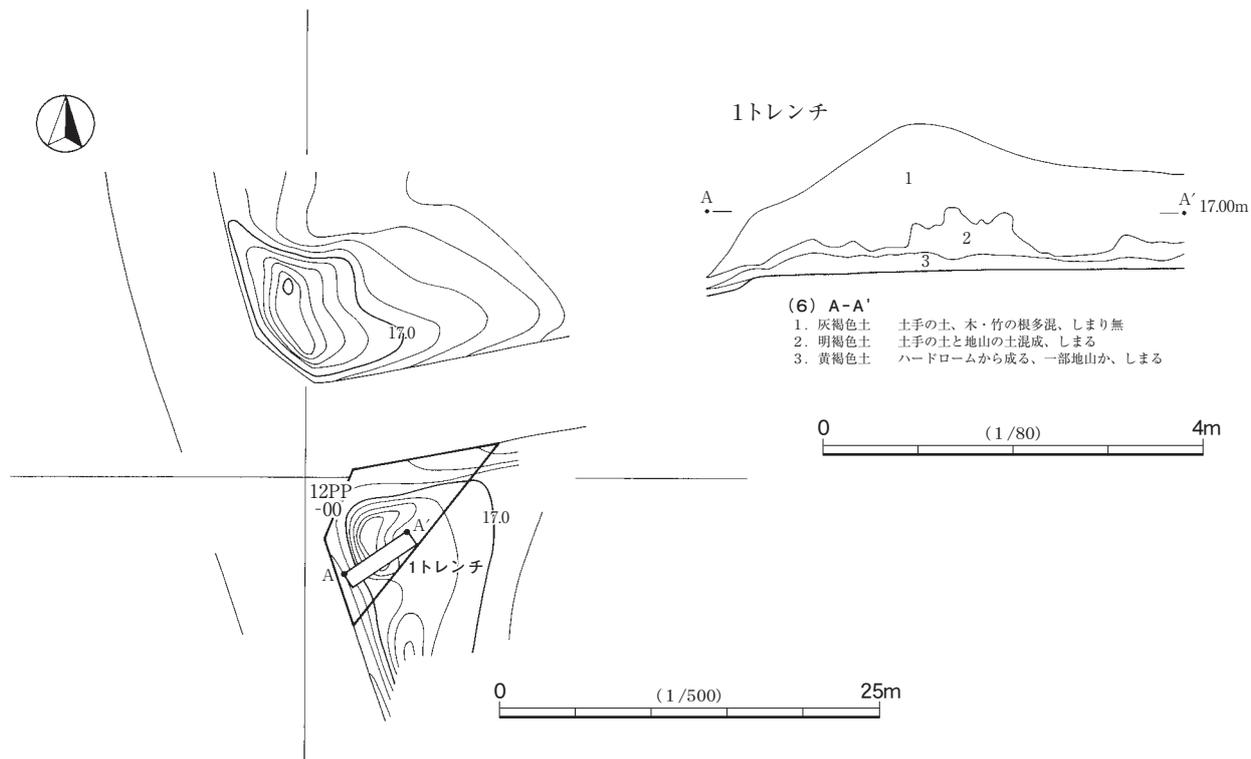


- (14) C-C'
1. 表土
 2. 暗褐色土 ローム粒混
 3. 黄褐色土 ローム粒から成る
 4. 暗褐色土 ローム粒混、しまる
 5. 黄褐色土 ローム粒から成る、しまり非常に強い
 6. 黒色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗黒色土
 9. 暗褐色土

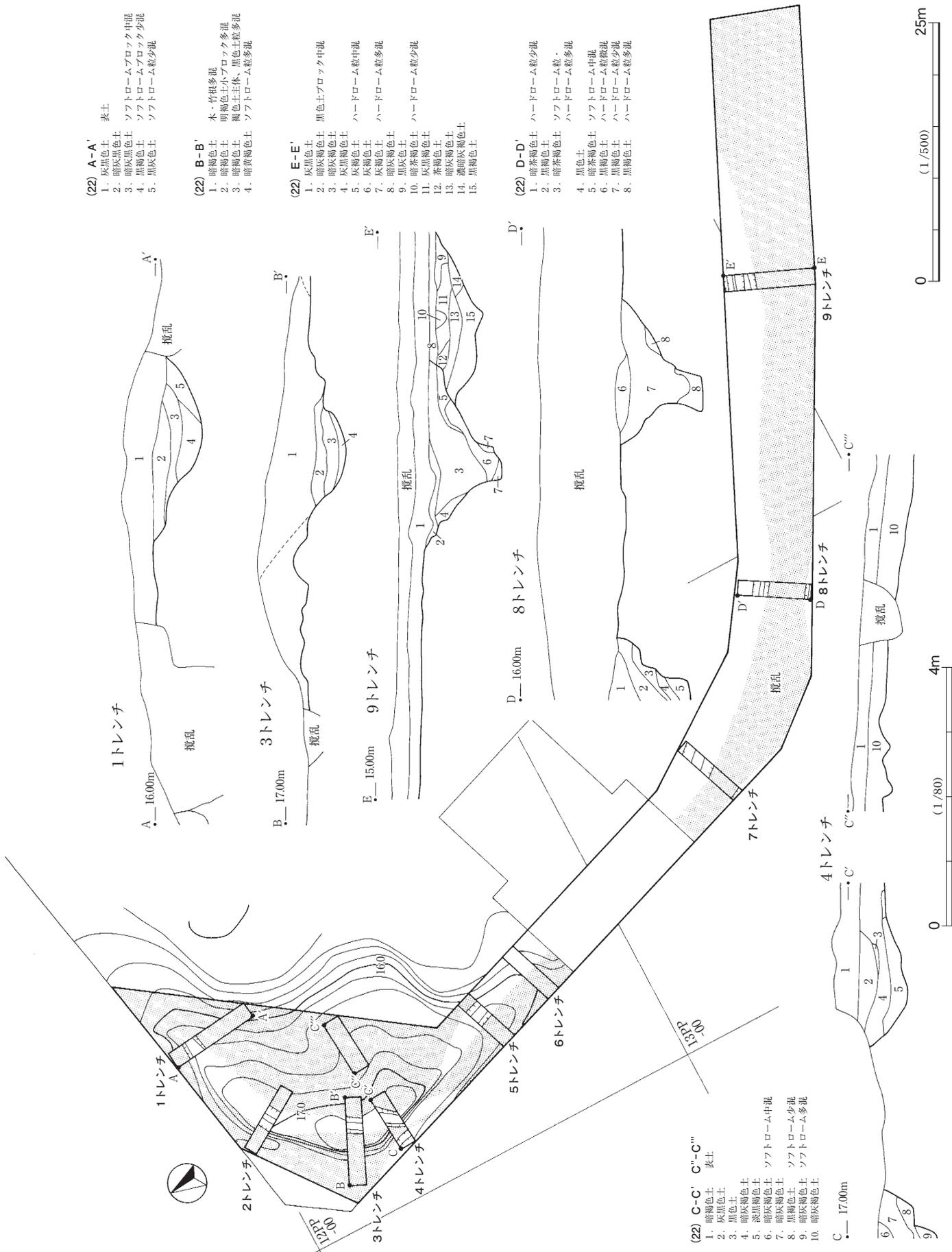
第9図 十太夫野馬土手4-(14)



第11図 十太夫野馬土手6-(7)



第12図 十太夫野馬土手7-(6)



(22) A-A'

- 1. 表土
- 2. 灰黒色土
- 3. 暗灰黒色土
- 4. 暗黒色土
- 5. 黒灰色土

(22) B-B'

- 1. 木、竹根多混
- 2. 暗褐色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗褐色土

(22) E-E'

- 1. 灰黒色土
- 2. 暗灰黒色土
- 3. 暗灰黒色土
- 4. 暗灰黒色土
- 5. 灰褐色土
- 6. 灰褐色土
- 7. 灰褐色土
- 8. 暗灰褐色土
- 9. 黒灰色土
- 10. 暗茶褐色土
- 11. 灰黒色土
- 12. 茶褐色土
- 13. 暗灰褐色土
- 14. 濃暗灰褐色土
- 15. 黒褐色土

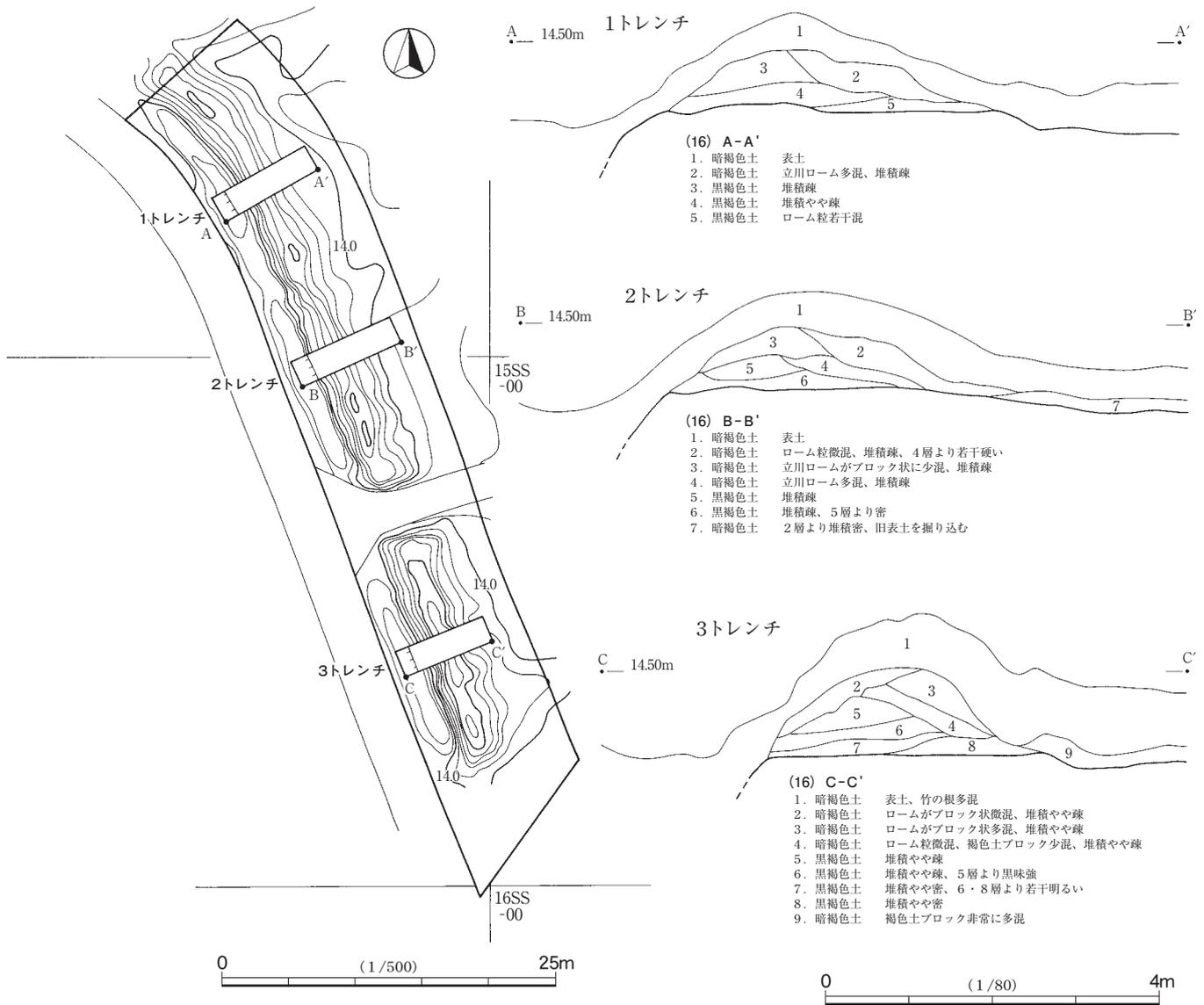
(22) D-D'

- 1. 暗茶褐色土
- 2. 黒褐色土
- 3. 暗茶褐色土
- 4. 黒色土
- 5. 暗茶褐色土
- 6. 黒褐色土
- 7. 暗茶褐色土
- 8. 暗茶褐色土

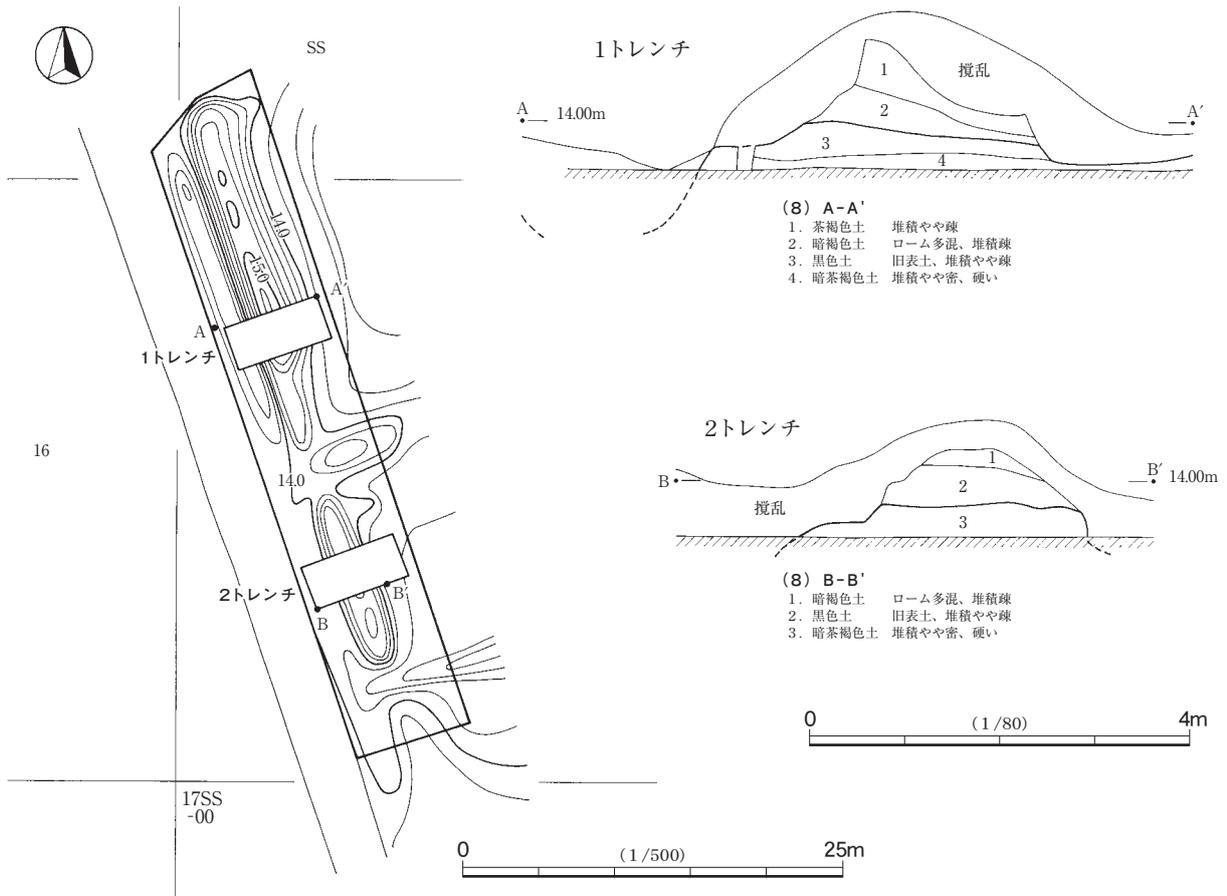
(22) C-C' C''-C'''

- 1. 暗褐色土
- 2. 灰黒色土
- 3. 暗褐色土
- 4. 暗灰褐色土
- 5. 淡黒褐色土
- 6. 暗灰褐色土
- 7. 暗灰褐色土
- 8. 暗灰褐色土
- 9. 暗灰褐色土
- 10. 暗灰褐色土

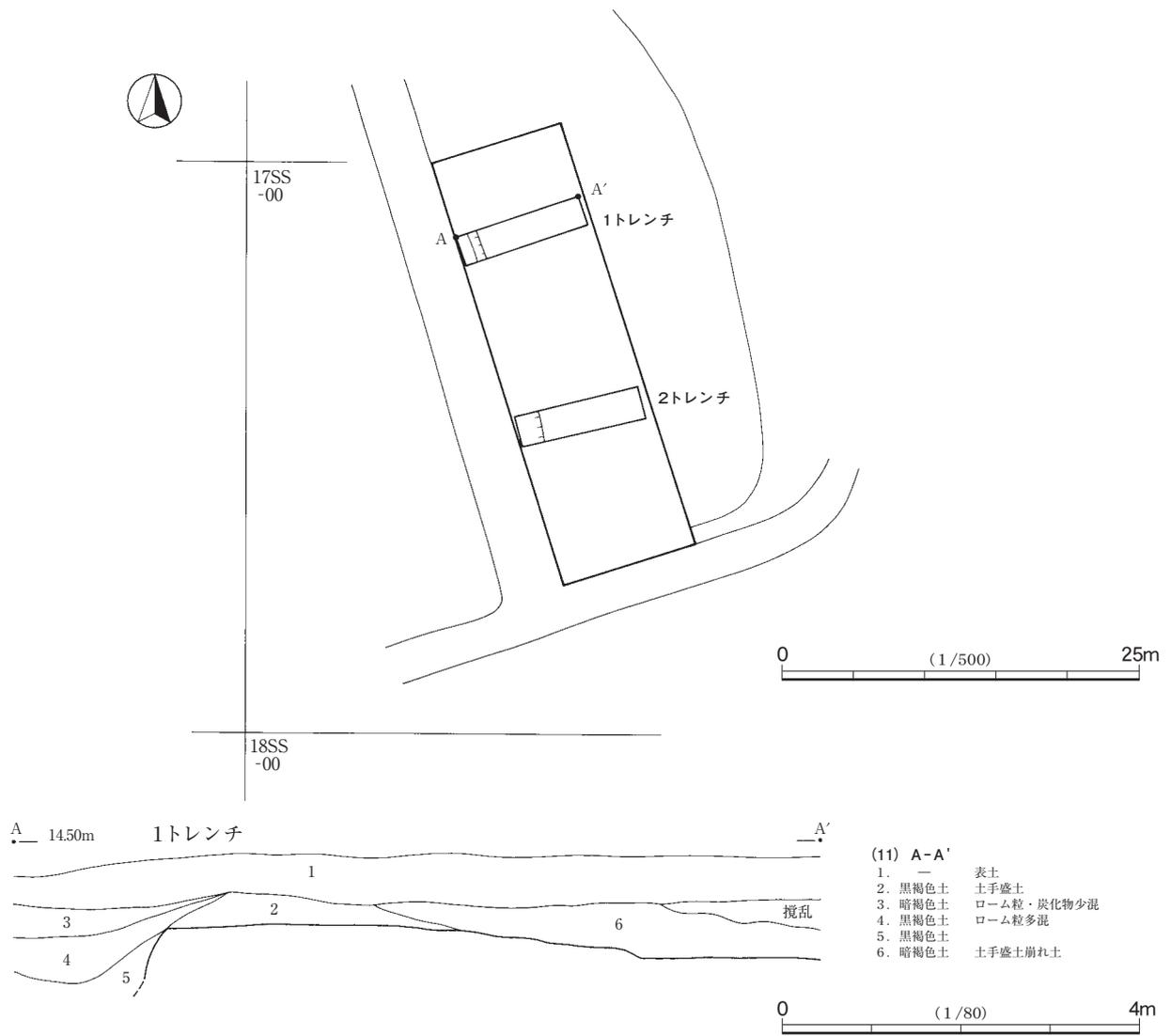
第13図 十太夫野馬土手8-(22)



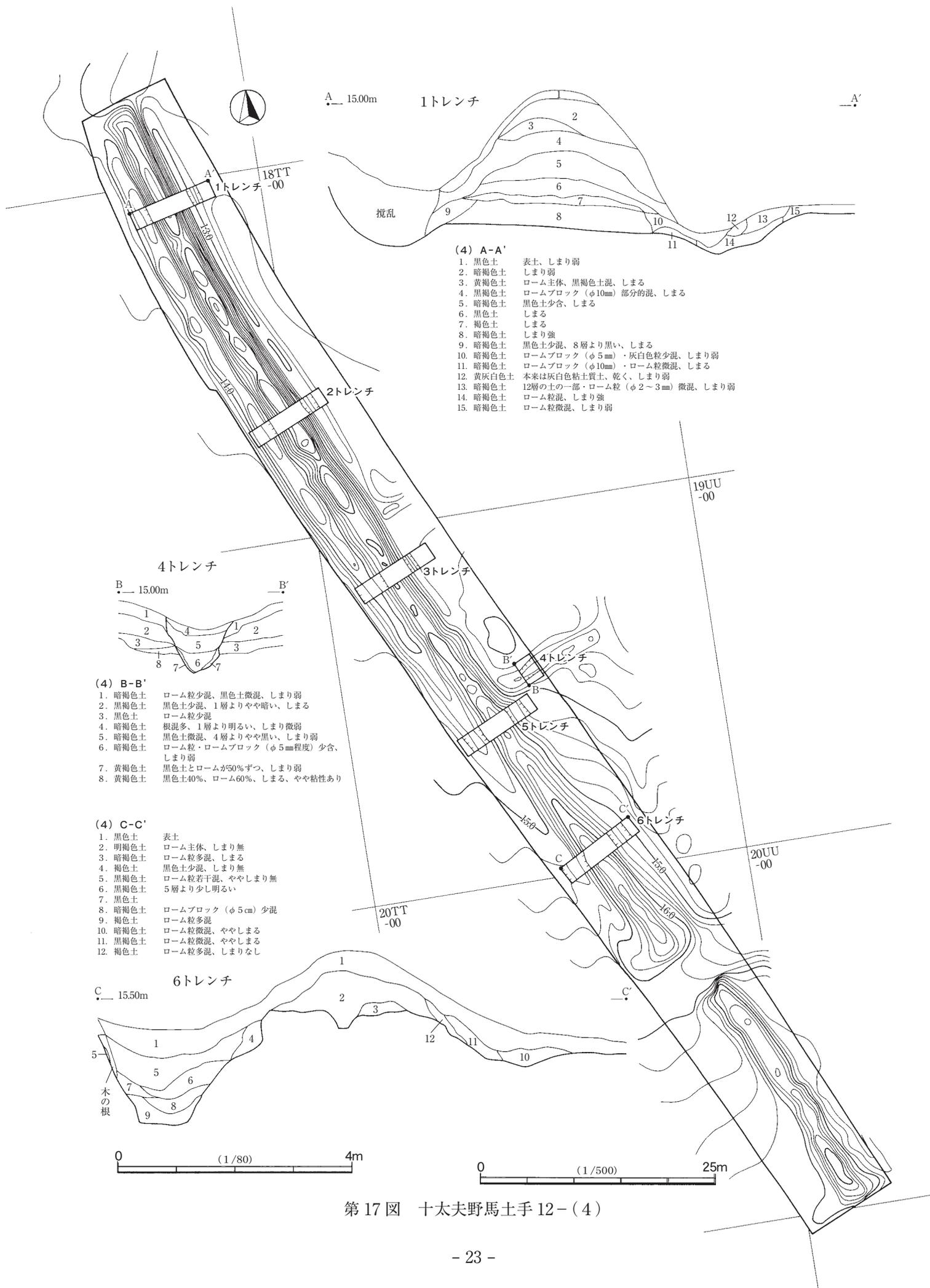
第14図 十太夫野馬土手9-(16)



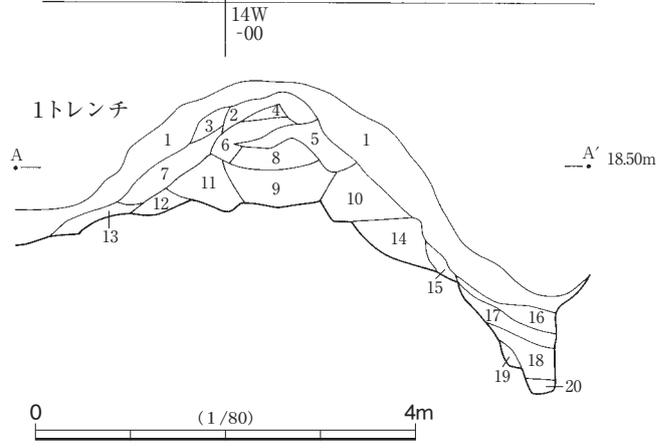
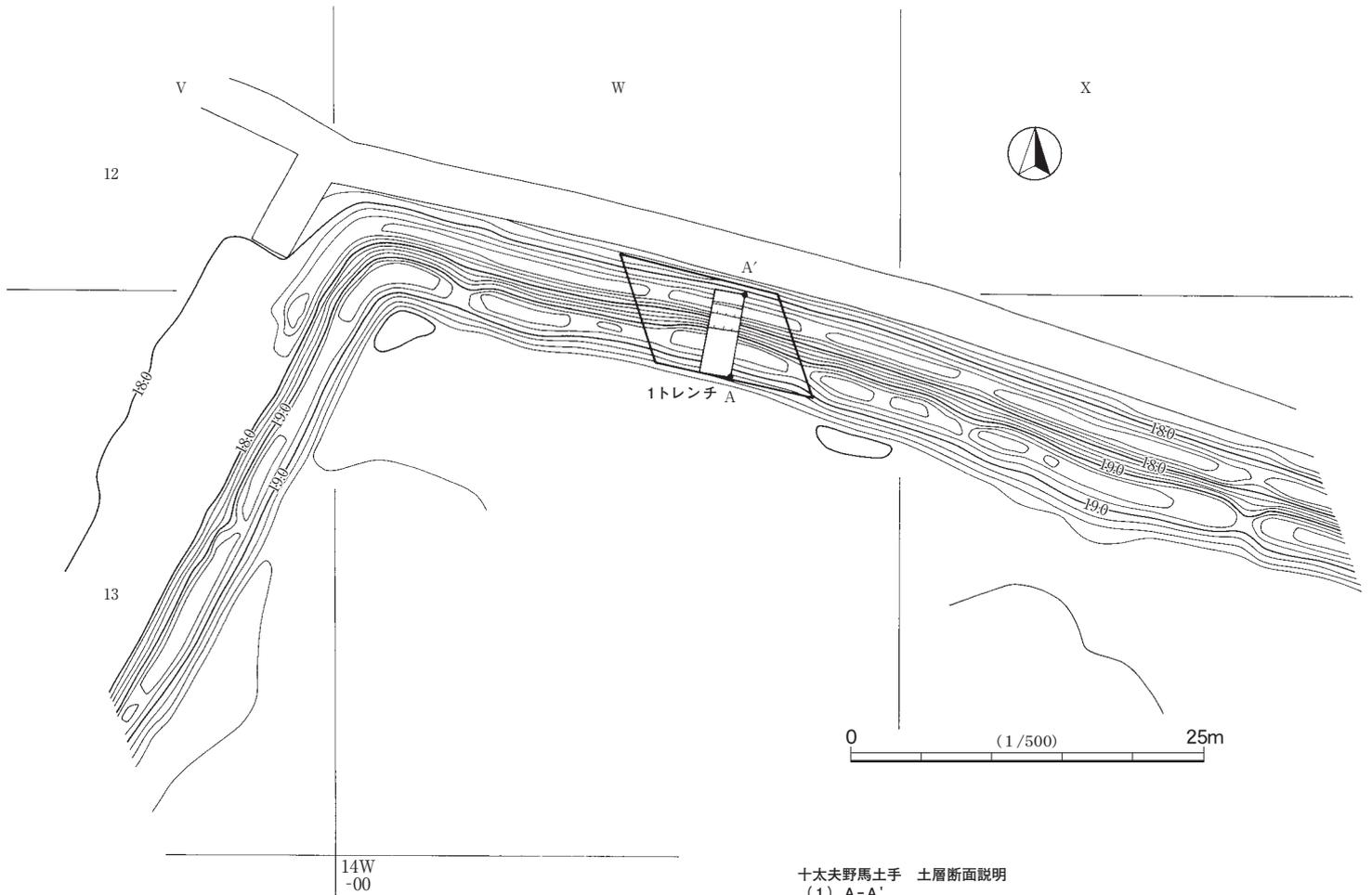
第15図 十太夫野馬土手10-(8)



第 16 図 十太夫野馬土手 11 - (11)

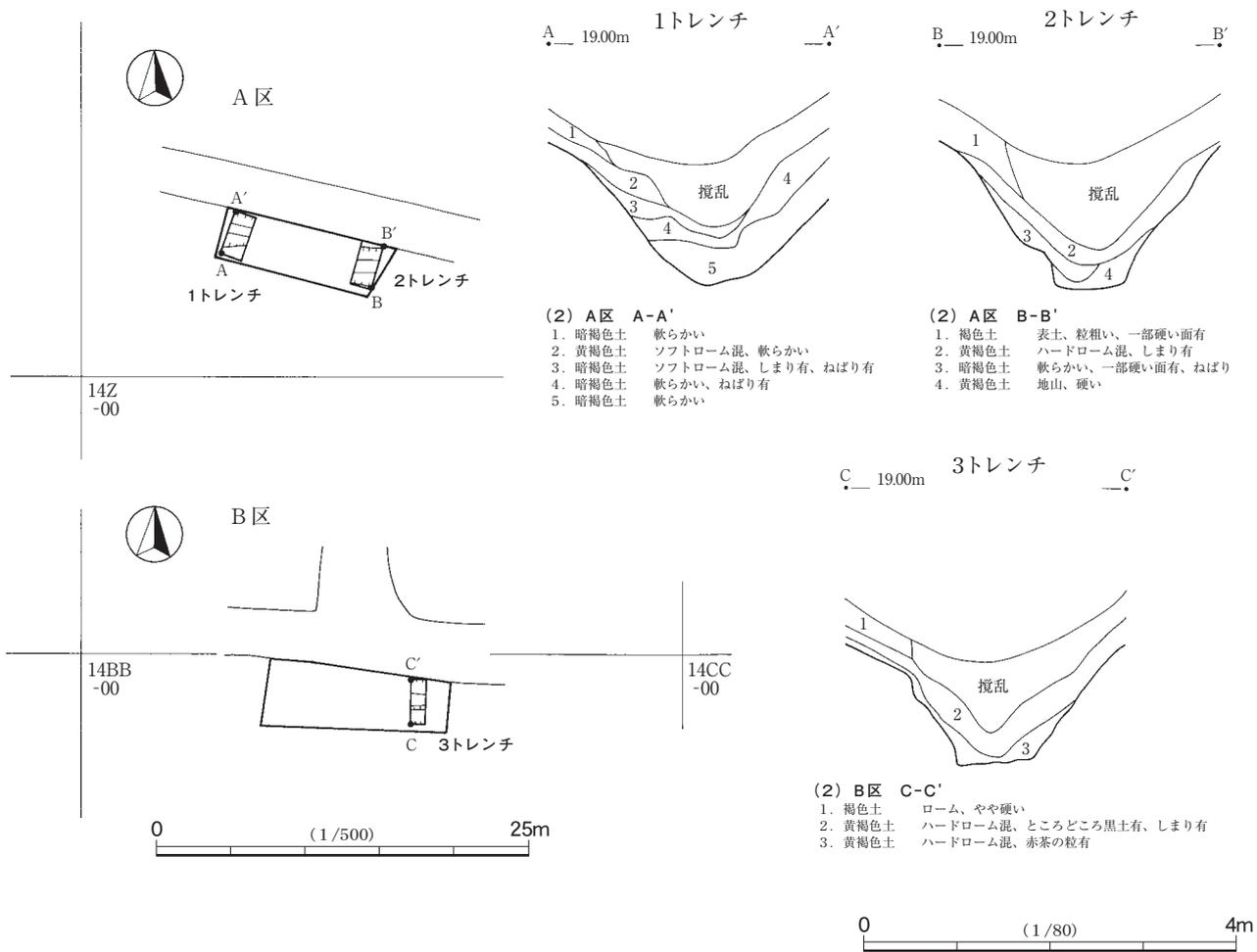


第 17 図 十太夫野馬土手 12-(4)

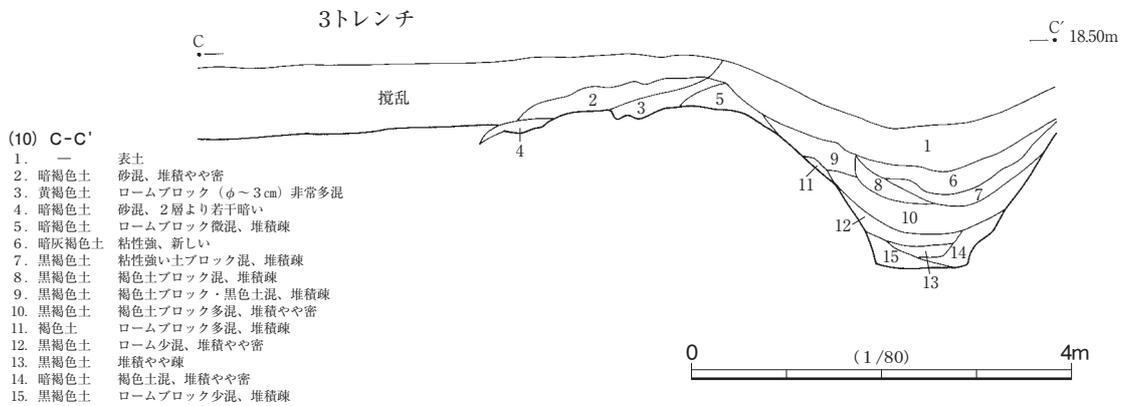
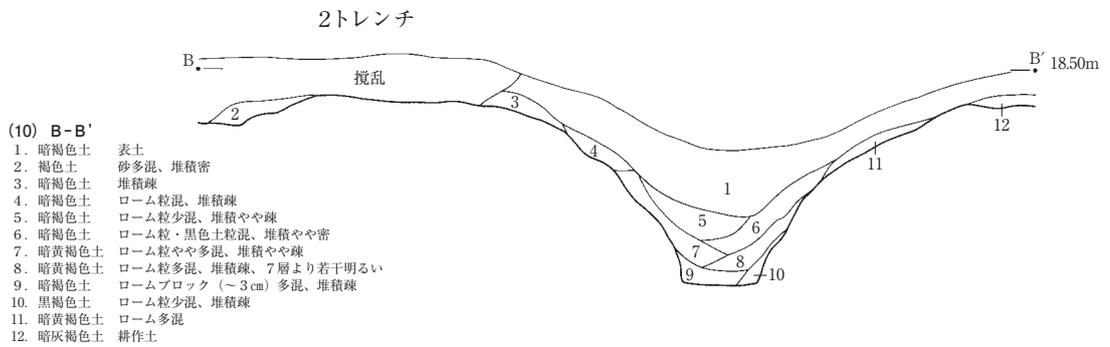
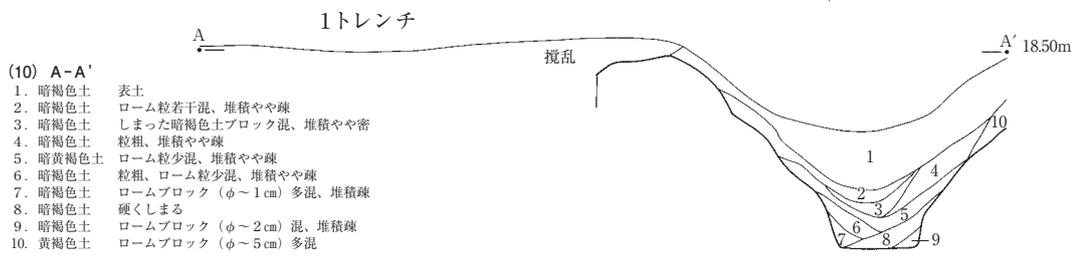
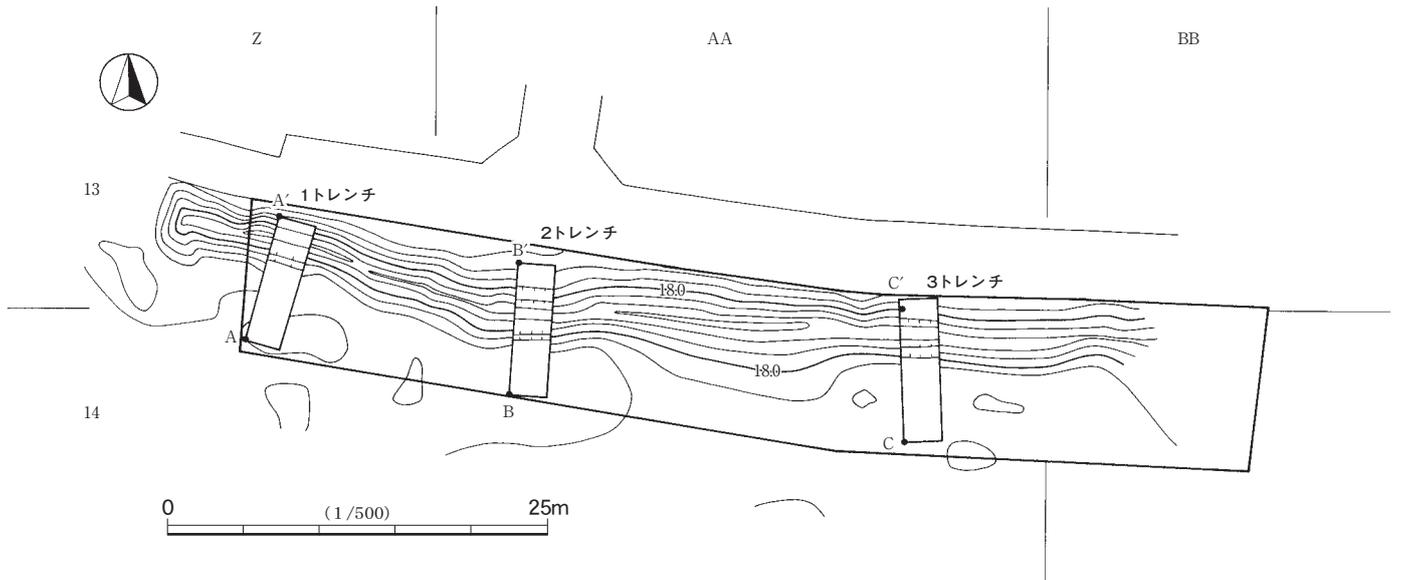


- 十太夫野馬土手 土層断面説明
(1) A-A'
- | | |
|-----------|--------------------|
| 1. 暗褐色土 | 表土 |
| 2. 明褐色土 | ローム粒混 |
| 3. 褐色土 | ローム粒混 |
| 4. 黒色土 | |
| 5. 暗褐色土 | 5層より明るい、ややしまる |
| 6. 暗褐色土 | 6層より明るい |
| 7. 暗褐色土 | |
| 8. 明黄褐色土 | ロームブロック主体、ややしまる |
| 9. 黄褐色土 | ローム小ブロック・黒色土混成、しまる |
| 10. 暗褐色土 | ローム粒混 |
| 11. 明黄褐色土 | ローム粒主体、しまる |
| 12. 暗褐色土 | ローム粒混、しまる |
| 13. 暗褐色土 | しまり強 |
| 14. 明黄褐色土 | 11層に似る |
| 15. 暗黄褐色土 | ローム粒多混 |
| 16. 暗褐色土 | 黒味強 |
| 17. 暗褐色土 | ローム粒混 |
| 18. 褐色土 | ローム粒混、しまる |
| 19. 暗黄褐色土 | 地山ローム崩れ |
| 20. 黒色土 | |

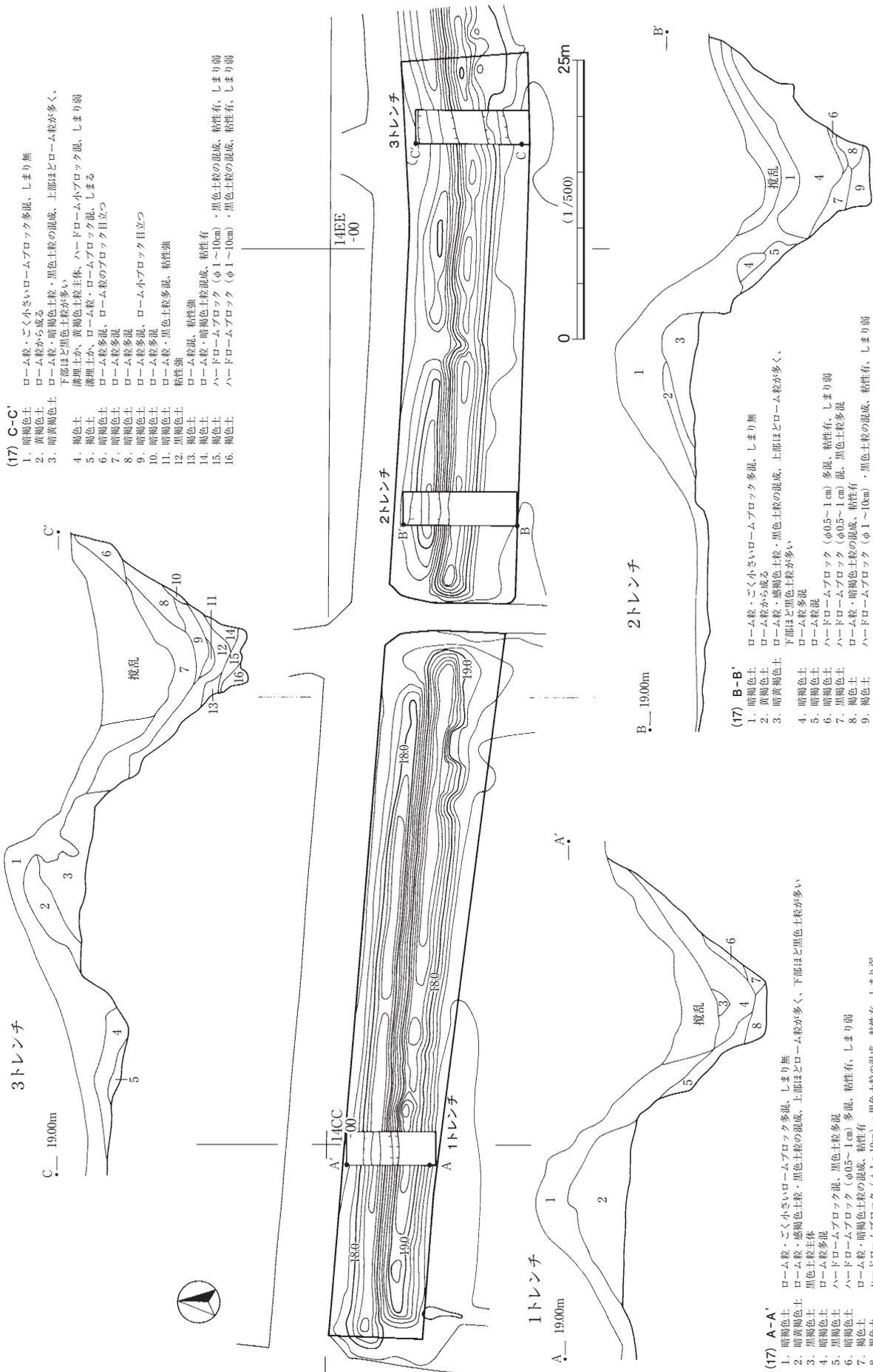
第 20 図 十太夫野馬土手 15-(1)



第 21 図 十太夫野馬土手 16-(2) A 区・B 区



第 22 図 十太夫野馬土手 17-(10)



- (17) C-C'
1. 暗褐色土
 2. 黄褐色土
 3. 暗黄褐色土
 4. 褐色土
 5. 褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 暗褐色土
 10. 暗褐色土
 11. 暗褐色土
 12. 暗褐色土
 13. 褐色土
 14. 褐色土
 15. 褐色土
 16. 褐色土

ローム粒・ごく小さいロームブロック多混、しまり無
 ローム粒から成る
 ローム粒・暗褐色土粒・黒色土粒の混成、上部ほどローム粒が多く、下部ほど黒色土粒が多い
 下部ほど黒色土粒が多い、ハードローム小ブロック混、しまり弱
 遮埋土か、ローム粒・ローム小ブロック混、しまる
 ローム粒多混、ローム粒のブロック目立つ
 ローム粒多混
 ローム粒多混、ローム小ブロック目立つ
 ローム粒多混
 ローム粒多混
 ローム粒・黒色土粒多混、粘性強
 粘性強
 ローム粒混、粘性強
 ローム粒・暗褐色土粒混成、粘性有
 ハードロームブロック (φ1~10mm) ・黒色土粒の混成、粘性有、しまり弱
 ハードロームブロック (φ1~10mm) ・黒色土粒の混成、粘性有、しまり弱

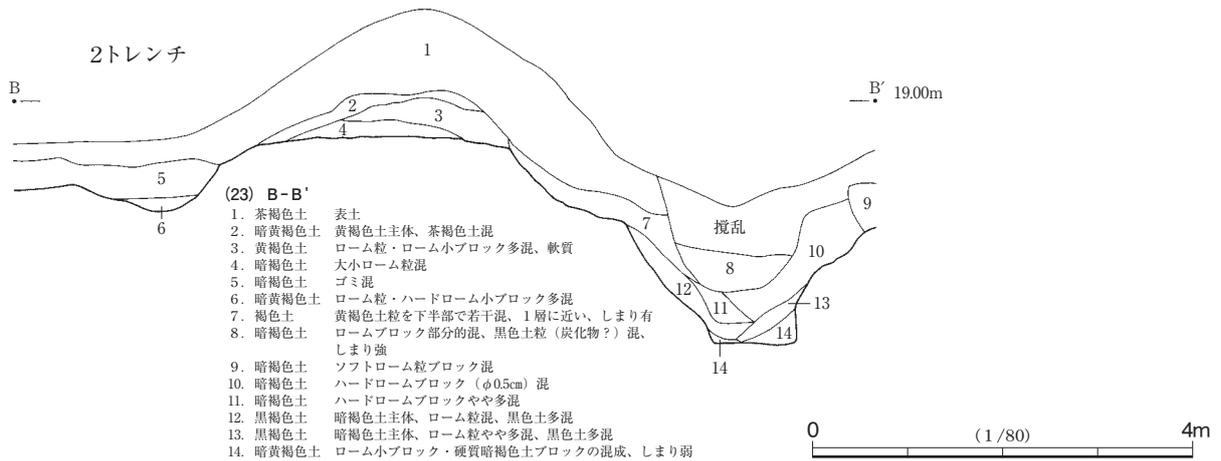
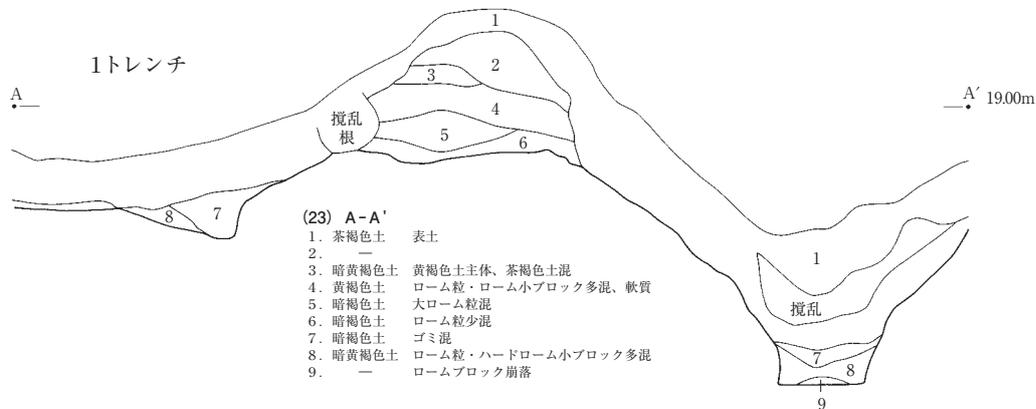
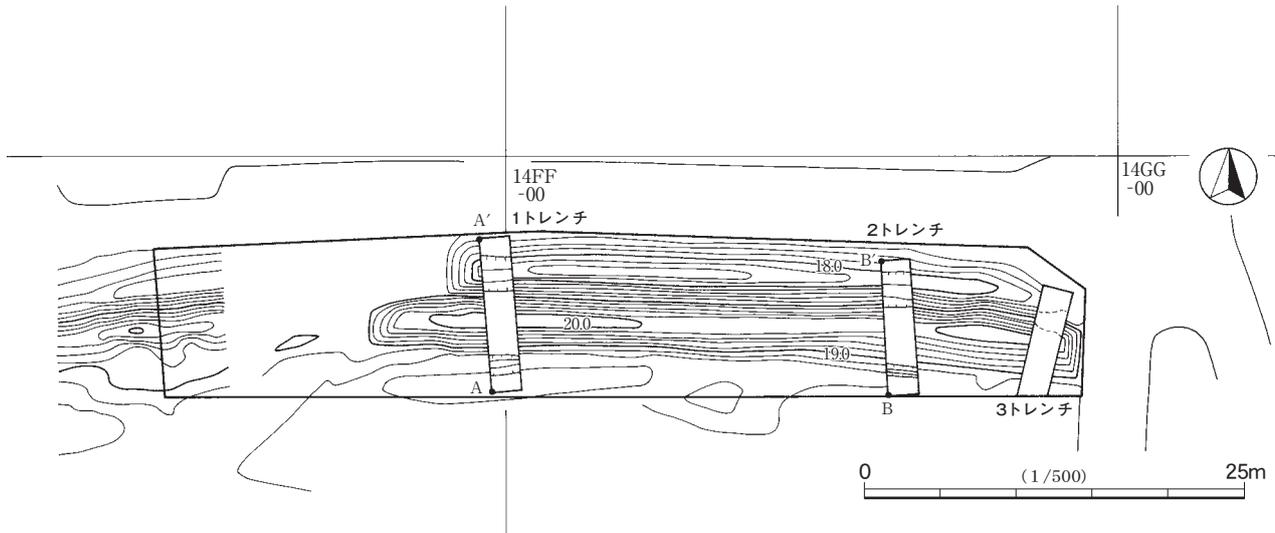
- (17) B-B'
1. 暗褐色土
 2. 黄褐色土
 3. 暗黄褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 褐色土
 9. 褐色土

ローム粒・ごく小さいロームブロック多混、しまり無
 ローム粒から成る
 ローム粒・暗褐色土粒・黒色土粒の混成、上部ほどローム粒が多く、下部ほど黒色土粒が多い
 ローム粒多混
 ローム粒多混
 ハードロームブロック (φ0.5~1cm) 多混、粘性有、しまり弱
 ハードロームブロック (φ0.5~1cm) 混、黒色土粒多混
 ローム粒・暗褐色土粒の混成、粘性有
 ハードロームブロック (φ1~10mm) ・黒色土粒の混成、粘性有、しまり弱

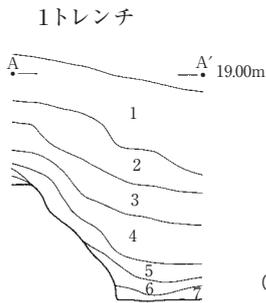
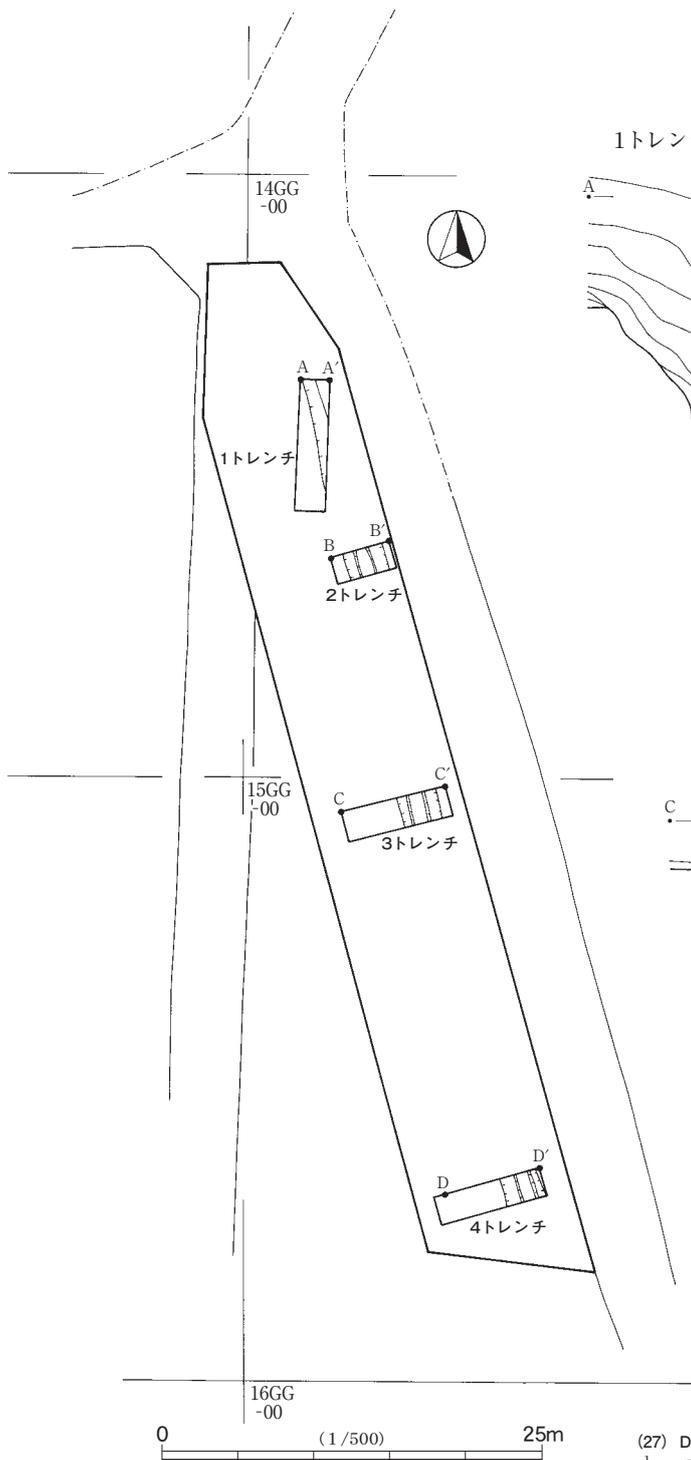
- (17) A-A'
1. 暗褐色土
 2. 暗黄褐色土
 3. 暗黄褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 褐色土

ローム粒・ごく小さいロームブロック多混、しまり無
 ローム粒・暗褐色土粒・黒色土粒の混成、上部ほどローム粒が多く、下部ほど黒色土粒が多い
 黒色土粒主体
 ローム粒多混
 ハードロームブロック混、黒色土粒多混
 ハードロームブロック (φ0.5~1cm) 多混、粘性有、しまり弱
 ローム粒・暗褐色土粒の混成、粘性有
 ハードロームブロック (φ1~10mm) ・黒色土粒の混成、粘性有、しまり弱

第 23 図 十太夫野馬土手 18-(17)

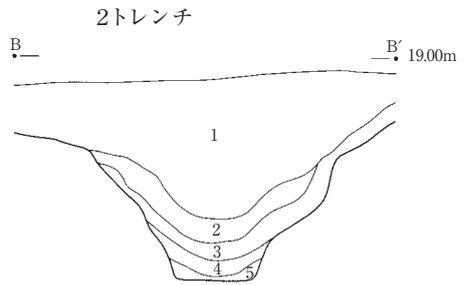


第 24 図 十太夫野馬土手 19-(23)



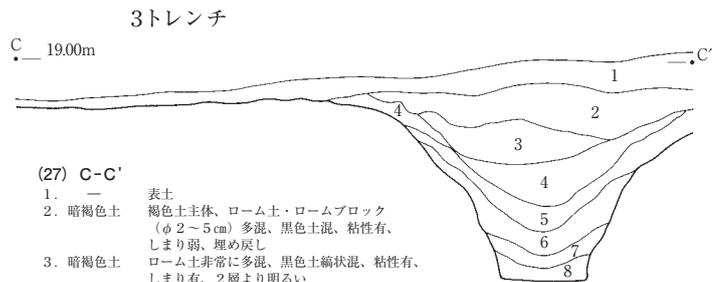
(27) A-A'

- 表土
1. 黄褐色土 ローム土・ロームブロック (φ 2~5cm) 主体、粘性有、しまり有
 2. 暗褐色土 褐色土主体、ロームブロック (φ 2~5cm) 少混、粘性有、しまり有
 3. 黒褐色土 黒色土主体、褐色土多混、粘性有、しまり有
 4. 黄褐色土 黄褐色ローム土主体、ローム粒 (φ 1~10mm) 多混、ロームブロック (φ 2~5cm) 微混、黒色土・褐色土多混、粘性有、しまり有
 5. 黒褐色土 黒色土主体、ローム土・ローム粒・褐色土少混、粘性やや強、しまり有
 6. 黄褐色土 ローム粒 (φ 1~10mm) ・黄褐色ロームブロック (φ 2~5cm) ・黒色土の混成層、粘性強、しまりやや有



(27) B-B'

- 表土
1. 黒褐色土 黒色土主体、ローム土・ローム粒少混、粘性有、しまり有
 2. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ローム粒 (φ 1~10mm) 多混、黒色土少混、粘性有、しまり有、2層より明るい
 3. 黒褐色土 黒色土主体、ローム土・ローム粒 (φ 1~10mm) 微混、粘性有、しまり有、2層より暗い
 4. 黄褐色土 黄褐色ローム土・ロームブロック主体、黒色土混、粘性有、しまり有



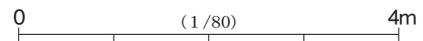
(27) C-C'

- 表土
1. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土・ロームブロック (φ 2~5cm) 多混、黒色土混、粘性有、しまり弱、埋め戻し
 2. 暗褐色土 ローム土非常に多混、黒色土筋状混、粘性有、しまり有、2層より明るい
 3. 黒褐色土 黒色土主体、ロームブロック (φ 2~5cm) 多混、褐色土少混、粘性有、しまり有
 4. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土少混、ローム粒 (φ 2~3mm) やや多混、黒色土少混、粘性有、しまり有
 5. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土多混、ローム粒 (φ 1~10mm) 非常に多混、粘性有、しまりやや弱、5層より明るい
 6. 黒褐色土 黒色土主体、褐色土、ローム粒 (φ 1~10mm) ・ロームブロック (φ 2~10cm) 多混、粘性やや強、しまり有
 7. 黄褐色土 黄褐色ローム土・黄褐色ロームブロック (φ 1~10cm) の混成、ローム粒 (φ 1~10mm) 非常に多混、黒色土混、粘性強、しまりやや弱

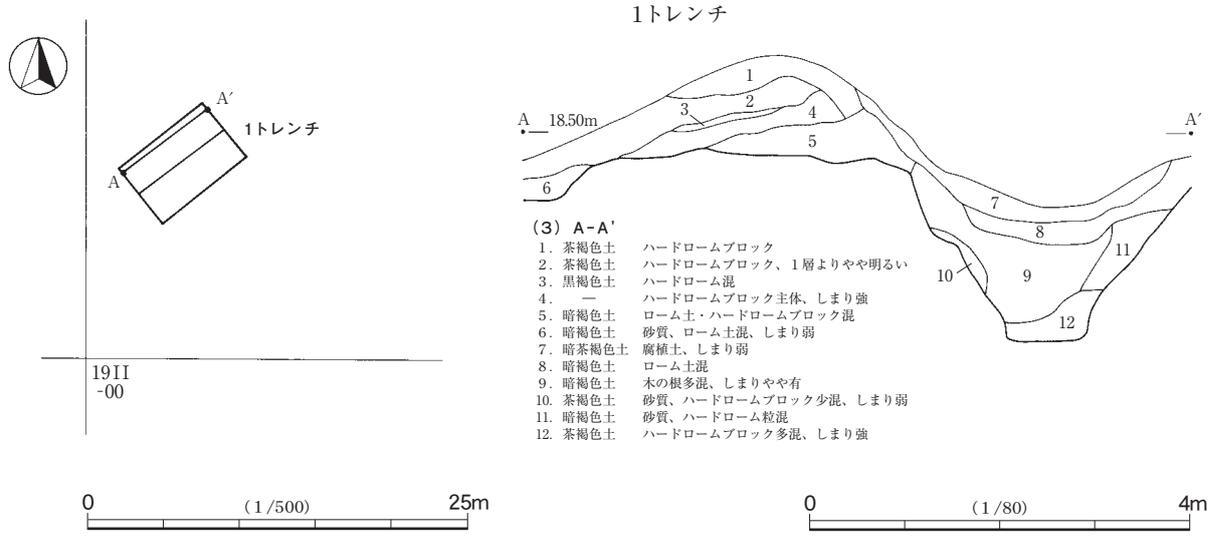


(27) D-D'

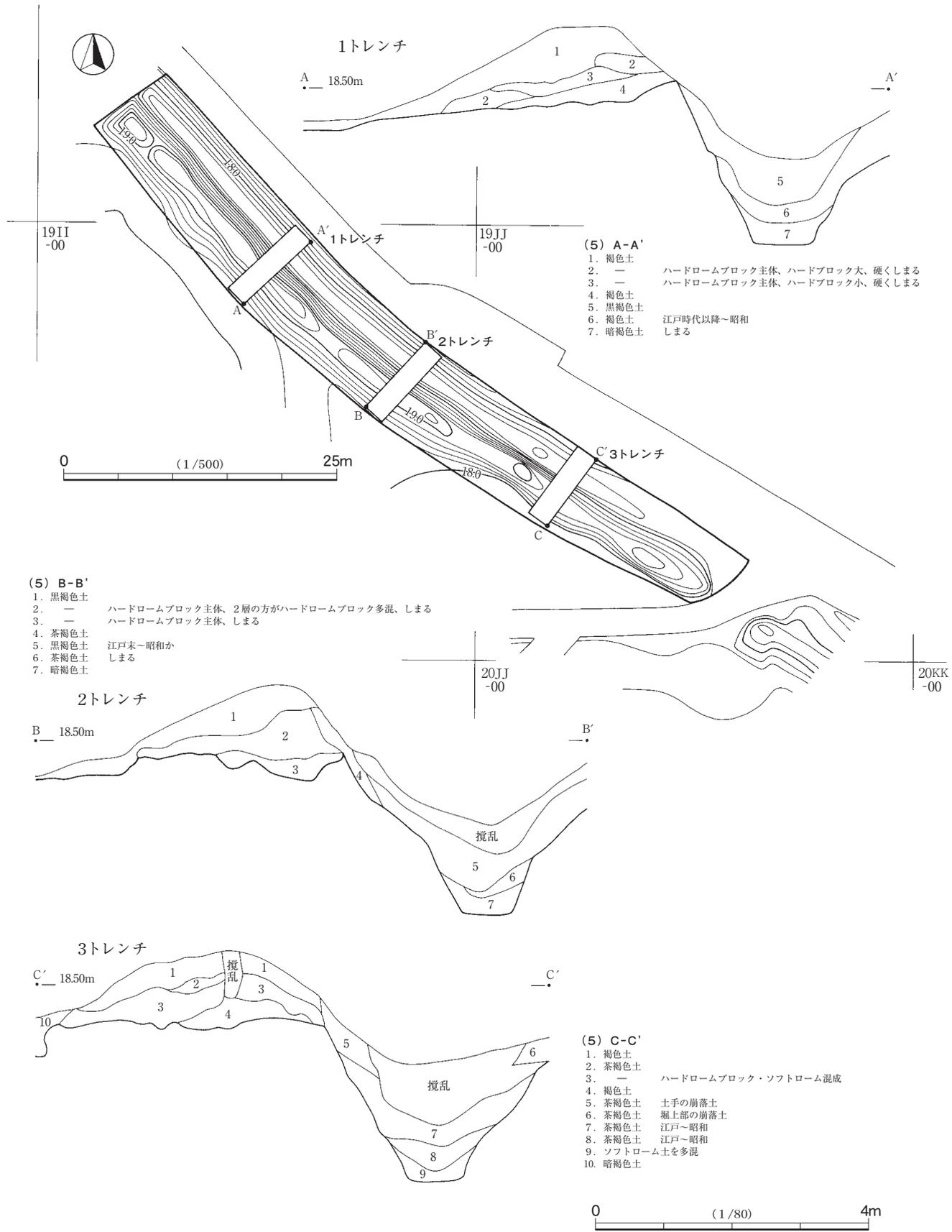
- 表土
1. 黄褐色土 ローム土主体、ローム粒 (φ 1~10mm) ・ロームブロック (φ 1~5cm) 多混、褐色土少混、粘性有、しまりやや強
 2. 暗褐色土 褐色土主体、ローム土多混、ロームブロック (φ 2~5cm) 多混、黒色土少混、粘性有、しまり有
 3. 暗褐色土 褐色土主体、ゴミ混、ローム土・ローム粒 (φ 1~10mm) やや多混、ロームブロック (φ 1~10cm) やや多混 (西側に多く)、黒色土やや多混、粘性有、しまり有、3層より暗い
 4. 黄褐色土 ローム土・ローム粒 (φ 1~10mm) 主体、ロームブロック (φ 2~3cm) 少混、褐色土・黒色土少混、粘性有、しまり弱
 5. 黒褐色土 黒色土主体、ローム土・ローム粒 (φ 1~10mm) ・ロームブロック (φ 2~3cm) 少混、粘性やや強、しまり有
 6. 黄褐色土 黄褐色ローム土・ロームブロック (φ 2~5cm) ・黒色土の混成、ローム粒 (φ 1~10mm) 非常に多混、粘性強、しまりやや弱



第 25 図 十太夫野馬土手 20-(27)



第27図 十太夫野馬土手 22-(3)

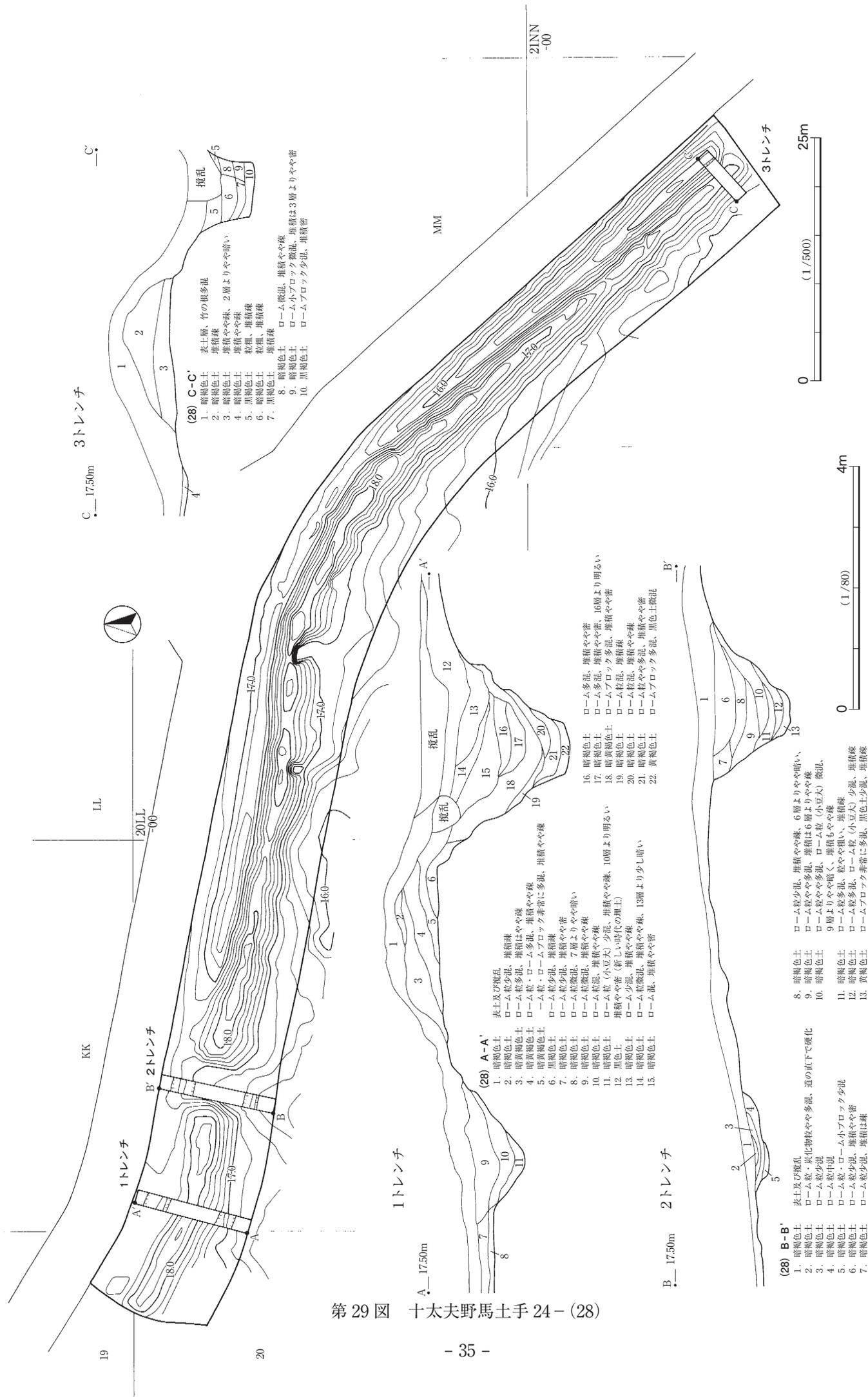


- (5) A-A'
- 1. 褐色土
 - 2. — ハードロームブロック主体、ハードブロック大、硬くしまる
 - 3. — ハードロームブロック主体、ハードブロック小、硬くしまる
 - 4. 褐色土
 - 5. 黒褐色土
 - 6. 褐色土 江戸時代以降～昭和
 - 7. 暗褐色土 しまる

- (5) B-B'
- 1. 黒褐色土
 - 2. — ハードロームブロック主体、2層の方がハードロームブロック多混、しまる
 - 3. — ハードロームブロック主体、しまる
 - 4. 茶褐色土
 - 5. 黒褐色土 江戸末～昭和か
 - 6. 茶褐色土 しまる
 - 7. 暗褐色土

- (5) C-C'
- 1. 褐色土
 - 2. 茶褐色土
 - 3. — ハードロームブロック・ソフトローム混成
 - 4. 褐色土
 - 5. 茶褐色土 土手の崩落土
 - 6. 茶褐色土 堀上部の崩落土
 - 7. 茶褐色土 江戸～昭和
 - 8. 茶褐色土 江戸～昭和
 - 9. ソフトローム土を多混
 - 10. 暗褐色土

第 28 図 十太夫野馬土手 23-(5)



C. 17.50m
3トレンチ

KK
1トレンチ
B' 2トレンチ

A. 17.50m
1トレンチ

B. 17.50m
2トレンチ

- (28) C-C'
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 暗褐色土
 10. 暗褐色土
- 表土層、竹の根多混
堆積礫
堆積ややや暗い
堆積ややや暗い
粒粗、堆積礫
堆積礫
堆積礫
ローム微混、堆積やや暗
ローム小アプロック微混、堆積は3層よりやや密
ロームアプロック少混、堆積密

- (28) A-A'
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 暗褐色土
 10. 暗褐色土
 11. 暗褐色土
 12. 暗褐色土
 13. 暗褐色土
 14. 暗褐色土
 15. 暗褐色土
- 表土及び攪乱
ローム粒少混、堆積礫
ローム粒多混、堆積はやや暗
ローム粒・ローム多混、堆積やや暗
ローム粒・ロームアプロック非常に多混、堆積やや暗
ローム粒少混、堆積礫
ローム粒微混、堆積やや暗
ローム粒微混、堆積やや暗
ローム粒 (小豆大) 少混、堆積やや暗
堆積やや密 (新しい時代の埋土)
ローム粒少混、堆積やや暗
ローム粒微混、堆積やや密

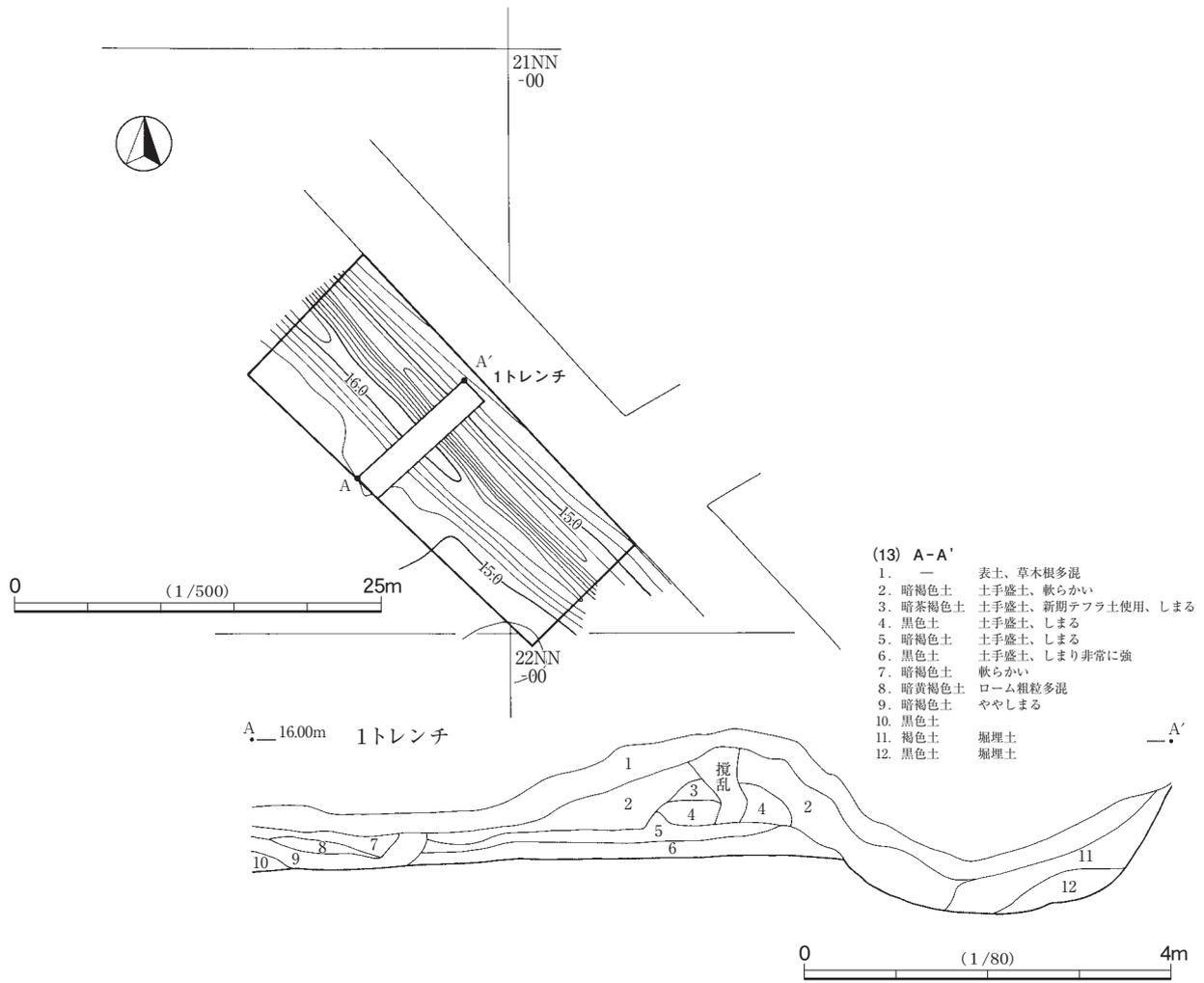
- (28) B-B'
1. 暗褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 暗褐色土
 5. 暗褐色土
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土
 9. 暗褐色土
 10. 暗褐色土
 11. 暗褐色土
 12. 暗褐色土
 13. 暗褐色土
- 表土及び攪乱
ローム粒・炭化物粒やや多混、道の直下で硬化
ローム粒少混
ローム粒中混
ローム粒、ローム粒 (小豆大) 少混
ローム粒少混、堆積やや密
ローム粒少混、堆積は礫

- (28) C-C'
16. 暗褐色土
 17. 暗褐色土
 18. 暗褐色土
 19. 暗褐色土
 20. 暗褐色土
 21. 暗褐色土
 22. 暗褐色土
- ローム多混、堆積やや密
ローム多混、堆積やや密、16層より明るい
ローム多混、堆積礫
ローム粒混、堆積礫
ローム粒やや多混、堆積やや密
ローム土微混

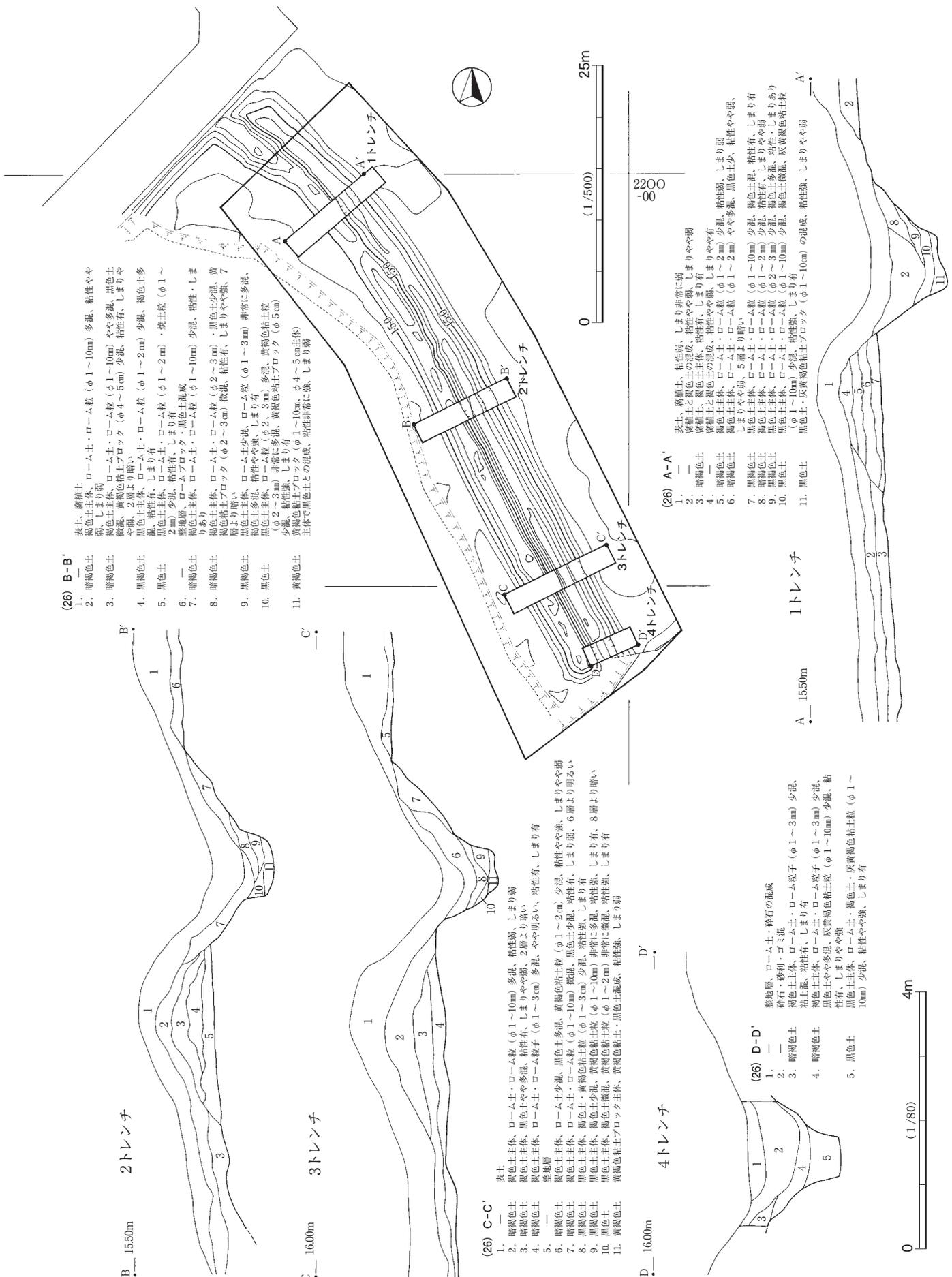
0 25m
(1/500)

0 4m
(1/80)

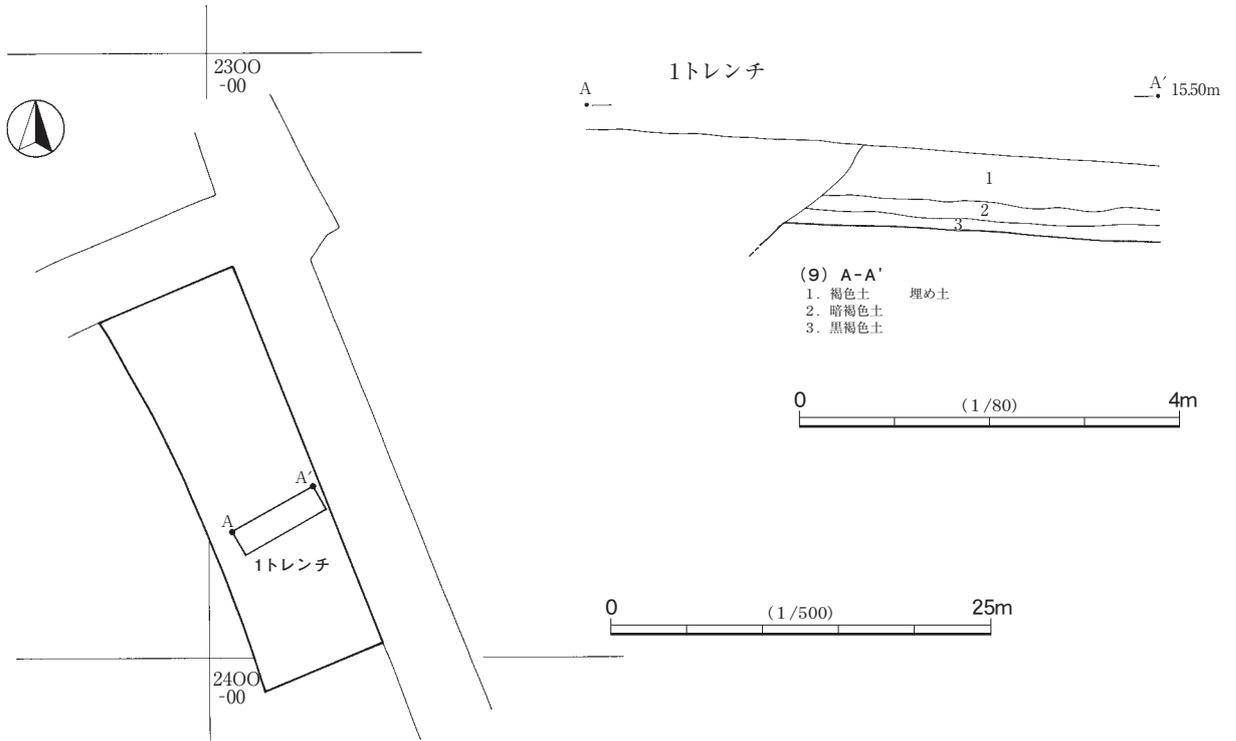
第 29 図 十太夫野馬土手 24-(28)



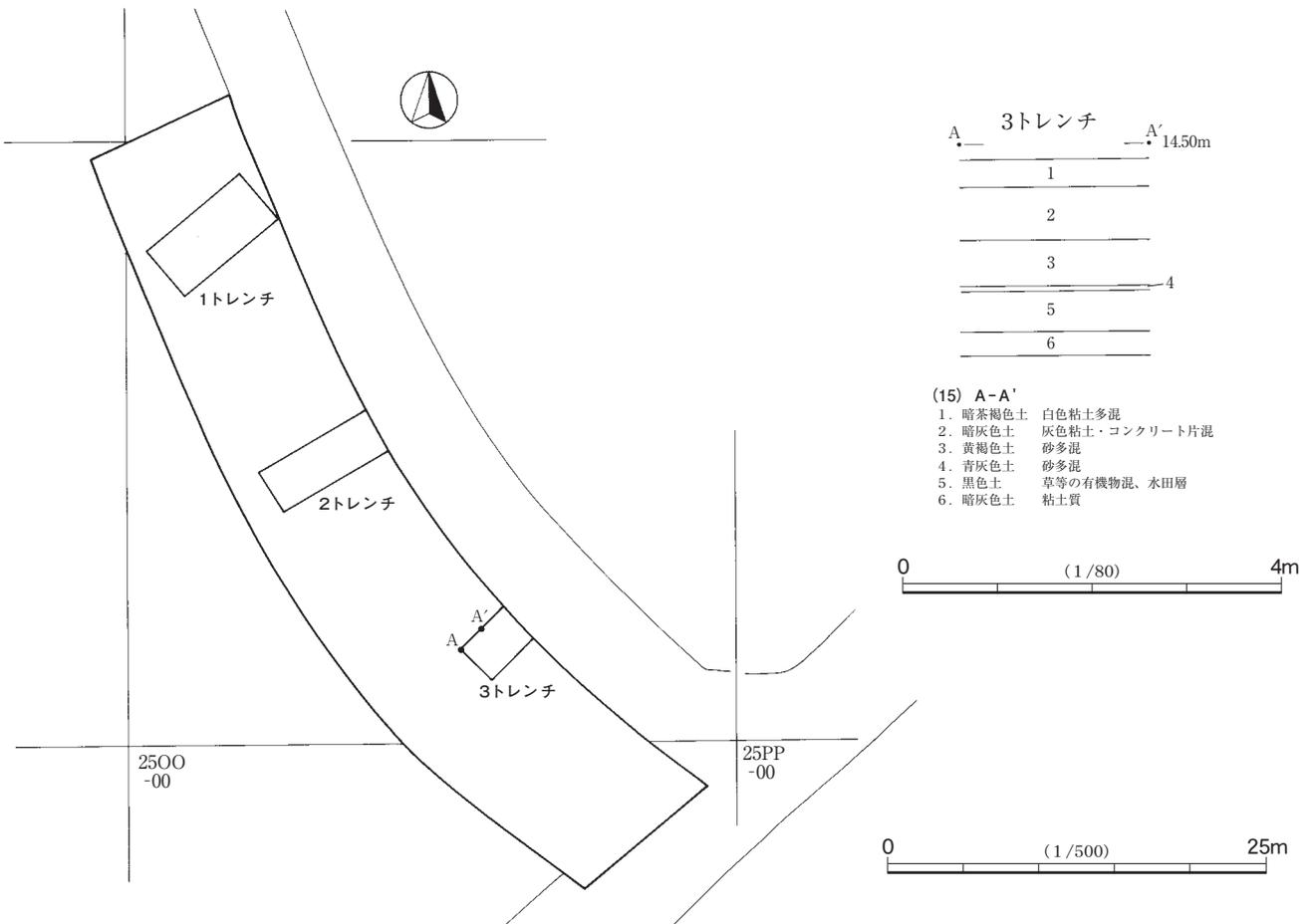
第 30 図 十太夫野馬土手 25 - (13)



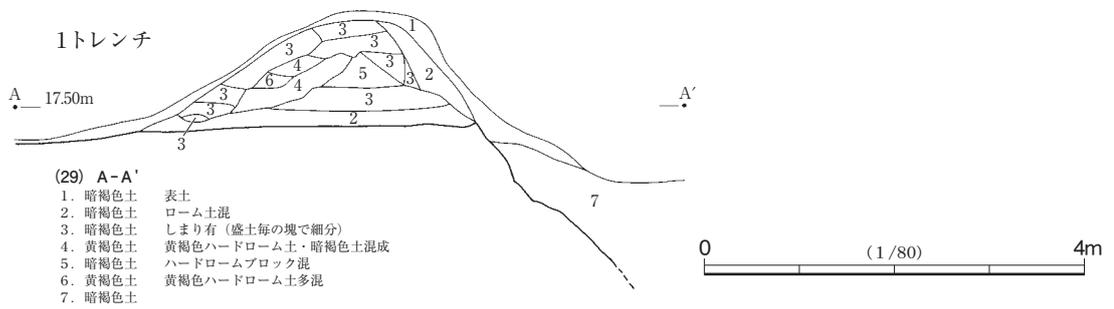
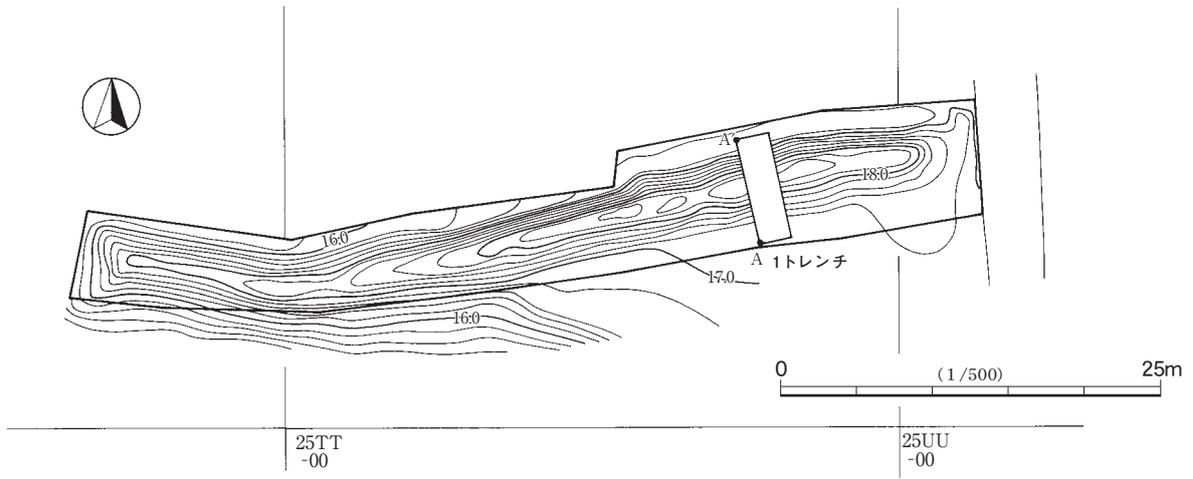
第 31 図 十太夫野馬士手 26 - (26)



第 32 図 十太夫野馬土手 27-(9)



第 33 図 十太夫野馬土手 28-(15)



第 35 図 十太夫野馬土手 30-(29)

2 市野谷駒木野馬土手（第4表・第4・5図（G-H）・36～37図、図版6・7）

野馬土手は柏市域より大堀川に沿い、東西に伸びている。日光街道東往還を横切り南下し、牛飼沢上流の湧水地より流れ出た小河川に沿って、日光街道方面へ向かう。台地縁辺に構築されている。現在の「豊四季」という地名から分かるとおり明治維新後の開墾の手が早く入った地域である。畑・果樹園に開墾されている地区も多いため、野馬土手の遺存状況の良好な地点と、痕跡を残さない地点との差異が激しい。

現在はつくばエクスプレスの流山おおたかの森駅の付近にあり、すっかりその様相は変わっている。この牛飼沢付近の湧水地は「房総の近世牧跡」において水飲み場としている地点である。

調査対象面積 2,983㎡、調査対象区全長 736m であった。この先、江戸川から入る入り組んだ台地縁辺に沿って南下し、江戸川低地に向かっての上野牧の外周を構成する一部と考えられる。

3 駒木野馬土手（第5表・第4・5図（A-B）・38～40図、図版7）

大堀川東岸に位置し、流山市成顕寺地崎付近より江戸川大学付近に延び、県道 279 号線をわたり、大堀川方面へと台地を下るように伸びる。大堀川を境として北東側は高田台牧となる。外周の土手の一部と考えられる。今回の調査区域は、調査対象面積 1,783㎡、調査対象区全長 140m であった。早い時期より開墾、宅地開発が行われたため、昭和 30 年代頃までは野馬土手も遺存していたと言う地元の話もあるものの、現在ではその大半が姿を消している。

第2節 出土遺物（第41図、図版7）

すべての遺物が野馬土手盛り土またはトレンチ内からの出土したものである。第2図（第2表）、第3図でみられるとおり、野馬土手周辺には旧石器時代～近世に至る数多くの遺跡が所在し、またこれらの遺跡内を野馬土手が通ってはいるものの、今回の調査においては、野馬土手の狭い範囲の調査であったため、それらと共通するような遺構や遺物の検出は得られなかった。

1 縄文時代

1～3は十太夫野馬土手の盛り土および堀埋土中からの出土である。第2・3図で示すとおり十太夫野馬土手の所在するエリアにはこれらの時期の遺跡はみられない。

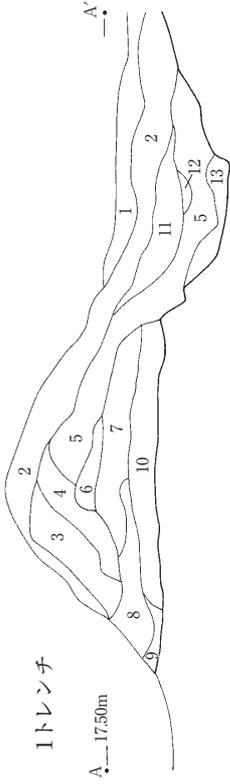
1は安行Ⅱ系の深鉢であろうか。正面突起と思われる猫耳状の突起がみられる。2・3は類似の深鉢胴部破片である。野馬土手構築時に運搬された土中に含まれていたと考えられる。4は安山岩製の磨石である。磨石、叩石または凹み石としての利用がされたか、多様な痕跡が見られる。盛り土中からの出土であるため1～3の土器と同時期であるかは確定し得ないが、縄文時代のものと思われる。5～7は砥石片である。すべて摩耗し破損している。時期は不明である。

8～11は市野谷駒木野馬土手盛り土中から出土したものである。8はチャート製の剝片である。使用痕などは見られない。色調は褐色を示す。9は縄文時代中期加曾利E式中葉期の深鉢で、無文の口縁が大きく外反し、肩部に区画文帯が施されている。口縁部に赤彩が施される。10は加曾利B式における紐線紋系の深鉢の口縁である。口縁は内湾している。11は完形に近い砥石である。良好な石質で、中央部の摩耗状態からかなり丁寧に使用されていたものと思われる。野馬土手築造時に使用されたと考えられる。

市野谷駒木野馬土手 土層断面説明

(1) A-A'

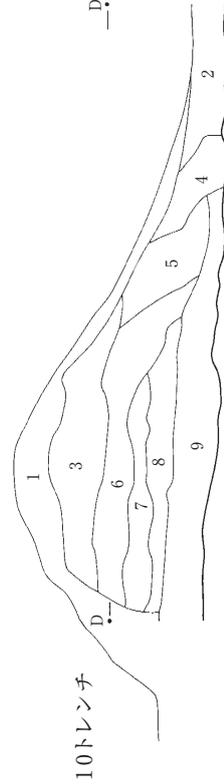
1. 黒色土
2. 吹き溜まった土
3. 表土
4. ハードロームブロック混
5. ローム土混
6. ローム土混
7. ハードロームブロックから成る
8. 野馬土手の崩落土
9. 焼土塊混
10. 黒色土
11. 黒色土
12. 黒色土
13. 黒色土



D' 15.50m

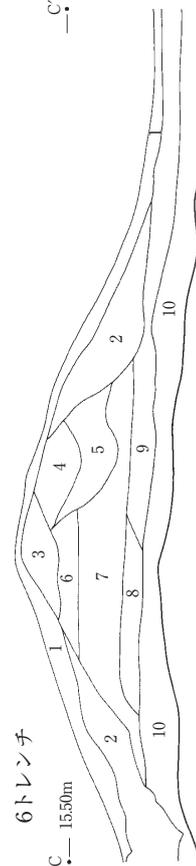
(1) D-D'

1. 黒色土
2. 野馬土手の崩落土
3. 野馬土手の崩落土
4. 野馬土手の崩落土
5. 野馬土手の崩落土
6. ハードローム混
7. ハードローム混
8. ハードローム混
9. 野馬土手の崩落土



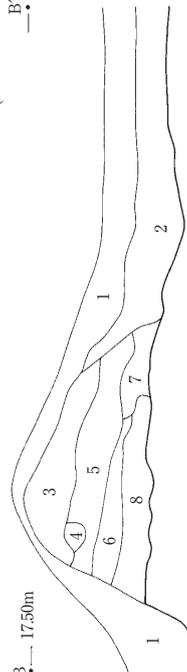
(1) C-C'

1. 野馬土手の崩落土
2. 野馬土手の崩落土
3. 野馬土手の崩落土
4. 野馬土手の崩落土
5. 野馬土手の崩落土
6. 野馬土手の崩落土
7. 野馬土手の崩落土
8. 野馬土手の崩落土
9. 野馬土手の崩落土
10. 野馬土手の崩落土



(1) B-B'

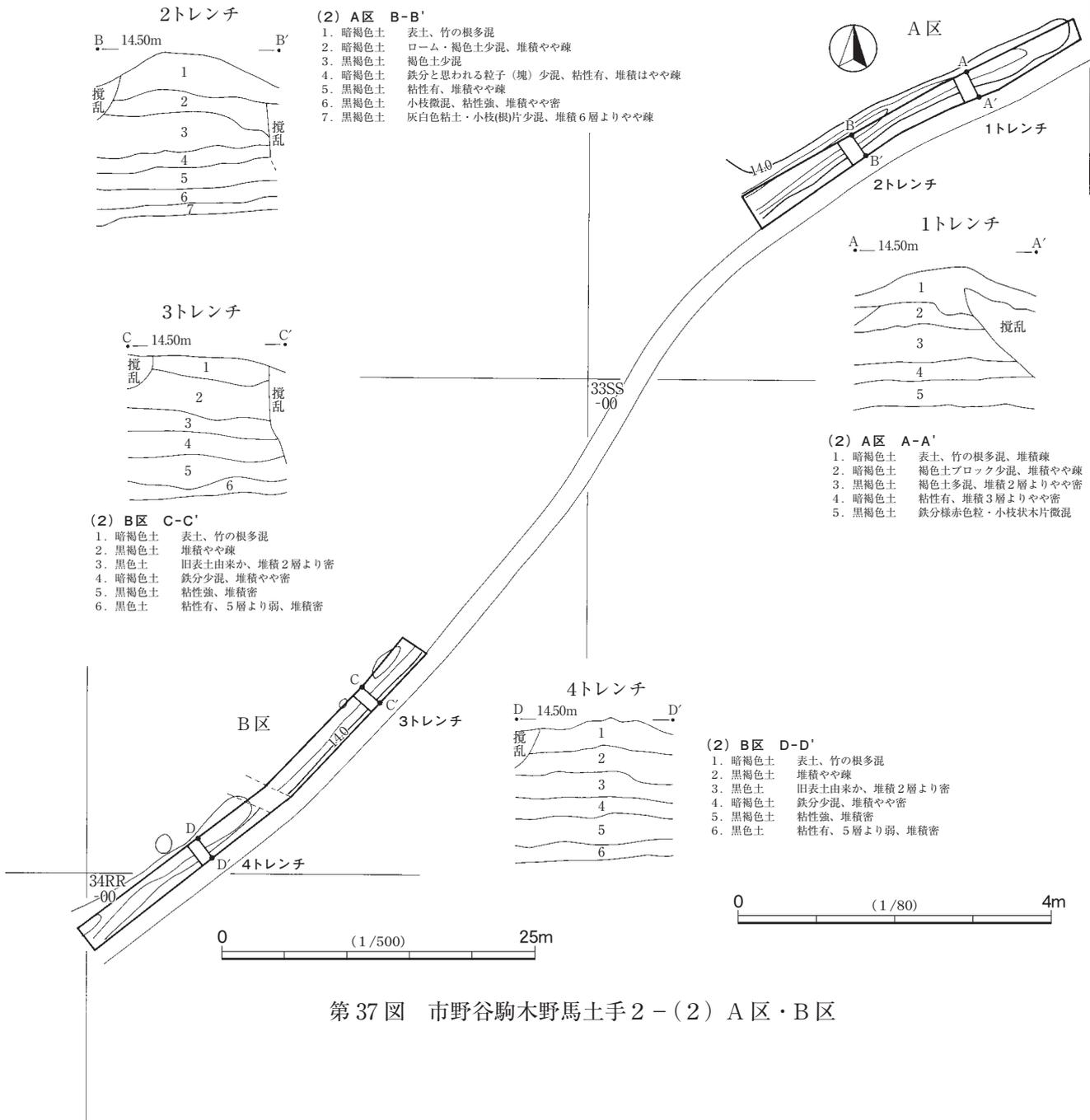
1. 表土
2. 野馬土手の崩落土
3. ハードブロック混
4. ハードブロック混
5. ソフトローム土主体、ハードローム混
6. ソフトローム土主体
7. ハードローム主体
8. ハードローム主体



0 50m (1/1000)

0 4m (1/80)

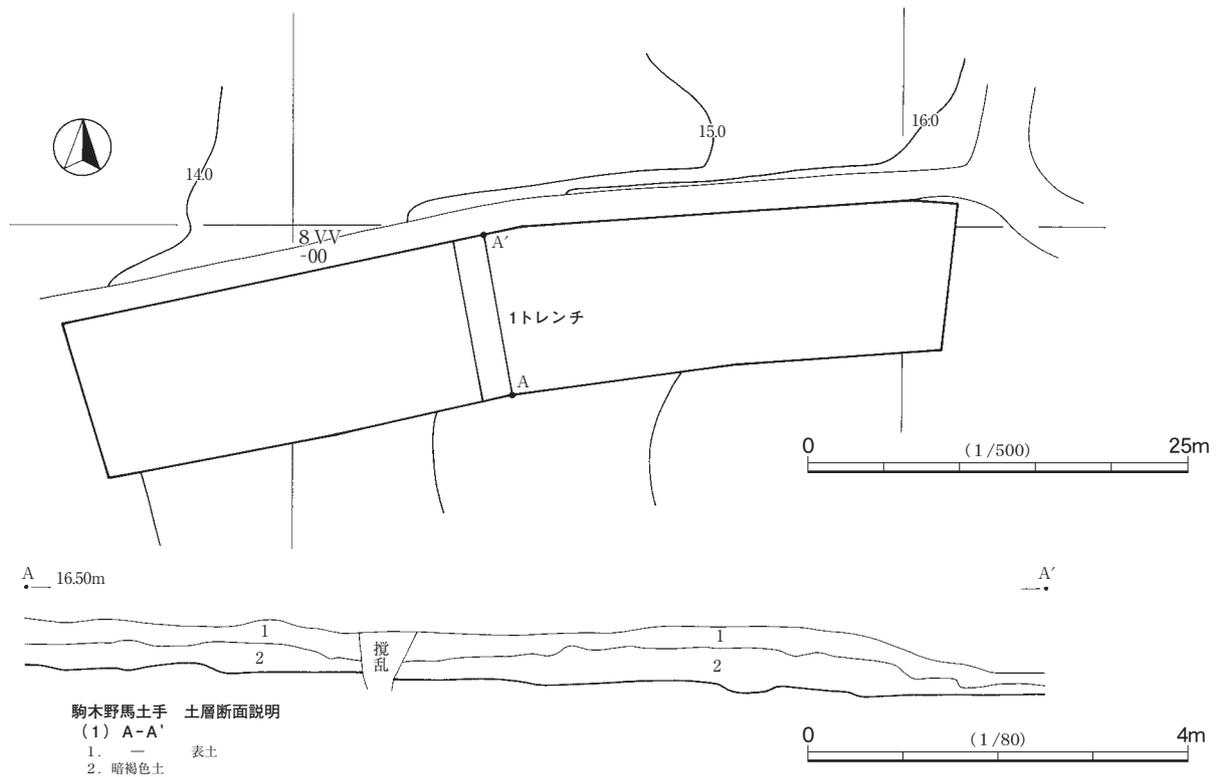
第36図 市野谷駒木野馬土手1-(1)



第37図 市野谷駒木野馬土手2-(2)A区・B区

第4表 市野谷駒木野馬土手調査概要一覧

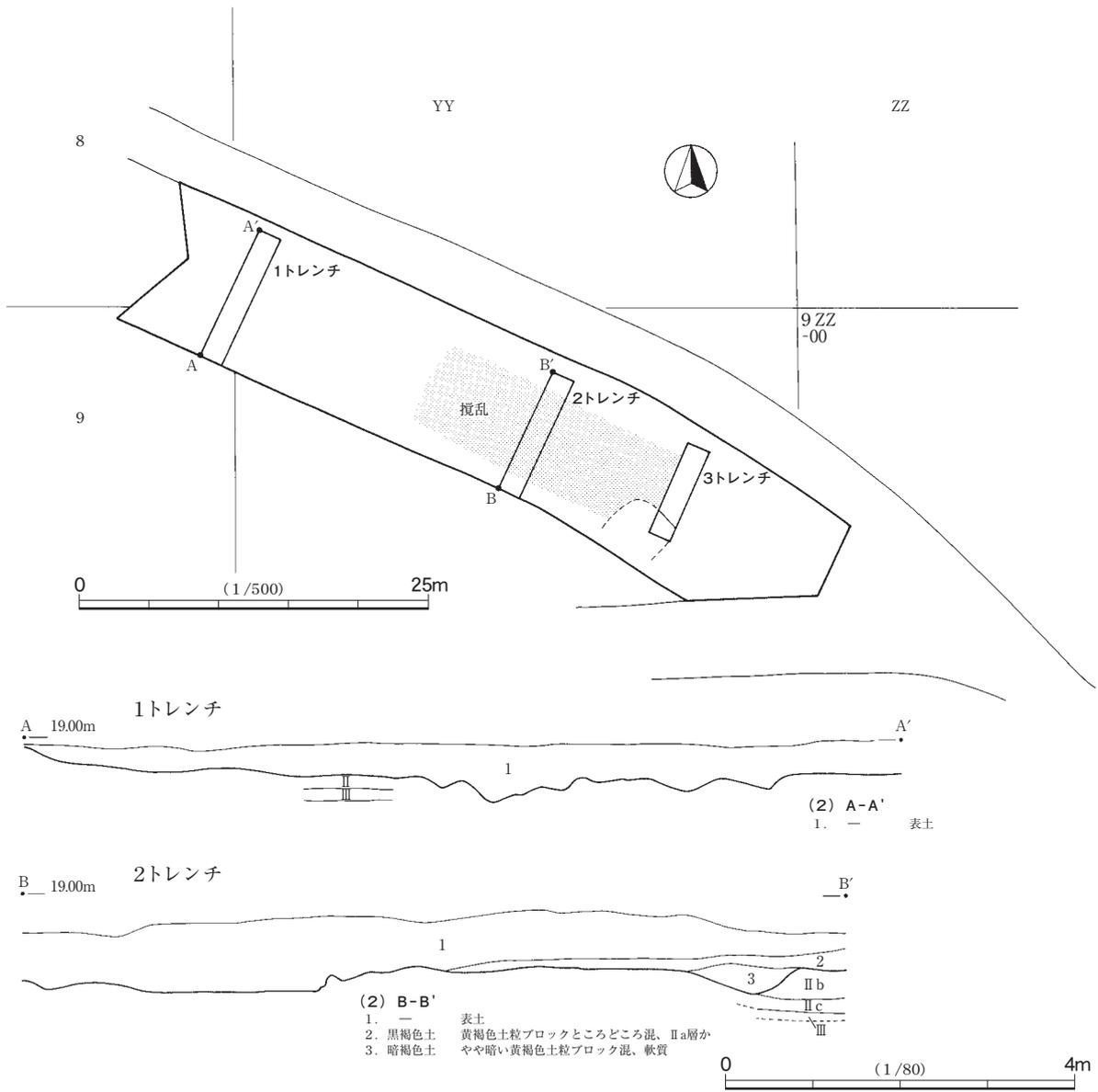
年度	調査回数	対象面積 (㎡)	挿図掲載番号	挿図番号	図版番号	全長(調査区内)		土手		溝		調査期間	所在地	調査区所見
						土手を確認できた長さ	推定される土手長	高さ(最大)	幅(最大)	深さ(最大)	幅(最大)			
平成14	1	2,884㎡	市野谷駒木1-(1)	38	6	160m	-	-	-	-	-	2003/1/14 ~ 2003/1/27	流山市西初石6丁目822ほか・柏市豊四季114-15ほか	果樹園地帯を通るため、野馬土手の遺存状態は良好であった。野馬堀は当地点においては確認されなかった。
平成23	2	99㎡	市野谷駒木2-(2)A・B区	39	7	10m	-	-	-	-	-	2011/11/16 ~ 2011/11/25	柏市豊四季121-2の一部ほか	今回調査された範囲内から野馬土手の痕跡は確認されなかった。
		2,983㎡				170m								



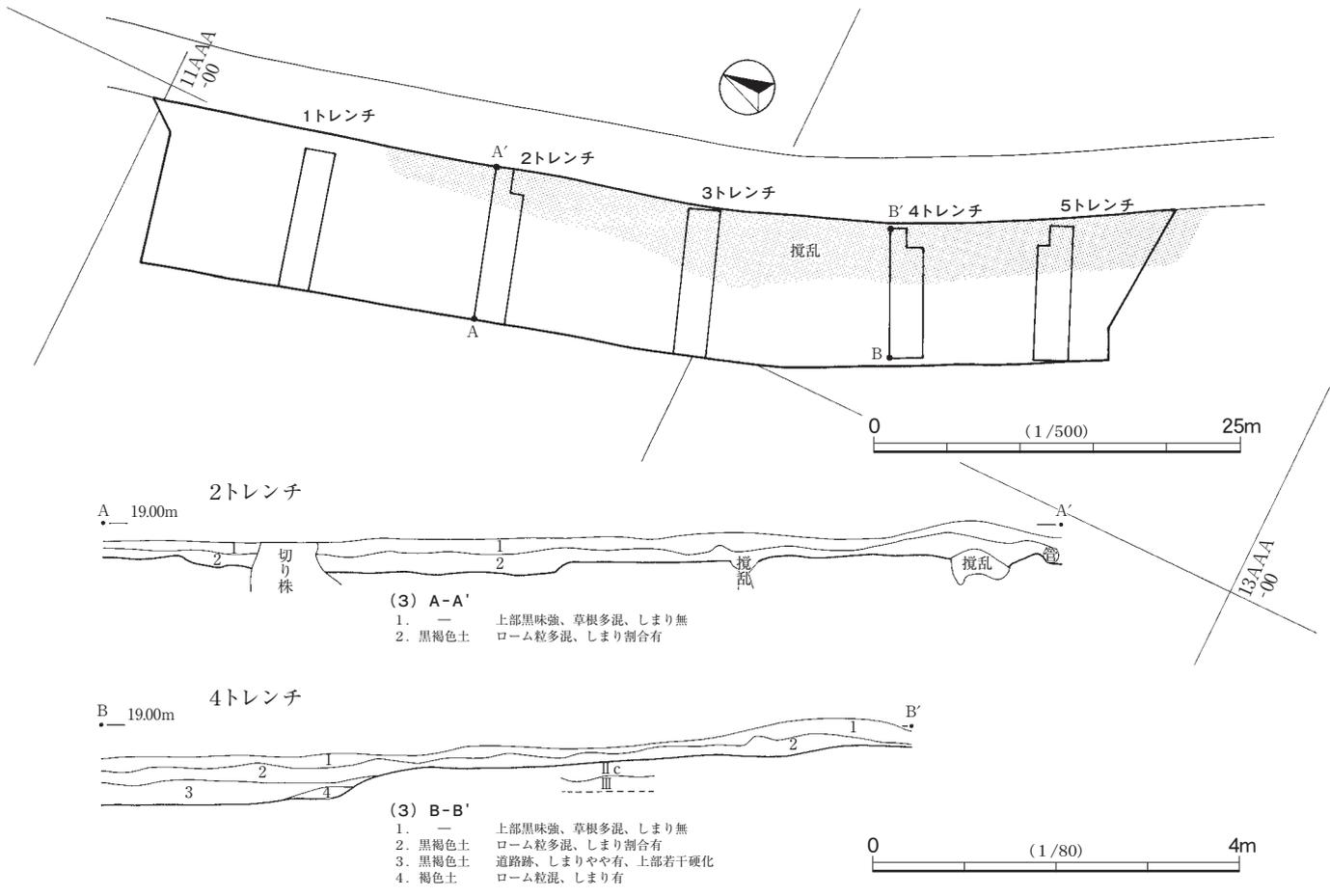
第38図 駒木野馬土手1-(1)

第5表 駒木野馬土手調査概要一覧

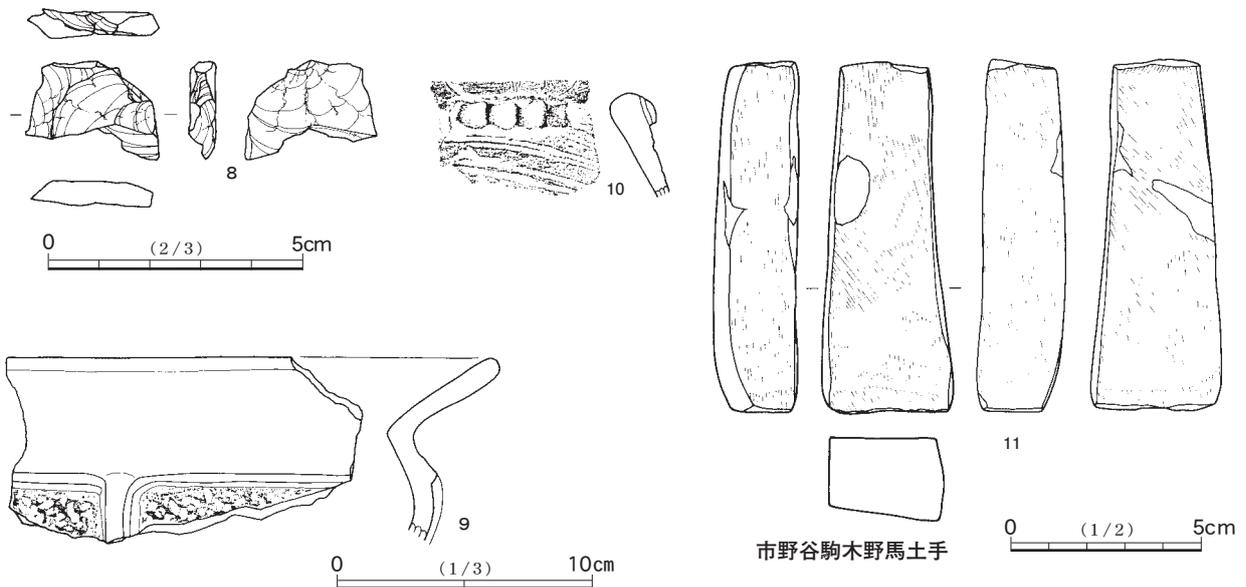
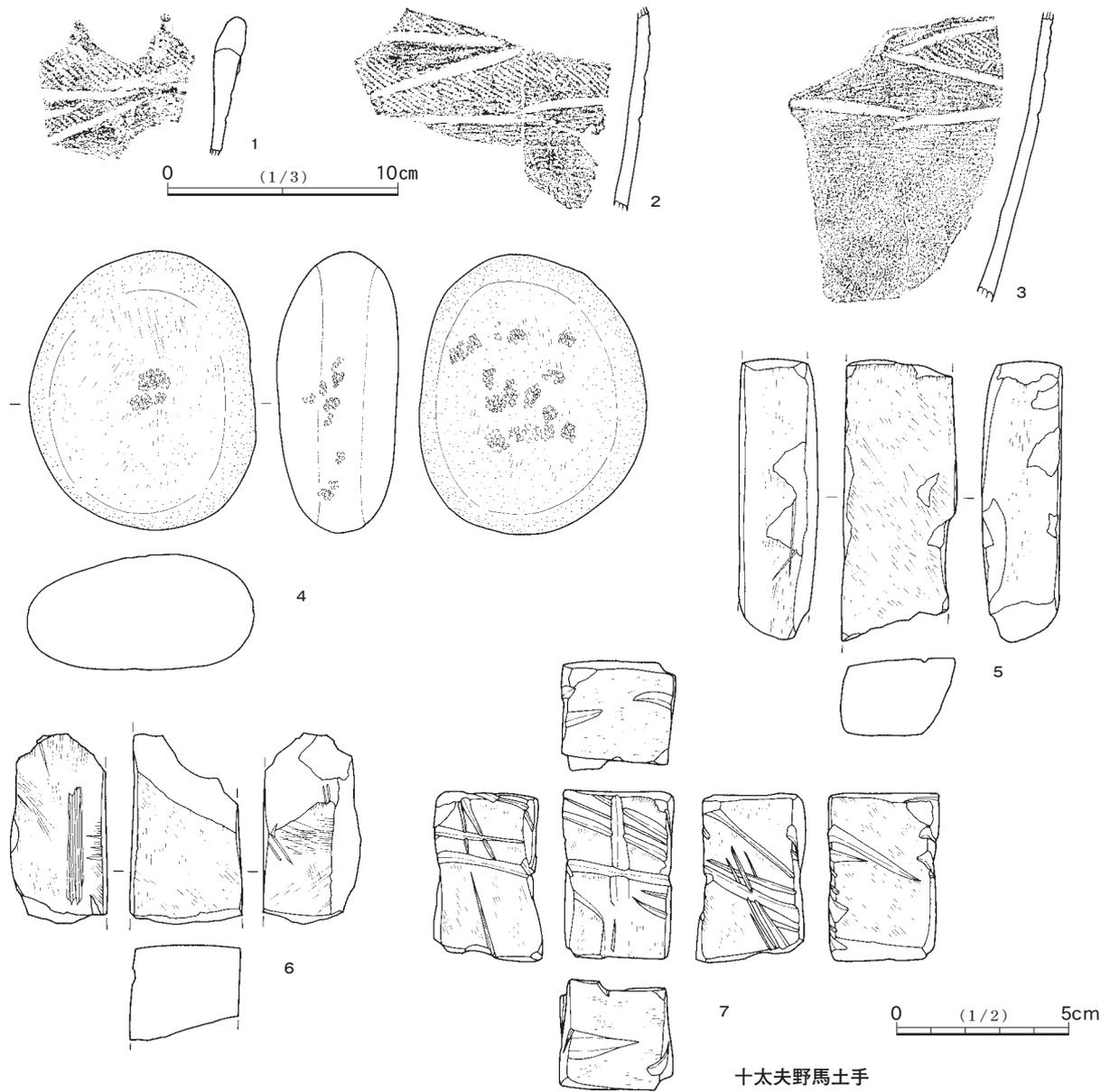
年 度	調査 次数	対象 面積 (㎡)	挿図掲載 番 号	挿図 番号	図版 番号	全長(調査区内)		土 手		溝		調査期間	所 在 地	調 査 区 所 見
						土手を確認 できた長さ	推定される 土手長	高さ (最大)	幅 (最大)	深さ (最大)	幅 (最大)			
平成 16	1	600㎡	駒木 1-(1)	35	7		推定 (58) m	-	-	-	-	2004/11/1 ~ 2004/11/5	流山市駒木 375-1 ほか	周辺の状況から、大堀川に向 かい谷に沿って野馬土手が続 くと想定されたが、調査区内 に野馬土手の存在を確認する ことができなかった。
平成 22	2	490㎡	駒木 2-(2)	36	7	43m	-	-	-	-	-	2010/1/4 ~ 2010/1/8	流山市駒木 376-7 の 一部ほか	早い段階での削平が行われた 可能性が高く、攪乱が多く入 る。野馬土手の残欠かと推定 できるわずかな高まりが、併 行する市道下に伸びており、 北東方面に進むと思われる。
平成 25	3	693㎡	駒木 3-(3)	37	7	97m	-	-	-	-	-	2014/2/17 ~ 2014/2/28	流山市駒木 345 ほか	南北に走る道路に沿って調査 区が設定された。トレンチ内 からは野馬土手あるいは堀の 痕跡は確認されなかった。
		1,783㎡				140m	58m							



第39図 駒木野馬土手2-(2)



第 40 図 駒木野馬土手 3 - (3)



第41図 調査区内出土遺物

第3章 まとめ

1 野馬士手について

今回報告される野馬士手は、小金五牧のうち上野牧と高田台牧に属する野馬士手である（第4図）。上野牧は、現在の地名で言うところと流山市東初石地区から十太夫地区に中心を持つ十太夫野馬士手2条、同じく上野牧のうち、市野谷駒木野馬士手である。

上野牧と隣接し、北側に広がる高田台牧のうち、駒木野馬士手は、上野牧との境とされる大堀川を望む台地上に築かれた牧の外周士手と思われる。

今回調査された高田台牧、上野牧は小金牧の支配に属し、大まかな外周は第4図に示した範囲、最大100km²の範囲とされる。なお、この両牧北端部分は、第4図にある日立団地付近にあった士手により分離していたものと考えられる。

牧の構成の概略は、

① 野馬士手（大士手・野馬堀）

牧の外周、放牧エリアをいわゆる野馬士手で囲むものである。傾斜地などでは士手ではなく土手を低く堀を深くする箇所もあるといわれる。士手はおおむね高さ3m、堀は2m前後を測る。2重に作られる場合は、牧内を低く、牧外の土手を高くすることにより馬の牧外への逃亡をしにくくしている。

② 勢子士手（中士手・大込士手）

野馬を捕込まで集めて移動する際に誘導路として、あるいは広大な牧内をいくつかのゾックとして区切る士手である。勢子は集めた馬をこれらの士手に沿って移動させることで捕込へ誘導する。勢子士手の中でも捕込へ追い込みやすくするために「大込」士手が築かれる。

また野馬が集落、田畑への侵入することを防ぐためには野馬除士手が設けられる。こちらも土手と堀により構成され、野馬の侵入を防ぐために、場所によっては士手に対して堀が主となる場合もあるとされる。

③ 捕込（とりこめ・とっこめ）

毎年1回の「野馬捕」において馬を捕獲する主要な施設である。約200m四方の士手が築かれ、中は3区画に分けられる。まずは追い込んだ馬を集める区画（捕込・捕場）・捕獲した馬を収容する区画（溜込・分込）、そして再放牧する馬（親馬・当歳馬）を入れる区画（払込）が設けられるのが基本的な構造となる。

その他の施設としては、出入り口に至る木戸や水飲み場などがあり、遺構としては残されないが、地名などに残る場合がある。木戸については小字などに残る場合が多いが、牧の場内外への出入り口や牧内の区画の士手に設けられたと考えられている。特に、上野牧は日光往還道が域内を縦貫していることから、複数個所に設けられていた可能性が高い。このほかに幕府御用となる良馬（乗馬用）を集め飼育する御用と呼ばれる区画が設けられる。上野牧では国産馬改良のためにオランダから輸入した馬を飼育していたことが知られており、病死した馬を祀った「オランダ観音（延宝4年・1676年）」が今回調査された十太夫野馬士手範囲内（第5図-11Z区）に設けられている。

当地域は、古代からの牧としての利用と、江戸時代の早い時期からの新田開発とが複雑に入れ込むことから、野馬土手あるいは野馬除けの土手などは開発の進展とともに定期的にあるいは必要に応じて改修・改築の手が入っていたと思われ、時期による野馬土手の変遷はとらえきれないものがある。

個々の野馬土手についての概要をみるならば、駒木野馬土手（第5図A～B）は今回の調査においては土手の構造などを明確にとらえることはできなかったが、本来の想定される土手の位置からは、第4図に示した高田台牧の外周、大堀川を望む台地縁辺に設けられ、旧来より知られる野馬土手に接続し、北上してゆく列につながることが想定できる。高田台牧の西側境界を構成する馬土手であったと考えられよう。

上野牧の野馬土手のうち十太夫野馬土手は大堀川を境界とするように高田台牧と向かい合わせに台地上に設けられ、台地縁辺に沿う列（第5図C～D）と、並行するように例幣使街道方面へ向かう土手（第5図E～F）が第4図に示した野馬土手外周のラインにつながってゆき、その延長は市野谷駒木野馬土手方面へとつながる。この付近は築造時期が明確ではないため確定しえないが、市野谷駒木野馬土手（第5図G～H）は牧の北側と南側を区切るかのような位置にあり、牧内の仕切りを目的とした中土手となる可能性もある。

土手の総延長は「東葛飾郡誌」によれば、小金牧は（外周総）延長75,967間（約140km弱）とされ、別称とも言える「40里野」（約157km）としても外周総距離にそれほど差異は無い。

この範囲の牧内で管理飼育されていた馬の頭数については、3,000頭とも5,000頭とも言われるが、「寛政の牧の改革」（寛政5年・1793～）により、繁殖成績が芳しくなかった小金牧において5年間の捕馬売り払いを停止して増産計画が立てられた。その成果として3年後の寛政8（1796）年には2,089頭の増加が報告され、5,013頭が小金牧において確認された（野馬方諸事元極書抜下書 川上一男家蔵）。

また「下総国旧事考」に記されている数値によれば、「上野牧」に馬数300頭、「高田台牧」に450頭、「中野牧」300頭、「下野牧」に300頭、「印西牧」150頭の馬がいるとされている。前述の5,000頭との差異については牝馬の頭数の集計かと思われる。自由放牧による繁殖であるが、牧士による牧内の管理が行われていることを考えると以上の頭数が基本的な飼育数であろう。

江戸時代に刊行された書物には40里野とも記され、「広い」「大きい」の代名詞ともされ、江戸近郊の名所でもあった。俳人の小林一茶は、15年の間に50回以上も流山を訪れている。江戸を出て日光街道から流山に向かうには上野牧あるいは高田台牧を通り、向かったと考えらる（注）。当時の牧の様子が文人の手により残されており、自然放牧下における牧の様子がしのばれる。また松戸市小和清水公園には、「母馬が番して呑みます清水かな（「八番日記」文政2年、1812）」の句碑が建てられており、牧を題材とした句も知られる。その中には牧内（小金原）を禁煙としていたことを示す句も残されている。

「しぐるゝや煙草法度の小金原」（「八番日記」文政3年、1813）

「永き日や煙草法度の小金原」（「文政句帖」文政5年、1822）

これは牧草地として野火の防止、山火事などの管理上の重要課題でもあったであろう。

捕馬は、主に3歳の若駒が捕獲の対象となり、乗馬用と使役馬とに分けられる。この捕獲された使役馬とされた野馬の販売は江戸時代後期、旧牧エリアの開墾払い下げ、薪炭材払い下げなどとともに、困窮する幕府の財政の一端をわずかなりとも担ったことであろう。

2 野馬土手から出土した遺物について

当野馬土手に近接して市野谷周辺の遺跡群（第2図）が所在しており、市野谷立野遺跡からは1,000点を超える旧石器時代の石器の出土が知られる。今回チャート製の剥片が出土していることから、当野馬土手周辺にも関連する遺跡が所在した可能性を考えることができる。また縄文時代中期から後期に関しては、近隣の遺跡、特に十太夫野馬土手と隣接する大久保遺跡から第41図10と同類の土器が出土していることが報告されており、土手の盛り土削平などにかかわる作業によって、関連した遺構あるいは遺跡周辺から持ち込まれた可能性が考えられる。

(注)「寛政三年紀行」松戸馬橋から流山に向かう道筋での紀行文である。

廿九日小金原に懸る此原は公の馬を養ふ所にして長さ四十里を以て四十野といふ草はあく迄青み花も稀に咲て乳を呑駒は水に望む有伏有仰ぐ有皆々食に富ておのがさままたのしむ是彼等が全盛といふべししかるに霜降木の葉落る頃はいかめしき牧狩有て柱のやうなる荒縄もて口を割首を縛り青竹のふとくたくまきにて息のねのたゆる程に敲れつつ武門の貢に曳るる夏は親子一所にして祝ひ今は別々の悲を見る馬の心には冥吏呵責のくるしみとも思わぬ余念なく狂ふにつけても行末思ひやられてあはれ也。

馬の子と一所に延蛙かな（寛政3年）

馬の子の故郷はなるる秋の雨（享和3年）

小金五牧における野馬捕りの時期は、春（2～4月）、夏（6～8月）、冬（10～12月）のいずれかであった。この紀行の記された、寛政期（1789～1800）から文政期（1818～1830）までは冬（9～12月）に行われており、「霜降木の葉落る頃」・「故郷はなるる秋の雨」である。それ以降の廃止までは春（2～4月）に行われた。

参考文献

- 1 清宮秀堅 下総国旧事考 1905
- 2 千葉県東葛飾郡教育会 千葉県東葛飾郡誌 1923
- 3 佐倉市 1973 『佐倉市史』 佐倉市
- 4 松戸市 1978 『松戸市史 中巻 近世編 小金牧』 松戸市
- 5 松下邦夫 1979 『松戸歴史案内』 郷土史出版
- 6 佐藤 悟 1984 『一茶「寛政三年紀行」花岡百樹写本』 連歌俳諧研究
- 7 印西町 1992 『印西町史 資料集 近世編3』 印西町町史編纂室
- 8 印西町 1993 『印西町史 資料集 近世編4』 印西町町史編纂室
- 9 松戸市立博物館 1994 『牧と馬 かつて松戸は牧場「まきば」だった』 松戸市立博物館
- 10 柏市史編さん委員会 1995 『柏市史 近世編』 柏市教育委員会
- 11 松下邦夫 1996 『流山市史研究 第13号 近世小金牧の実測図』 流山市
- 12 白井市 2000 『広報しろい 小金牧の牧士資料』 白井市役所
- 13 青木更吉 2001 『小金牧 野馬土手は泣いている』 崙書房
- 14 流山市立博物館 2001 『流山市史 通史編1』 流山市教育委員会
- 15 青木更吉 2003 『小金牧を歩く』 崙書房
- 16 千葉県 2007 『千葉県の歴史 通史編 近世1』 (財)千葉県史料研究財団
- 17 千葉県教育委員会 2006 『県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧』 (財)千葉県教育振興財団
- 18 鎌ヶ谷市 2008 『国史跡下総小金中野牧跡保存管理計画書(案)』 鎌ヶ谷市教育委員会
- 19 宮本万里子 2012 『下総台地における牧景観の特徴とその変容過程』
東京大学大学院 新領域創成科学研究科 自然環境学専攻 自然環境形成学分野
- 20 (公財)千葉県教育振興財団 2015 『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書7』 (公財)千葉県教育振興財団
- 21 (公財)千葉県教育振興財団 2016 『白井市印西牧野馬除土手』 (公財)千葉県教育振興財団

写 真 图 版



例幣使街道

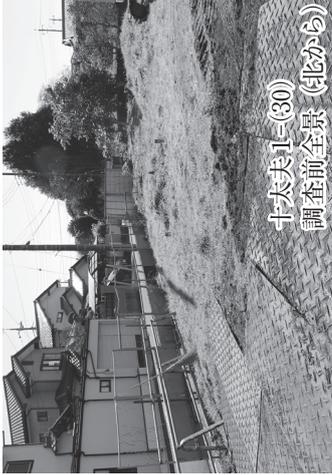
十太夫野馬土手

駒木野馬土手

大堀川

市野谷駒木野馬土手

坂川



十太夫1-(80)
調査前全景 (北から)



十太夫1-(80)
1 トレンチセクション



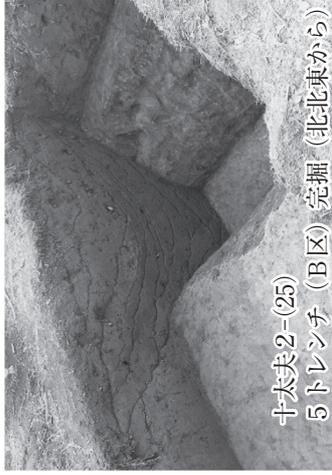
十太夫4-(14)
調査前風景 (北から)



十太夫4-(14)
1 トレンチセクション (東から)



十太夫2-(25)
北側土手全景 (南南西から)



十太夫2-(25)
5 トレンチ (B区) 完掘 (北北東から)



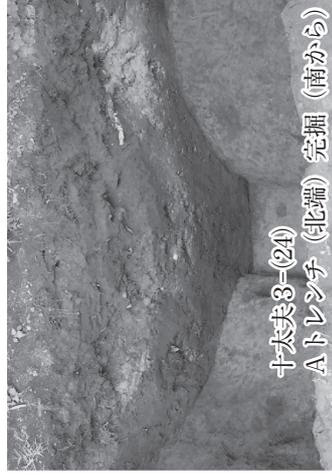
十太夫5-(20)
2 トレンチ完掘 (東から)



十太夫5-(20)
2 トレンチ完掘 (西から)



十太夫3-(24)
調査前風景 (南東から)



十太夫3-(24)
A トレンチ (北端) 完掘 (南から)



十太夫6-(7)
調査前風景 (北から)



十太夫6-(7)
調査前風景 (南から)



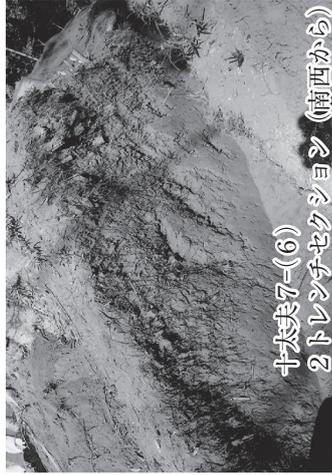
十太夫3-(24)
C トレンチ完掘 (東から)



十太夫3-(24)
S K-001 (C トレンチ内) (東から)



十太夫7-(6)
調査前風景 (北から)



十太夫7-(6)
2 トレンチセクション (南南西から)



十太夫 8-(22)
4 トレンチ西側部分 (南東から)



十太夫 8-(22)
10 トレンチセクシヨシ (北西から)



十太夫 10-(8)
2 トレンチ調査状況 (北から)



十太夫 10-(8)
1 トレンチ北面セクシヨシ (南から)



十太夫 9-(16)
調査前状況



十太夫 9-(16)
調査前状況 (北から)



十太夫 11-(11)
1 トレンチセクシヨシ (東から)



十太夫 11-(11)
2 トレンチセクシヨシ (南西から)



十太夫 9-(16)
調査前風景 (南から)



十太夫 9-(16)
3 トレンチ南壁セクシヨシ (北西から)



十太夫 12-(4)
調査前風景 (北から)



十太夫 12-(4)
全景中央部 (南から)



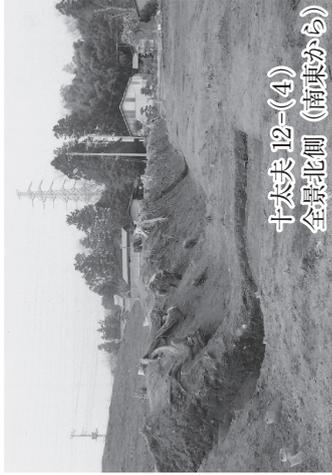
十太夫 10-(8)
調査前風景 (北から)



十太夫 10-(8)
主手掘前状況 (南から)



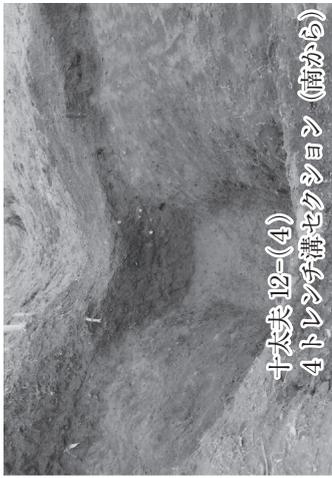
十太夫 12-(4)
全景南側 (西から)



十太夫 12-(4)
全景北側 (南東から)



十太夫 12-(4)
5 トレンチ中央 (南東から)



十太夫 12-(4)
4 トレンチ溝セクション (南から)



十太夫 15-(1)
調査前風景



十太夫 15-(1)
1 トレンチセクション (北西から)



十太夫 13-(21)
西部 (南から)



十太夫 13-(21)
1 トレンチ



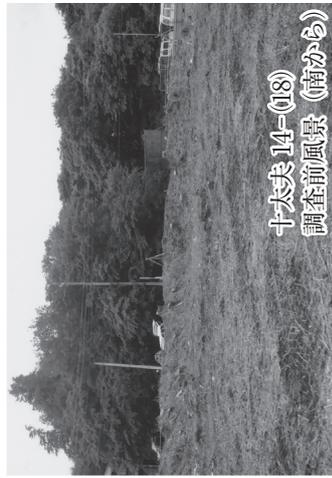
十太夫 16-(2)
調査前風景



十太夫 16-(2) B
B 区セクション



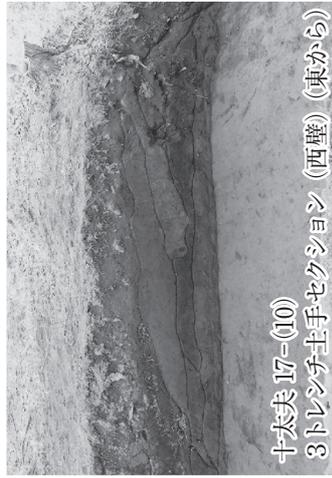
十太夫 14-(18)
調査前風景 (南東から)



十太夫 14-(18)
調査前風景 (南から)



十太夫 17-(10)
調査前風景 (南東から)



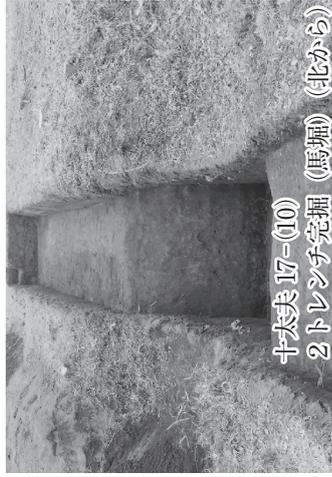
十太夫 17-(10)
3 トレンチ土手セクション (西壁) (東から)



十太夫 14-(18)
調査前風景



十太夫 14-(18)
1 トレンチ



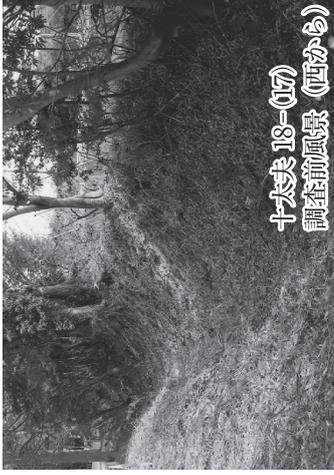
十太夫 17-(10)
2 トレンチ完掘 (馬堀) (北から)



十太夫 17-(10)
1 トレンチ溝セクション (西壁) (南から)



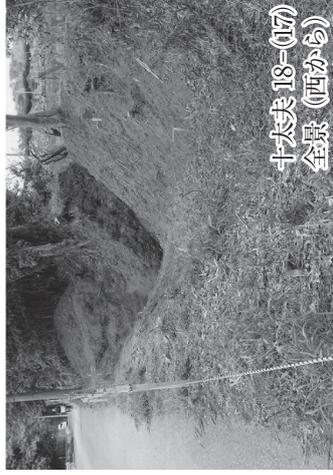
十太夫 18-(017)
調査前風景 (西から)



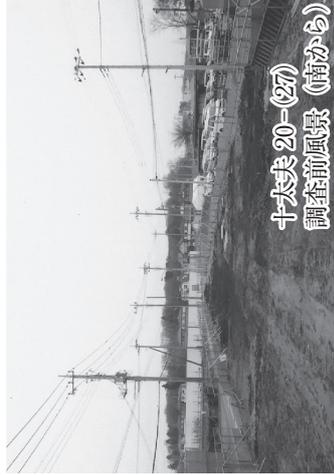
十太夫 18-(017)
調査前風景 (西から)



十太夫 18-(017)
3 トレンチ完掘セクシヨン (東から)



十太夫 18-(017)
全景 (西から)



十太夫 20-(27)
調査前風景 (南から)



十太夫 20-(27)
3 トレンチ完掘セクシヨン (南から)



十太夫 22-(3)
調査前風景



十太夫 22-(3)
セクシヨン



十太夫 23-(5)
調査前風景 (南から)



十太夫 23-(5)
調査前風景 (北から)



十太夫 23-(5)
1 トレンチ上手完掘



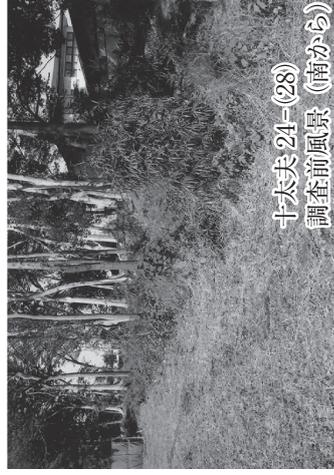
十太夫 23-(5)
2 トレンチ上手セクシヨン



十太夫 21-(012)
調査前風景 (南東から)



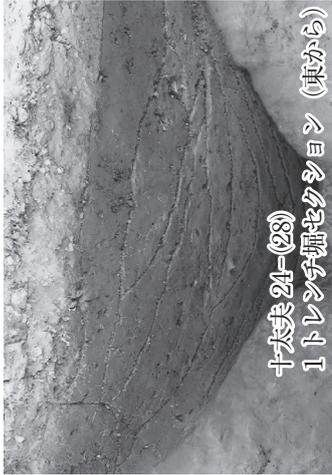
十太夫 21-(012)
3 トレンチ完掘



十太夫 24-(28)
調査前風景 (南から)



十太夫 24-(28)
1 トレンチ上手セクシヨン (東から)



十太夫 24-(23)
1 トレンチ掘セクシヨシ (東から)



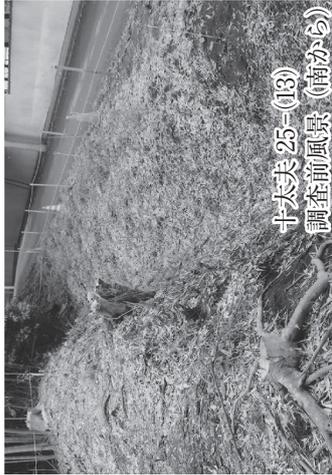
十太夫 24-(23)
3 トレンチ確認状況 (南西から)



十太夫 28-(15)
調査前風景 (北西から)



十太夫 28-(15)
1 トレンチ西側 (北から)



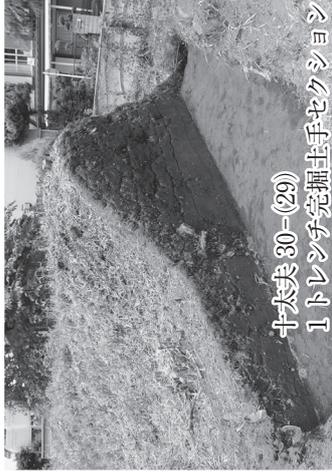
十太夫 25-(13)
調査前風景 (南から)



十太夫 25-(13)
1 トレンチ土手セクシヨシ



十太夫 30-(29)
調査前風景 (東から)



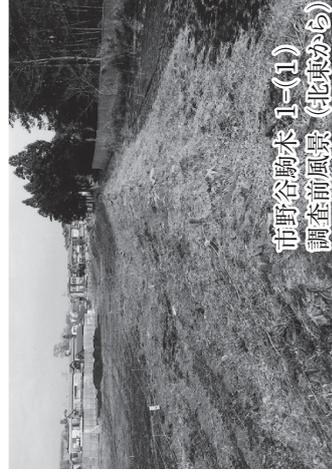
十太夫 30-(29)
1 トレンチ完掘土手セクシヨシ



十太夫 26-(26)
全景 (北西から)



十太夫 26-(26)
2 トレンチ完掘 (北東から)



市野谷駒木 1-(1)
調査前風景 (北東から)



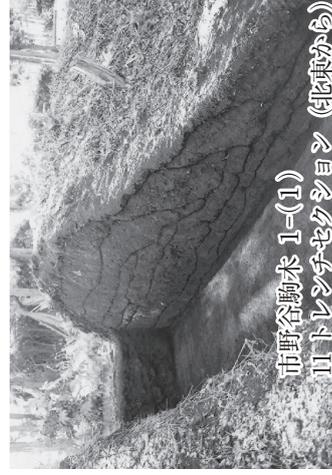
市野谷駒木 1-(1)
調査前風景 (西から)



十太夫 27-(9)
調査前近景 (南から)



十太夫 27-(9)
1 トレンチ完掘



市野谷駒木 1-(1)
II トレンチセクシヨシ (北東から)



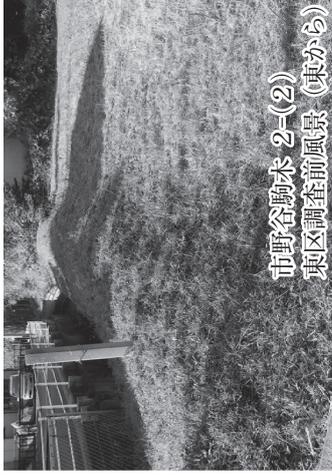
市野谷駒木 1-(1)
2 トレンチセクシヨシ



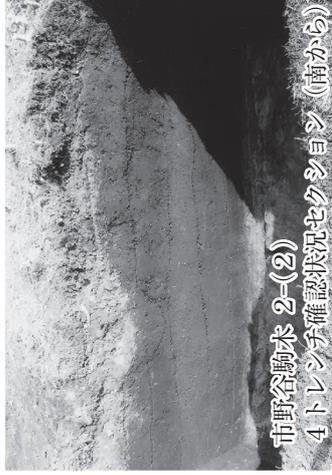
市野谷駒木 2-(2)
西区調査前風景 (南西から)



市野谷駒木 2-(2)
2トレンチ確認状況 (北西から)



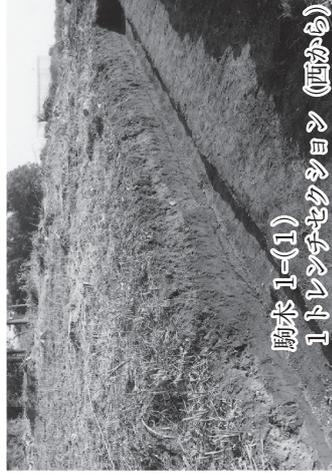
市野谷駒木 2-(2)
東区調査前風景 (東から)



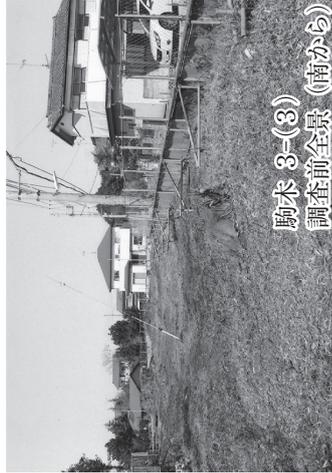
市野谷駒木 2-(2)
4トレンチ確認状況セクシヨン (南から)



駒木 1-(1)
調査前状況 (北東から)



駒木 1-(1)
1トレンチセクシヨン (西から)



駒木 3-(8)
調査前全景 (南から)



駒木 3-(8)
調査区全景 (南から)



十太夫調査風景



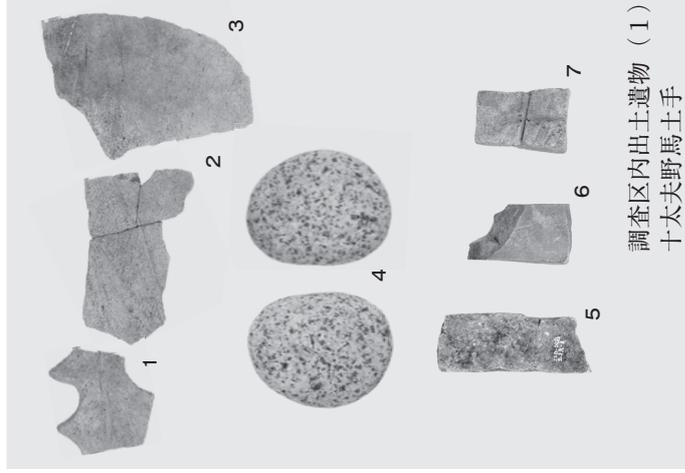
市野谷駒木調査風景



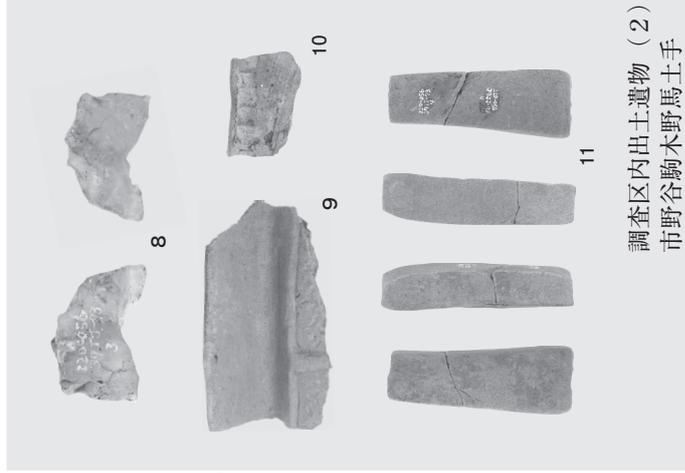
十太夫調査風景



駒木調査風景



調査区内出土遺物 (1)
十太夫野馬土手



調査区内出土遺物 (2)
市野谷駒木野馬土手

報告書抄録

ふりがな	ながれやましんしがいちちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	流山新市街地区埋蔵文化財調査報告書							
副書名	流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手							
巻次	9							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第767集							
編著者名	池田大助							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809 番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	2017年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
じゅうだゆうのまどて 十太夫野馬土手 (1)～(30)	ながれやましはついちちくまいぞうめ 流山市初石五丁目4番 地ほか	220	048	35度 52分 51秒	139度 55分 27秒	2006.2.1 ～ 2016.2.23	21,944	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
いちのやこまきのま 市野谷駒木野馬 どて 土手	ながれやましにしはついちちくまいぞうめ 流山市西初石6丁目 822ほか	220	056	35度 52分 51秒	139度 55分 15秒	2003.1.14 ～ 2011.11.25	2,983	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
	かしわしとよしき 柏市豊四季114-15ほか	217	035					
こまきのまどて 駒木野馬土手	ながれやましこまき 流山市駒木375-1ほか	220	060	35度 52分 27秒	139度 56分 12秒	2004.11.1 ～ 2014.2.23	1,783	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
じゅうだゆうのまどて 十太夫野馬土手 (1)～(30)	野馬土手	江戸時代	野馬土手・溝		縄文土器・石器・砥石			
いちのやこまきのま 市野谷駒木野馬 どて 土手 (1)～(2)								
こまきのまどて 駒木野馬土手 (1)～(3)								
要約	<p>今回調査された野馬土手は、徳川家康の江戸入府（天正18年1590）により、江戸周辺での軍馬の養成と使役馬の供給を目的として作られた幕府直営の牧の一部である。通説では慶長19（1614）年に小金牧・佐倉牧が設置されたとするが、牧土家の由緒書などに基づくため必ずしも明確ではない。慶長19年、同20年には大量の軍馬・使役馬を必要とする「大坂冬の陣・夏の陣」が起きており、実際には入府直後から逐次整備されていたものと考えられる。十太夫野馬土手および市野谷駒木野馬土手は小金牧のうち「上野牧」のほぼ中央部、牧内の外周及び広大な牧内を区画し、管理することを主目的とした土手と考えられる。駒木野馬土手は大堀川北岸に位置し「高田台牧」の外周土手となると思われる。調査区においては土手及び堀の一部が検出されているものの、併行して走る道路下に野馬土手にかかわる遺構があったものと想定される。</p>							

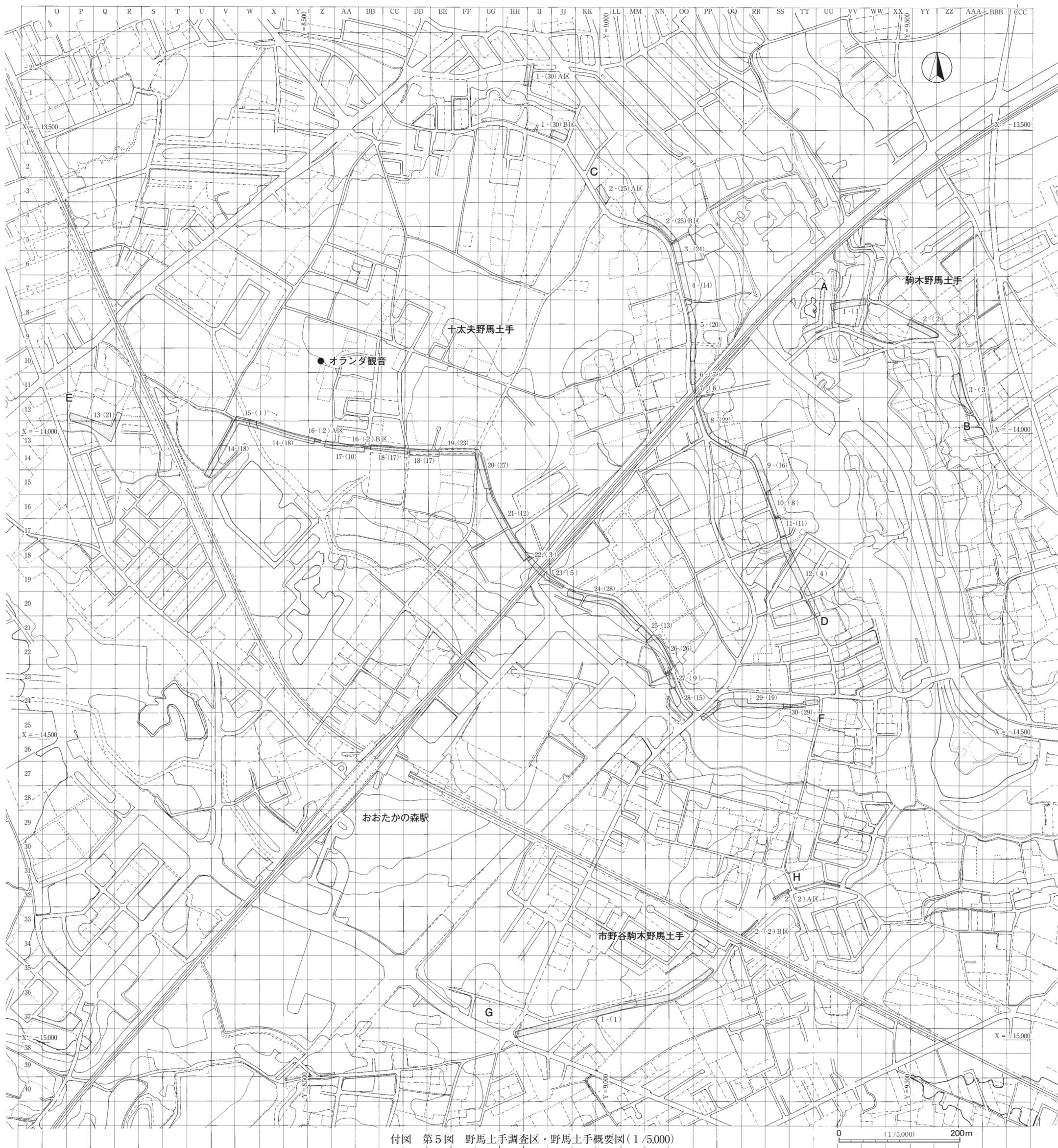
千葉県教育振興財団調査報告第 767 集

流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書 9

－流山市十太夫野馬土手、流山市・柏市市野谷駒木野馬土手、流山市駒木野馬土手－

平成 29 年 3 月 28 日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
発 行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿 6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡 809 番地の 2
印 刷	株式会社	ライフ 成田市東和田 595



付図 第5図 野馬土手調査区・野馬土手概要図(1/5,000)

0 (1/5,000) 200m